

情報好きな少女の青春
はまちがっている

銅英雄

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺ガイルの小説です。

更新遅めになるかもしれませんが。それでも良ければ是非読んでください。タグが増えたり減ったりするかもしれませんがのよろしくお願いします。

目次

第1章 高校生編

私と奉仕部	1
私とクツキー	12
私と小説の原稿	25
私とテニス	39
私と職場見学	56
私と誕生日プレゼント	70
私と奉仕部の合宿	86
私と孤立問題	94
私と話し合い	103
私と肝試し……そして合宿の終わり	114

私と花火大会	127
私と文化祭準備	143
私と文化祭本番	155
私と修学旅行前	169
私と告白作戦	183
私と京都デート	191
私と休日の過ごし方	198
私と生徒会選挙前	205
私と修羅場?	212
私と選挙の行方	222
私と合同企画	228
私と企画会議くプレストループから抜け出せく	232

私と1年の振り返り	242
私と手作りバレンタイン	246
私と卒業	252
第2章 大学生編	
私と大学生の日常	258
私と大掃除	263
私と彼の誕生日と……	267
私とガールズトーク	277
私と七不思議	288
私と麻雀 前編	294
私と麻雀 中編	300
私と麻雀 後編	306
佐野美咲 A√	

プロローグ 少年は絶望の淵に沈み女 性は少年を必死で助ける	313
第1話 少年は泣き女性を受け止め 人は羞恥で悶える	320

第1章 高校生編

私と奉仕部

私は平塚（ひらつか）先生に呼び出されて職員室にいます。はて、何か呼び出されるようなことをしましたかね？

読者の方々に自己紹介をしていませんでしたね。私は剣由輝子（つるぎゆきこ）。情報収集が好きなどにでもいる女の子です。どこにでもない？知りません、知ったこととじありません。……つと、メタ発言はここまでにして平塚先生に呼び出された理由を聞かねばなりません。

由輝子「平塚先生、私は何故呼び出されたのでしょうか？」

平塚「本当にわからないのかね、剣」

由輝子「わかりません」

平塚「無表情で言うなよ……」

私は無表情な人間だと言われているらしいですが……そこまでですかね？

平塚「まあいい……。君を呼び出したのはこの作文についてだ」

そう言つて平塚先生が私に1枚の作文用紙を渡しました。確か『高校生活を振り替

えって』というテーマの作文でしたね。特に振り替えることはないと言いたでしたっけ。ということとは……。

由輝子「先生はこの作文を書き直せと伝えるために私を呼び出したわけですか……。お疲れ様です。書き直して提出しますね」

私は平塚先生に劳いの言葉をかけて新しい作文用紙を受け取ろうとしたとき

平塚「まあ待て、君に質問したい」

質問？何を聞くのでしょうか？

由輝子「構いませんよ、何でしょうか？」

平塚「その、友達はあるかね？」

言いにくそうに平塚先生は私に尋ねました。

由輝子「特に親しい人はいませんか」

私は即答しました。まあ学内にはいませんが、学外ならそれなりにいます。

平塚「彼氏はあるのか？」

由輝子「彼氏はいませんが気になる人はいますね。恋愛感情があるかは甚だ疑問ですが……」

平塚「そうかそうか！私の思った通りだな!!」

ガハハと高笑いしながら平塚先生は言いました。失礼な人ですね。

由輝子「そんなだから生き遅れるんですよ。もう少し生活態度を改善するべきですよ」

平塚「ぐはっ！」

今の発言が効いたのだろうか平塚先生は泣きそうになって落ち込みました。なんだから将来が不安になってきました。

平塚「グスツ……！き、君の言葉で私は酷く傷付いた。罰を与える、着いてきたまえ」

平塚先生は泣きながら私に促す。

由輝子「その前にバイト先に電話しても構いませんか？時間がかかりそうなので」

平塚「ああ、構わないよ」

平塚先生に許可をとり、私はバイト先に連絡した。

???『由輝子ちゃん？どうしたの？』

由輝子「すみません美咲さん、学校の用事で少し遅れそうなんです」

私が電話をかけた相手は佐野美咲（さのみさき）さん。私のバイト先の上司で私が尊敬している人です。

美咲『そうなんだ……。まあ由輝子ちゃん最近働きすぎだと思うし今日のところは休んでいいよ！私の方で伝えておくから！』

由輝子「い、いいんですか？」

美咲『うん！由輝子ちゃんたまには休んだ方がいいよ！休むのも仕事の内だから!!』
由輝子「ありがとうございます！」

本当に美咲さんには頭があがりません。

由輝子「では、失礼します」

美咲『うん、またね!』

私は電話を切り、平塚先生のところへ向かう。

由輝子「お待たせしました。それで何をすればいいですか？」

平塚「ああ、取り敢えず着いてきたまえ」

平塚先生がズンズンと歩く。向かった先は……特別棟？

由輝子「特別棟にある教室で罰をするんですか？」

平塚「そうだ」

特別棟といえば奉仕部という名称の部活があると聞いたことがありますね。その部屋がこの特別棟の3階にあるような……。だとすると平塚先生は私に奉仕部に入れと言うつもりでしょうか？

平塚「ここだ、入るぞ！」

平塚先生はガララと勢いよく開けた。……ノックぐらいしましょうよ。常識ですよ？

??? 「平塚先生、ノックを……」

中にいる部員……雪ノ下（ゆきのした）さんも私が思っていることと同じことを言っていますよ平塚先生。

平塚 「スマンな雪ノ下。……どうやら比企谷の更正にてこずってるようだな」

雪乃 「彼が問題を自覚してないからです」

比企谷（ひきがや） という名前は聞いたことありますね。それに雪ノ下さんは確か『雪ノ下建設』という大きな会社の御令嬢でしたね。

姉の陽乃さんはたまに会いますが、妹さんの方は噂でしか聞いたことがありませんね。まあ情報は色々ありますが。

そして比企谷君。私と同じクラスで休み時間はいつも机に突っ伏してるか、本を読んでいます。内容が面白いのかたまに笑っていますね。見る人に寄ればニヤニヤしていて気持ち悪いといわれたりしてますが……。そして私が気になる人です。私はどうして彼が気になるのでしょうか？

八幡 「あの、さつきから更正だの何だの言ってるけど俺は別にそんなの求めてないんですけど……」

雪乃 「あら、あなたの人間性は他の人より著しく劣っていると思うのだけれど」

この2人にどんなやりとりがあったかはわかりませんがどうして雪ノ下さんはそこ

まで人に辛辣に言えるんですかね？

八幡「人に言われたくらいで変わる自分は『自分』とは言わねえだろ」
まあ正論ですね。私も似たようなことを思っています。

雪乃「あなたのそれは逃げてるだけでしょう？」

八幡「変わるつても現状からの逃げだろ」

その通りですね。そのあたりは個人の捉え方次第ですが……。

雪乃「それじゃあ悩みは解決しないし、誰も救えないじゃない！」

『救う』ですか……。雪ノ下さんは『救う』という言葉の重さを知ってるのでしようか？
とか私空気ですね。さながらエアークウマンといった感じでしょうか？まあ普段から存在感を消してますから多分比企谷君も私のことを知らないでしょう。

由輝子「ところで平塚先生、私はいつ入れればいいですか？」

平塚「ああ、すまない剣。入ってきて大丈夫だ」

由輝子「はい、失礼します」

雪乃「平塚先生、彼女はどうしてここに？」

平塚「彼女も比企谷と同じで孤独体質を持つ人間だ」

孤独体質って教師とは思えない失礼さですね……。

雪乃「成程、彼と同じで孤独体質の改善の依頼と言うことでしょうか」

平塚「ああ、彼女はバイトをしているから毎日は来れないがよろしく頼む」

雪乃「わかりました」

平塚「では、私はこれで失礼する」

平塚先生は去って行きました。何がしたいんですかね？

雪乃「2年F組の剣由輝子さんね。座ったらどうかしら？」

由輝子「では、失礼します」

私はそう言つて椅子にかける。

八幡「えつ、同じクラスなのか？」

雪乃「自分のクラスの人の名前くらい覚えてらどうかしら？」

雪ノ下さんは呆れながら比企谷君に言う。私自身余人に関わりませんからクラス内でも覚えていない人もいますと思えますけどね。

由輝子「気にしなくていいですよ比企谷君。これから覚えていけばいいんです」

私は比企谷君にそう言った。

八幡「お、おうそうか……。それにしても雪ノ下お前全校生徒の名前覚えてるんじゃないか？」

雪乃「そんなことはないわ、あなたのことなんて知らなかったもの」

雪ノ下さんは言う。……。今の発言はイラッとしましたね。

由輝子「知りたくなかった……の間違いではないですか？」

少なくとも『例の事故』があつた入学式の日、雪ノ下さんは比企谷君の顔を知っているはずですからね。無論名前を知らない可能性はありますが、それを差し引いても彼女は比企谷君に辛辣にすること自体が可笑しいんですよ。

ちなみに事故のことは陽乃さんから聞きました。

雪乃「……どういう意味かしら？」

由輝子「自分の胸に聞いたらどうですか？」

私と雪ノ下さんに一触即発の空気が流れる。どうも私は彼女が嫌いなようです。陽乃さんも大変ですね……。この人が家族だなんて。

八幡「お、おい落ち着けお前ら」

比企谷君が私達を宥めていると下校時刻のチャイムが鳴った。

雪乃「……今日の部活は終了よ。鍵は返しておくわ」

由輝子「はい、お疲れ様でした。お先に失礼します」

私は部室を出た。……帰る前に用を足しましょう。

くそしてく

学校を出ると比企谷君を見かけたので……。

由輝子「比企谷君、一緒に帰りませんか？」

と私は声をかけました。

八幡「え、なんで？」

由輝子「同じ部活の部員として親睦を深めたいと思ひまして」

八幡「俺入るって言つてねえんだけど」

比企谷君は奉仕部に入る気はないみたいですけど……。

由輝子「多分平塚先生が逃がしませんよ。比企谷君も平塚先生に連れていかれたんでしよう？」

八幡「確かに……」

由輝子「それに社会に出たらこういう理不尽に何度も遭遇します。今の内に慣れておいた方がいいですよ？」

八幡「俺の夢は専業主婦だ！働かない！働いたら負けだ!!」

比企谷君は本気で言ってますね……。

由輝子「そう言う人ほど将来社畜になるでしょうね」

ソースは私の母。今でも働きたくないっていつてますし。

八幡「俺はそんな運命には負けん！」

由輝子「いい人が見つかるといいですね」

などと話しながら私達は飲み物を買いに自販機に来ました。

私はMAXコーヒーを買って飲んだ。……ふう、やっぱりマツカンは最高ですね。この甘さで今日の疲れが取れます。流石は千葉のソウルドリンクですね！

八幡「お前、マツカンが好きなのか……？」

比企谷君が私に聞く。

由輝子「はい、私のソウルドリンクですよ」

八幡「マツカンのよさがわかるとは……」

由輝子「私は甘党なのでこの甘さが好きなんです」

そういえば比企谷君はMAXコーヒーが好きでしたね。

共通点があると距離がぐっと縮んだ気がします

由輝子「では、帰りましょうか」

比企谷君がマツカンを買ったのを確認すると私は比企谷君に声をかけた。

帰り道、比企谷君とは色々話しました。アニメが好きなこと、妹がいてとても大切にしていることを聞きました。

新しい情報GETですね。

由輝子「私はここで失礼します。比企谷君、また明日部活で会いましょう」

八幡「あ、ああ……」

比企谷君は照れながら私にそう言い、別れました。

〈自宅〉

今日は色々ありましたね。平塚先生に作文のことで呼び出しを受けて、そこから奉仕部に入り、比企谷君と雪ノ下さんに会って、比企谷君と一緒に帰ってお話したり……色々な情報が入りましたね。

明日はどんな情報が入るでしょうか。楽しみです。

私とクッキー

私達が奉仕部に入った（比企谷君は強制ですが）翌日。今日はバイトがないため部屋に行こうかなと思いい、教室を出ると平塚先生が比企谷君を殴り、捕まえてるところを見かけました。

由輝子「平塚先生、体罰は禁止ですよ」

平塚「剣か、今日はバイトではないのかね」

由輝子「はい、それよりも先程の現場は問題になります」

平塚「うぐっ……！しかしだな……」

由輝子「しかしもなにもありません。訴えられてからでは遅いんです。気をつけてください」

平塚「わ、わかった……」

トボトボと平塚先生は去って行きました。

由輝子「大丈夫ですか比企谷君？」

八幡「剣か……。大丈夫だ」

由輝子「気にしないでください。身体が痛むようでしたら肩を貸します」

八幡「い、いや大丈夫だから気にしなくてもいいぞ」

由輝子「……わかりました。ですが無理はしないでくださいね」

八幡「あ、ああ……」

由輝子「では行きましようか」

↳ 部室

八幡「うーす」

由輝子「おはようございます」

雪乃「比企谷君はもう来ないと思っていたわ、もしかしてマゾヒスト?」

もしも比企谷君がそういう性癖の持ち主でしたら平塚先生に殴られた時点で何らかの喜びを感じていることでしょう。

八幡「ちげーよ」

雪乃「だったらストーカー?」

八幡「なんでお前に好意を持っている前提なんだよ」

雪ノ下さんは比企谷君に好意を持ってほしいのでしょうか?そういう風に聞こえますが……。

八幡「お前さ、友達いんの?」

雪乃「そうね……まずどこからが友達なのか定義してもらってもいいかしら？」

八幡「あ、もういいわ。友達がない奴のセリフだから」

私もそう思います……。

八幡「お前人に好かれそうなのに友達いないとかどういうことだよ」

雪乃「私って可愛いから近づいてくる男子は大抵私に好意を寄せていたわ」

自分で自分を褒める人に碌な人はいませんよ。

それから雪ノ下さんの不幸自慢が始まりました。50回は女子に上履きを隠されたとかなんとか。私からしたらなんでもっと早い段階で対処しなかつたんですかと思つてしまいます。

雪乃「だから変えるのよ。この世界を……」

世界を変える。その言葉の重さを雪ノ下さんは理解していますか……？生半可な気持ちでその言葉を口にしていませんか……？

コンコン

ノツクの音が聞こえた。依頼人でしょうか？

??? 「し、失礼しまーす」

そう言つて1人の女子生徒が入ってきました。

確か同じクラスの由比ヶ浜（ゆいがはま）さんでしたね。由比ヶ浜さんはキョロキョ

口したと思つたら比企谷君を見つけて……。

結衣「な、なんでヒツキーがここにいんの!」

ヒツキーとは比企谷君のことでしょうか? 聞きようによつては引きこもりのように聞こえますよ。

八幡「ヒツキーつて俺のことか……? 引きこもりみたいだからやめてほしいんだけど……」

結衣「なんで? ヒツキーはヒツキーじゃん」

恐らくこれは何を言つても無駄なパターンですね……。比企谷君も観念した様子です。

くそしてく

由比ヶ浜さんはクツキーを作つて渡したい人がいるけど自信がないから手伝つてほしいという依頼のようです。……それつてここに来る必要がありますかね?

八幡「そんなの友達に頼めよ」

普通ならそうしますよね。

結衣「それは……友達とはこういうマジっぽい雰囲気合わないし……。それに知られたくないから……」

それって本当に友達って言えるんですか？

……由比ヶ浜さんのいるグループを見る限り彼女は必死で場を繋げようとする立場で三浦さんのご機嫌をとっているように見えますがそれでも彼女達にとってはそれが友情だったりするのでしょう。

結衣「それに平塚先生から聞いたんだけど、この部活ってお願いを叶えてくれるんだよね？」

そうなんですか？ そんな部活ならもつとこの部活は知名度がありそうですが……。

雪乃「いいえ、この部活は手助けをするだけ。飢えている人に魚を与えるのではなく魚の獲り方を教えるのよ」

ようするに自立を促すということですね。

結衣「な、なんかすごいね」

……多分由比ヶ浜さんはわかっていませんよ？

八幡「俺は何をすればいいんだ？」

雪乃「あなたは味見をしてくれればいいわ」

私達は依頼を遂行するために由比ヶ浜さんのクッキー作りに協力するために家庭科室へ行くことにしました。

くそしてく

実際に由比ヶ浜さんがどれくらい料理ができるのかわからないので、彼女一人でクッキーを作らせたのですが……。

雪乃「理解できないわ……。どうやってたらあれだけミスを重ねられるのかしら」

出来たのはジョイフル本田に売っている木炭といつても差し支えないものでした。渡したい人は炎タイプのポケモンか何かですか……？

雪乃「さて、どうすればいいか考えましょう」

雪ノ下さんはそう言いますがこんなの決まってるじゃないですか。

八幡「由比ヶ浜が2度と料理しない」

比企谷君は由比ヶ浜さんが料理をしないことを提案します。やっぱりそうなりますよね……。まあ2度としないのは大袈裟にしても常識の範囲でレシピ通りに作れば普通のものでできると思うんですよね……。

由輝子「由比ヶ浜さんが市販のクッキーを買ってそれを渡したらいいと思います」

ただ……彼女のこれはすぐに治りそうもありませんね。……急ぎで渡すのであれば市販のもので済ませた方がいいでしょう。だから私はそう提案しました。

結衣「それで解決しちゃうんだ!？」

雪乃「それは最終手段よ」

……一応視野には入れているようですね。

結衣「でもあたし、料理向いてないのかな？才能とかないし」

雪乃「解決方法は努力あるのみよ」

まあ、努力は必要でしょうね。時間はかかれど料理スキルはあつて困ることはありません。

雪乃「まずはその認識を改めなさい。最低限の努力をしないで才能を羨む資格はないわ」

結衣「でもさ、こういうのみんなやらないっていうし…やつぱり合っていないんだよ」

雪乃「その周囲に合わせようとするのやめてくれないかしら」

結衣「え……？」

雪乃「自分の不器用さや愚かしさの遠因を他人に求めるなんて恥ずかしくないの？」

雪ノ下さんは嘘を言わない。正直にきついことをはつきりと、オブラートに包むことを知りません。もしかしたらそれが原因で敵を作つてるのではないでしょうか？

結衣「か、かつこいいい……！」

雪乃「……は？」

どうやら由比ヶ浜さんは敵には含まれないようですが。

結衣「建前とか全然言わないんだ……。なんていうか……かつこいいい！」

由比ヶ浜さんは周りに会わせてばかりのようですからね。それは違うと言ってくれる人がいなかったのでしょう。

結衣「ごめん……次はちゃんとやる！」

雪ノ下さんにとつては初めての経験でしょうね。正論を指摘して謝られるのは。

八幡「…正しいやり方を教えてやれよ」

由輝子「それがいいと思います」

雪乃「そうね……。お手本を作つて見せるからその通りにやつてみて」

雪ノ下さんはそう言つてクツキーを作り始めた。

くそして

結衣「雪ノ下さんのとなんか違う……」

雪乃「どう教えればちゃんと伝わるのかしら」

八幡「なあ、なんでお前らは美味しいクツキーを作ろうとしてんだ？」

結衣「はあ？」

八幡「お前、ビツチのくせにまるで男心をわかつてないな」

結衣「ビツチ言うなし！」

由輝子「比企谷君は何かわかつたんですか？」

八幡「ああ、10分後にここへ来てください。俺が本当の手作りクツキーを教えます

よ」

比企谷君はニヤリと笑いながら言いました。10分後には答えがわかるでしょう。

くそしてく

雪乃「……それがあなたの手作りクッキーかしら？」

八幡「ああ」

成程、そういうことですか。

結衣「なんか、あんまり美味しくない……」

八幡「そっか……悪い、捨てるわ」

結衣「べ、別に捨てなくても……！そんなに不味くなかったし！」

八幡「……それはお前が作ったクッキーだ」

結衣「え？」

雪乃「どういふことかしら」

由輝子「比企谷君が言いたいのは由比ヶ浜さんが一生懸命作った姿勢を伝えればいいんです。それで男心が揺れるということでしょう。まあ私は女子ですからいまいちわかりませんが……」

結衣「そ、それでヒツキーも揺れるの？」

どうやら由比ヶ浜さんがクツキーを渡してお礼を言いたい相手は比企谷君のようですね。もしかして1年前の事故が関係してるのでしょうか？だとすると遅すぎるような気がするのですが……。

八幡「ああ、揺れるね。……って言うかヒツキーって言うな」

雪乃「由比ヶ浜さん、どうするのかしら？」

結衣「うん、あとは自分でやってみる！ありがとね雪ノ下さん、剣さん、ヒツキー」
そう言つて由比ヶ浜さんは帰つていきました。……後片付けくらいしましょうよ。

（翌週）

雪乃「あれでよかつたのかしら？」

今日はバイトまで時間があるので部室に顔を出して読書をしていたら雪ノ下さんが
そう言いました。

由輝子「私はあれでいいと思いますよ」

雪乃「そうかしら？私はもつと自分を高めるべきだと思うの」

由輝子「それも由比ヶ浜さんのためになりますが依頼の内容は手作りクツキーを作る
ことですから奉仕部の理念としてはこれで依頼は達成してます。人が食べられるレベ
ルであれば問題ないでしょう。ですよね比企谷君？」

八幡「まあ、そんなもんだ」

コンコン

雪乃「どうぞ」

結衣「やつはろー！」

由比ヶ浜さんが変な挨拶をして入ってきました。

雪乃「何か？」

結衣「あれ？あんまり歓迎されてない……。もしかして雪ノ下さんてあたしのこと嫌い？」

雪乃「嫌いではないわ。少し苦手なだけ」

結衣「それ、女子言葉じゃ同じだからね!？」

女子言葉ってなんか大雑把ですね。私は女子ですが使いませんか？

由輝子「私はバイトがありますのでお先に失礼します」

私はそう言って部屋を出ました。

結衣「待って、剣さん！」

由輝子「はい？なんででしょうか？」

由比ヶ浜さんはクッキー？の入っている袋を私に渡してきました。

結衣「剣さんにもあげる。お礼の気持ちだから！」

由輝子「……ありがとうございます。お礼、渡したい人に渡せたらいいですね」

結衣「うん、ありがと！剣さん」

由比ヶ浜さんがそう言い私はバイトに向かいました。

くそしてく

美咲「……由輝子ちゃん、それ何？」

バイト前に美咲が私を持っている袋に対して怪訝な表情を浮かべながら聞きました。

由輝子「これですか？お礼にともらったものです。本人曰くクツキーだそうです」

美咲「……私には炭に見えるよ」

由輝子「私もそう見えます」

別称『ダークマター』ですね……。

美咲「それ、食べるの……？」

由輝子「それが依頼ですからね。それに、一生懸命作ったものです。食べるのが礼儀であり、本人のためです」

依頼じゃなかったらそのまま棄てるつもりでしたけどね。

美咲「……ファイトだよっ！」

美咲さんの『ファイトだよっ！』頂きました。ダークマターがなんぼのもんです！

由輝子「はい、いただきます」

一口食べると私の視界は真っ暗になりました。バイトが終わってからにしたらよかったですね……。

くそしてく

気がついたら私は自室のベッドにいました。

どうやら美咲さんがここまで運んでくれたみたいですね。バイトの方も休みにしてくださったようです。

本当に美咲さんには頭が上がりません。

私と小説の原稿

由輝子「今日は学食にしましょうかね」

昼休み、私はすぐに教室を出て食堂に向かいました。

食堂に着いて私は日替わり定食を注文して席の確保に向かいました。特に誰かと会うわけもなく1人でのんびりと食べました。

↳放課後↳

今日はバイトがない日なので比企谷君と一緒に部活に向かっていると部室の前で雪ノ下さんと由比ヶ浜さんがなにやらこそこそしていたので……。

由輝子「雪ノ下さん、由比ヶ浜さん、何をしてるんですか？」

と私は2人に声をかけました。

結衣「ひやうっ!?!」

雪乃「っ!」

すると何故か2人は悲鳴をあげました。そんなに驚きましたかね……??

結衣「な、なんだユツキーとヒツキーか。ってかユツキーも急に声かけないでよ！」
雪乃「ええ、いきなりでびっくりしたわ」

ユツキー「ってなんだか比企谷君と漫才コンビを組めそうな渾名ですよね。」

由輝子「私の気配の遮断は特技の1つですから」

私の特技は108個あります。……多分。

八幡「すげえな剣……。ぼっちスキルとして羨ましいぞ」

雪乃「何が羨ましいのかわからないのだけれど」

結衣「なんか悲しいよ……」

由輝子「そんなことありませんよ。この技術は情報収集にとっても役に立ちますから」

実際かなり気配遮断スキルには助けられています。

八幡「それよか部室の前で何してたんだ？」

結衣「部室に不審人物がいるの」

八幡「はあ？」

先程までの2人の方が不審人物に当てはまると思いますが……。

雪乃「中に入って見てくれないかしら？」

八幡「はあ……」

比企谷君が溜め息混じりで部室のドアを開けました。

すると強風が吹き、肥満体のトレンチコートを着た男性が仁王立ちをしていました。??。「クツクツク…！まさかこんなところで出会うとは驚いたな……。待ちわびたぞ！比企谷八幡!!」

八幡「なんだと！驚いたのに待ちわびた!?!」

凄まじい矛盾ですね。

雪乃「あの不審者はあなたの名前を呼んできたけれど知り合いなの?」

八幡「し、知らん。こんな奴は知っていても知らん!」

知っていても知らない。関わりあいたくないという意味でしょうね。

由輝子「彼は2年C組の材木座義輝君ですよ」

結衣「ユツキー、知ってるの?」

由輝子「一応この学校の生徒の名前は全員把握しています。中でも彼は少々癖が強いので印象に強く残っています」

八幡「お前すげえな」

由輝子「これも情報収集の一環ですからね、それで材木座君はどんな用で奉仕部に赴いたのですか?」

材木座「……時に八幡よ、奉仕部とはここでいいのだな?」

私の存在をなかったことにされてるのでしようか?

雪乃「ええ、ここが奉仕部よ」

材木座「ふ、ふむやはりそうか。平塚教諭に助言頂いた通りなら八幡、お主は私の願いを叶える義務があるのだな？」

どうやら材木座君は女子と話すのが苦手の様子ですね。雪ノ下さんとも目を合わせようとしません。

雪乃「ねえ、なんなの？ 剣豪將軍って？」

八幡「あれは中二病だ」

結衣「ちゅーにびょう？」

由輝子「中二病とは中学2年頃に思春期にありがちな思考や言動を指します。後にそれが抜けてから酷く羞恥心などに苦しむことで中二病と呼ばれるようになりました」

八幡「というわけで病気ではない」

由輝子「ある意味心の病ですかね」

雪乃「つまり、彼は自分の作った設定でお芝居をしているのね？」

八幡「大体そんな感じだ。あいつは名前が一緒なだけで室町幕府13代將軍足利義輝を下敷きにした設定だ」

由輝子「比企谷君を仲間とみなしているのはおそらく比企谷君の八幡という名前を將軍の血筋・清和源氏が信奉していた八幡大菩薩を引っ張ってるんでしょうね」

八幡「そんな感じだ。鶴岡八幡宮とか知ってんだろ？」

雪乃「驚いた……。2人共詳しいのね」

八幡「まあな」

由輝子「歴史は好きですので」

特に好きなのは戦国時代と弥生時代です。

雪乃「大体わかったわ、あなたの依頼はその心の病を治すってことでいいのかしら？」

雪ノ下さんは材木座君に詰め寄る。

材木座「モ、モハハハ……これはしたり」

雪乃「その喋り方をやめてこっちむいて」

材木座君はすっかり雪ノ下さんに怯えてますね。

八幡「ん？これは……」

比企谷君が部室に散らばった紙を見つける。

由輝子「これは小説の原稿ですね……」

材木座「ご明察痛み入る。いかにもそれはライトノベルの原稿だ」

ラノベの原稿ですか……。

材木座「とある新人賞に応募しようと思ってるが友達がいないので感想が聞けぬ。

読んでくれ」

雪乃「何かとても悲しいことをさらりと言われた気がするわ」
結衣「……」

八幡「いろんな意味を含めた目でこつちを見んな」

由輝子「投稿サイトに載せてはいかがでしょうか？」

材木座「それは無理だ。あいつらは容赦がないからな、酷評されたら多分死ぬぞ我」
余程酷くなければ大丈夫だと思いますが……。

八幡「でもなあ……」

材木座「ん？」

八幡「多分雪ノ下の方が投稿サイトより容赦ないぞ？」

まあ最近のサイトは優しめですからね。

こうして材木座君が書いてきた小説をそれぞれコピーして持ち帰りました。

くそしてく

由輝子「ふむ、訂正部分が多めですね。これは朝になりそうです」

美咲「由輝子ちゃん、こんばんは！」

由輝子「どうしたんですか美咲さん？」

美咲さんが遊びに来たようです。

美咲「由輝子ちゃんに差し入れ持ってきたよ！」

由輝子「ありがとうございます」

美咲「それで、由輝子ちゃんは何してるの？」

私は美咲さんに依頼のことを説明しました。

美咲「クツキーの時といい大変だね由輝子ちゃん……」

由輝子「美咲さんの差し入れで気持ちが悪くなりました。徹夜になりますが頑張れそうです」

美咲「そっか……私はこれからバイトに行くから頑張つてね！ファイトだよっ！」

美咲さんの『ファイトだよっ！』頂きました。2徹でも3徹でも頑張れちゃいます！

（翌日）

朝、学校につくと比企谷君と由比ヶ浜さんを見かけたので挨拶しましょう。

由輝子「おはようございます。比企谷君に由比ヶ浜さん」

八幡「ああ、おはようさん……」

結衣「おはよう！なんかヒツキー元気がない？どしたー？」

八幡「いやいやいや、あんなの読んだら元気なわけないだろ。つっつかむしろなんで

あれ読んでお前らは元気なんだよ」

ああ（察し）……御愁傷様です。私は平気ですけど。

結衣「だ、だよねー！あたしもマジ眠いから……」

由輝子「私は1徹くらいなら問題ありません」

八幡「由比ヶ浜、絶対読んでないだろ……」

まあ由比ヶ浜さんは活字とか読むようには見えませんよね……。

く放課後く

八幡「お疲れさん」

由輝子「おはようございます」

私と比企谷君は部室に入り雪ノ下さんに挨拶をした。

雪乃「……………」

雪ノ下さんは寝ているようです。

雪乃「!!……驚いたあなたの顔を見ると1発で眠気が吹き飛ぶのね」

起きるなり比企谷君の顔を見てそう言いました。

由輝子「その様子だと苦戦したようですね」

雪乃「ええ、徹夜なんて久し振りだわ」

由輝子「雪ノ下さんはライトノベルを読んだことってありましたっけ？」

雪乃「いえ、この手のものは読んだことないしあまり好きになれそうもないわ」

由輝子「ラノベは無理な人は無理ですからね」

結衣「あー……あたしも絶対無理」

八幡「お前は読んでないだろ……。今すぐ読め」

比企谷君がそう言うのと由比ヶ浜さんは不満顔でパラパラと原稿を流し読みしていた。

材木座「頼もう！」

ドン！と材木座君が入室してきました。

材木座「さて、では感想を聞かせてもらおうとするか！」

材木座君は自信満々と言った様子で感想を求めています。

雪乃「ごめんなさい。私にはこういうのはよくわからないのだけれど……」

材木座「構わぬ。凡俗の意見も聞きたいところだったのな。好きに言ってくれたま

へ」

そう……と雪ノ下さんは一呼吸おいて、

雪乃「つまらなかった。読むのが苦痛ですらあったわ」

材木座「げふうっ！」

いきなりの辛辣な言葉から材木座君は奇声をあげました

材木座「ふ、ふむ……参考までにどの辺がつまらなかったのかご教授願えるかな？」

雪乃「まずは文法が滅茶苦茶ね。何故いつも倒置法なの？『てにをは』の使い方を知ってる？」

材木座「ぬぐう……それは平易な文体で読者により親しみを……」

雪乃「それは最低限まともな日本語が書けるようになってからではないの？それにルビだけど誤用が多いわ。『幻紅刃閃（ブラッディナイトメアスラッシュャー）』のナイトメアはどこから来たの？」

材木座「げふうっ！う、うう……違うのだ！最近の異能バトルではルビの振り方に特徴を……」

雪乃「ここでヒロインが服を脱いだのは何故？必要性が皆無よね。白けるわ」

材木座「ひぎい！そう言う要素がないと……」

雪乃「それと完結してない物語を人に読ませないでくれるかしら。文才の前に常識を身につけた方がいいわね」

材木座「ぴやあっ！」

雪乃「下さんの容赦ない口撃によりドサリと材木座君が倒れました。」

八幡「……その辺でいいんじゃないか？あんまり言ってもあれだし」

雪乃「まだ言い足りないけどまあいいわ。じゃあ次は由比ヶ浜さんかしら？」

結衣「え、えくと……難しい漢字知ってるね！」

材木座「ひでぶっ！」

作家にとってその台詞は禁句ですね。他にいいところがないと言ってるのと一緒に

結衣「じ、じゃあヒツキーどうぞっ！」

比企谷君は材木座君の肩をポンと叩き……。

八幡「で、あれって何のバクリ？」

と止めを刺して材木座君は転がって……。

材木座「ぶふっ……！ぶ、ぶひ……ぶひひ……」

と倒れてしまいました。

雪乃「あなた、容赦ないわね……」

結衣「ちよつと……フオローした方がいいんじゃない？」

八幡「じゃあ次は剣だな」

由輝子「はい」

私は材木座君のもとに行き感想を述べます。

由輝子「言いたいことの9割は雪ノ下さんと比企谷君が言いましたので、私からは余り言うことがありませんがとりあえず……。文法も滅茶苦茶、バクリが目立ち、先が読みやすすぎて楽しみがありません。ですがこの原稿には材木座君の『魂』を感じます。

なのでまずはこれを見てください」

私はもう1つコピーした原稿を材木座君に渡します。

材木座「こ、これは……？」

由輝子「それは私なりに文法を直したものです。続きを書くならそれを参考に書いてください。私でよければまた読みますよ？」

材木座「……………」

材木座君は俯き、3人もポカンと固まっています。はて

八幡「剣、それを昨日だけでやったのか？」

いち早く復活した比企谷君に問われたので……。

由輝子「はい」

私は返事をしました。

材木座「また、読んでくれるか？」

しばらくして材木座君は立ち上がりそう言いました。

八幡「おまえ……」

由輝子「まだやる気のようにですね」

材木座「無論だ。確かに酷評もされたがアドバイスもしつかりもらえた。……嬉しかったのだ。自分が好きで書いたものを誰かに読んでもらって感想を言ってもらおうと

いうのはいいものだな。この思いに何と名前をつけなければいいのか判然とせぬのだが読んでもらえることやつぱり嬉しいよ……!」

そう言つて材木座君は笑いました。

どうやら材木座君は中二病だけではなくて立派な作家病にかかつているようです。書きたいことがあるから書きたい。そしてそれを読んで人の心を動かせたならそれは素晴らしいことだと思ひます。それが作家病というもの。私が感じたのはこういうことだったのですね。

八幡「ああ、読むよ」

その言葉に何か思つたのか比企谷君も立派な材木座君の小説の読者になつたようです。すね。

由輝子「また持つてきてくれたら私達で読みますよ」

こうして材木座君の依頼は終了しました。

く帰り道く

材木座「少しいいか？」

由輝子「はい？」

材木座君が声をかけてきました。

材木座「アドバイザー感謝する。最後に名前を覚えてくれぬか？」

由輝子「剣由輝子です。覚えておいてくださいいね？」

材木座「無論だ。では劍嬢、またな！」

由輝子「はい、また」

私と目を見て話せるようになってますね。……………ある人は言いました。

『人は予想を越えてくる』

女子とまともに話せなかつた材木座君が私限定とはいえちゃんと話せていました。

まだまだわからないことが多いですね。また明日からも新しい情報を求めて頑張りますよ。

私とテニス

昼休みになると私は2日に1度の割合で特別棟の1階保健室の横でご飯を食べます。今日もご飯が美味しいと舌鼓をうっている、比企谷君が隣に座ってパンを食べ始めました。……私に気付いてないようですね。

由輝子「こんにちは、比企谷君」

八幡「うおっ！ 剣か……。いつの間にかここにいたんだよ……。？」

由輝子「比企谷君より先にここにいましたよ？ 2日に1度はここで食べています」

八幡「俺が気付かないほどとは存在感薄すぎだろ……」

由輝子「最高の褒め言葉ですね。それにしてもここは言い場所ですよね」

八幡「剣はいつからこここの存在を知ったんだ？」

由輝子「入学式の日在校内散策をしていたらここを見つけました。そしてここは穴場スポットになると私の勘がそう告げたので誰にも教えずにひっそりとここでご飯を食べることにしました。ここで吹く風は気持ちがいいんです」

八幡「そ、そうか……」

比企谷君が何故か引き気味ですがまあ気にしないでおきましょう。

結衣「あれー？ヒツキーにユツキーじゃん。なんでこんなところにいの？」

八幡「普段俺はここで飯食ってんだよ」

由輝子「私は2日に1度ここで食べています」

結衣「なんで？教室で食べればよくない？」

由比ヶ浜さんは他人のご飯事情に土足で入り込んできますね……。余り踏み込まれたくない人だっているんですよ？

由輝子「それより由比ヶ浜さんはどうしてここにいますか？」

質問で返しましたが関係ありません。

結衣「あたし？あたしはゆきのんとジャン負けでここにいます。罰ゲームって奴？」

八幡「罰ゲーム？俺と話すことが？」

うわあ……陰湿ですね。早く帰ってください。

結衣「ち、違うよ！ジュース買いにいくだけだよ！」

まあそんなところでしようね。……言葉足らずで様々な問題が発生することを由比ヶ浜さんは覚えた方がいいですね。

結衣「ゆきのん最初は『自分の糧くらい自分で手に入れるわ。そんな行為でささやかな征服欲を満たして何が嬉しいの？』とか言って渋ってたんだけど」

八幡「あいつらしいな……」

結衣「うん、けど自信ないんだ？って言ったら乗ってきた」

由輝子「彼女らしいですね」

結衣「勝った瞬間無言で小さくガッツポーズしてて…もうすっごい可愛かった」
些細な勝利でも喜べるのは良いことですけどね。

結衣「なんか今までもこの罰ゲームやってたけど初めてこれが楽しいって思えた」

八幡「そんな罰ゲームで内輪で盛り上がったってわけだ」

結衣「なによ、感じ悪！そういうの嫌いなわけ？」

八幡「内輪ノリとか内輪ウケとか嫌いに決まってるんだろ。何故なら俺は内輪にいないからなっ!!」

結衣「悲しい理由だ!？」

理由はともかく私も内輪ノリと内輪ウケが嫌いですね。

結衣「……ところでヒッキーは入学式のことって覚えてる？」

ふむ？

八幡「え？いや俺当日は事故にあってるからな……」

結衣「事故……」

遂に由比ヶ浜さんは伝えるのでしょうか？自分が事故の関係者であることを……。

八幡「ああ、その日は1時間位家を早く出たんだがな」

楽しみにしてたんてすかね？因みに私は2時間前には学校について周りを散策してました。そしてここでギリギリまでのんびりとしてました。

八幡「途中自転車漕いでたらアホな奴が犬のリードを放してな」
情報によるとそのアホな奴が由比ヶ浜さんなわけですが……。

八幡「それで犬が車道に飛び出しちまって車にはねられそうになったんだよ」
飼犬の管理はしつかりとしましょう。剣さんとの約束です。

八幡「それを俺がもう颯爽とヒーロー的に超カッコよく身を挺して庇ったんだよ」

HERO……。エアーマン、シャドーミストが3積みの時代が帰って来ないでしょうか？

八幡「アホな奴のおかげで入学早々3週間の連休貰えたが入学ボツチも確定した」

由輝子「3週間も経っていたら学校に行くのも気まずいでしょうね」

八幡「ああ、いざ登校するとなると自己紹介とかキョドって大変だったぜ……」

由輝子「それはお疲れ様です」

結衣「あ、アホな奴って……。ひ、ヒッキーはその子のことを覚えてたりしないの？」

八幡「痛くてそれどころじゃなかったしな」

まあそうでしょうね。ですが家族の方が教えていても可笑しくはないと思いますが……。

八幡「まあ印象に残っていないから多分地味な子だったんだろ」

結衣「地味……。それは確かにあの時スッピンだったし、髪も染めてなかったし、パジャマも超適当だったけど……。あつ、でもパジャマの柄クマさんだったからちよつとアホっぽいかも……」

由比ヶ浜さんがぶつぶつと言っていますが心の中に留めておいた方がいいと思います。私に聞こえますよ？

それにしても外に出るときはちやんと着替えた方がいいと思いますが。??? 「あれ？ 由比ヶ浜さんと比企谷君に剣さん？」

私達に声をかけてきたのは戸塚彩加（とつかさいか）君。見た目女子ですが立派な男子生徒です。いわゆる1つの男の娘という奴ですね。

結衣「あつ彩ちゃんだ。よつす！」

そこはやつはろーではないんですね。

彩加「よつす。3人はここで何を？」

結衣「やー、別に何も？」

いやいや、あなたはジュースを買いに行くんじゃないのですか？

結衣「彩ちゃんは練習？」

彩加「うん、うちの部すつごく弱いからお昼も練習しないと……」

控えめな戸塚君が弱いとはつきりと言うくらいに弱小チームのテニス部ですか……。

結衣「彩ちゃん授業でもテニスやってるのに昼練もしてるんだ。大変だねー」

彩加「ううん、好きでやってることだし。あ、授業のテニスといえば……」

八幡「ん？」

彩加「比企谷君ってテニス上手いよね」

八幡「えっ？」

結衣「そーなん？」

彩加「うん、フォームがすごく綺麗なんだよ」

八幡「いやーてれるなー！」

はっはっはっと笑う比企谷君。

八幡「で、こいつ誰？」

由輝子「私達と同じ2年F組の戸塚彩加君です。見た目女子ですが立派な男子です」

八幡「えっ？男？マジで!？」

彩加「すごいや剣さん。僕のこと一目で男の子ってわかったの？」

由輝子「はい、見た目こそ勘違いしがちで名前も女子の名前みたいですが女子にしては体がつちりとしていますので男子だとわかりました」

彩加「そんなこと言われたの初めてだよ！ありがとう剣さん！」

由輝子「気にしないでください。それより由比ヶ浜さんは雪ノ下さんのジュースはいんですか？」

結衣「えっ？あーっ！忘れてた！」

由比ヶ浜さんはバタバタと慌ただしく走って行きました。

彩加「あのね……比企谷君と剣さんに相談があるんだ」

八幡「相談？」

由輝子「何でしょうか？」

彩加「うん、うちのテニス部のことなんだけどすつごく弱いんだ。人数も少ないし3年が引退したらもつと弱くなると思う」

成程、大変ですね……。

彩加「それで……比企谷君と剣さんにテニス部に入ってもらえないかな？」

確かにテニスは得意な方ですが……。

由輝子「私はバイトがありますし、運動部に入る余裕はないですね。比企谷君はどうですか？」

八幡「入ってやりたいのは山々だが……」

由輝子「まあ雪ノ下さんが許可をくれるとは思いませんよね」

部活の時間になったら雪ノ下さんに聞いてみましょうか。望み薄ですが……。

くそしてく

それで雪ノ下さんに聞いてみたのですが……。

雪乃「無理ね」

……という即答をもらいました。

八幡「いや、無理っってお前さ……」

雪乃「無理なもの無理よ」

八幡「要は俺がカンフル剤としてだな……」

まあ考えは悪くありませんが……。

雪乃「最もあなたを排除するために部員が一致団結することはあるかもしれないわ。けれどそれが彼らの能力向上に向けられることはないわ。ソースは私」

八幡「成程……。え？ソース？」

雪乃「私は帰国子女なの。中学の頃に編入したのだけれど学校中の女子は私を排除しようとして躍起になったわ。でも誰一人として私に負けないように自分を高めるものはいなかった」

その人達は雪ノ下さんに嫉妬してたんでしょうね。

雪乃「……あの低能ども」

この話は地雷のようですね。これ以上はしない方向でいきましょう。

結衣「やつはろー！今日は依頼人を連れて来たよ!!」

彩加「あ、比企谷君に剣さん」

八幡「よ、よう……」

由輝子「こんにちは、戸塚君」

結衣「テニス部の彩ちゃん」

彩加「2人はどうしてここに？」

八幡「どうしてって俺は部活中だけ……」

由輝子「今日はバイトがない日ですので私もここで部活をしています。戸塚君はどうしてここに？」

結衣「なんてーの？あたしも奉仕部の一員じゃん？だからちよつとは働こうと思ってさ。そしたら彩ちゃんが困ってる風だったから連れてきたの！」

ふふんと胸を張る由比ヶ浜さん。

結衣「部員として当然のことをしただけだからゆきのんは気にしなくて大丈夫だよ！」

由比ヶ浜さんは当たり前のようなことだと言わんばかりに言っています……。

由輝子「雪ノ下さん、由比ヶ浜さんはいつから部員になったのですか？私の知る限り

だと入部届けを出していないような気がするのですが……」

雪乃「由比ヶ浜さん、あなたは部員ではないのだけれど」

結衣「違うんだっ!？」

雪乃「ええ、剣さんの言う通り入部届けをもらってないし、顧問の承認もないから部員ではないわね」

結衣「書くよ!入部届けくらい何枚も!仲間に入れてよ!!」

そう言つて由比ヶ浜さんは『にゆうぶとどけ』とルーズリーフに書きました。……由比ヶ浜さん、入部届けくらい漢字でちゃんとした用紙で書きましようよ。

雪乃「それで、テニスを強くしてほしいのよね?」

彩加「うん、強くしてくれるんだよね……?」

雪乃「由比ヶ浜さんがどんな説明をしたのか知らないけれど奉仕部は便利屋ではないわ。あなたの手伝いをして自立を促すだけで強くなるかはあなた次第よ」

彩加「そうなんだ……」

雪乃「由比ヶ浜さんも無責任なことを言いふらさないでほしいわ」

結衣「えっ?でもさ、ゆきのんとヒッキーとユッキーなら何とかできるでしょ?」

聞きようによつては挑発に捉えられる発言ですね……。しかも自分は何もしないんですか?

雪乃「……あなたも言うようになったわね。由比ヶ浜さん」

まあ無自覚でしょうけど……。

雪乃「いいでしょう。依頼を受けるわ。あなたの技術向上を助ければいいのよね？」

彩加「は、はい。僕が上手くなればみんな一緒に頑張ってくれると思う」

やる気なのはいいことですが戸塚君だけが強くなっても戸塚君を排除しようとする人がでてきては本末転倒であることに気付いているでしょうか？……まあ気にしていても仕方ありませんね。

八幡「具体的にどうやるんだよ？」

雪乃「そうね、放課後は部活があるから、昼休みに死ぬまで走って、死ぬまで素振り、死ぬまで練習かしら？」

いい笑顔で雪ノ下さんはそう言います。

由輝子「戸塚君は昼休みまでに世界樹の葉を3枚持つてくるかザオリクを3回は唱えられる僧侶を連れてきてください」

彩加「え、僕死んじゃうの？」

八幡「大丈夫だ！戸塚は俺が守る!!」

比企谷君と戸塚君の間に何故か赤い薔薇が見えます。同じクラスの海老名さんが大喜びしそうな展開ですね。

くそしてく

私達はジャージに着替えて生徒会に許可をとりテニスコートに集合しています。

雪乃「では始めましょう」

戸塚「はい！」

雪乃「まずは筋力の強化ね。筋力を上げれば基礎代謝も上がり、より運動に適した身体となつてカロリーも消費しやすくなるの」

結衣「あたしも付き合う！」

カロリーという言葉に過剰に反応した由比ヶ浜さんが食い気味にトレーニングに参加しました。……私もやりますかね。

くそしてく

雪乃「……剣さん、あなた意外と体力があるのね。驚いたわ」

私が全く息を切らしていない様子に雪ノ下さんが驚愕の目で見て話しかけてきました。

由輝子「バイトで自然と体力がつくんですよね。それに毎朝5km走ってますから」

雪乃「あなた、なんのバイトをしているの？」

由輝子「……禁則事項です☆」

雪ノ下さんがバイトについて聞いてきたのでネタに走り誤魔化しました。……雪ノ下さんが引いていますね。

由輝子「……とは言つても違法してるわけではありませんので気にするだけ無駄ですよ」

雪乃「……そう」

そんな会話をしながら私達は練習を続けました。

くそしてく

彩加「うわっ！」

ズザザと戸塚君が転びました。

結衣「彩ちゃん！大丈夫!？」

彩加「う、うん大丈夫だから続けて……！」

由輝子「オーバーワークは禁物です。やる気はあっても身体を壊しては元も子もありません。休憩にしましょう。……こんなこともあるうかと救急箱を持ってきています」

八幡「……準備いいな」

由輝子「スポーツに怪我はつきものですから。比企谷君は戸塚君を運んでください」

八幡「あ、ああ……」

私達は練習を中断して戸塚君の治療に入りました。

由輝子「よし……！応急処置ですがしばらく休めば動けるようになるでしょう」

雪乃「怪我的手当も完璧なのね」

雪ノ下さんが褒めるなんて珍しいですね……。

由輝子「バイトの上司に教わりました。色々なことを出来るようにと」

結衣「ユツキーの上司って何者!？」

由輝子「私の尊敬する人です」

美咲さんはなんでもできる人です！

???「あつテニスしてんじゃない！」

侵略者が現れたでゲソ!……失礼、現れました。

クラスのトップカーストの三浦（みうら）さんですね。

三浦「あーしもテニスやりたいからこの場所開けてくれない？」

やりたいから開けろってかなり横暴ですよ。

由輝子「すみませんがここは生徒会に許可をとってからじゃないと使えないんです

よ。因みに私達は許可をとっていますので悪しからず」

三浦「は？何言ってるの？」

ええ：わからないんですか？

???「まあまあ、喧嘩腰になんたって。みんなで作った方が楽しいしさ」

そう言ったのはうちのクラスでトップを張っている王様(笑)の葉山(はやま)君。この学校の女子はほとんど彼のファンで他校の女子にもファンクラブがあるらしいです。この人のどこがいいのかさっぱりわかりませんね。私からしたら材木座君の方がいいと思いますよ？

由輝子「戸塚君は真剣に強くなろうとしてるんです。邪魔しないでください」

八幡「お、おい剣」

我ながらかなり冷たい声を出していると思います。ですが戸塚君のためにも引けないものがあるんです。

葉山「うーん……じゃあこうしないか？部外者同士で俺とヒキタ二君が勝負する。勝った方が今後ここを使えるってことでどうかな？」

由輝子「は？なんでこちらが妥協しなきゃいけないんですか？葉山君はサッカー部の次期部長ですよ？あなた達が一生懸命練習しているところに私達が割り込んできて私達が『勝負して勝った方が今後グラウンドを使えるってことで』って言ってもし私達が勝ってグラウンドを占拠してサッカー部の練習の妨げになっているのを見ているんですか？あなた達がやっているのはそう言うことなんです？あと彼はヒキタ二君

じやなくて比企谷君です。わざと間違えないでください。不愉快です」

葉山「わ、悪い……」

由輝子「先程も言いましたが自分の立場になってよく考えてください。考えた上での発言ならばこちらにも考えがあります」

もしものときのためにこの会話をボイスレコーダーで録音しています。これは敵の弱……情報を得るための必須アイテムです。最悪これを校長先生のところへ持ってきてみましょう。

葉山「……わかった。俺達が悪かった」

由輝子「謝るなら戸塚君に謝ってください」

葉山「そうだな、戸塚すまなかつた。行こう優美子」

三浦「え？は、隼人？」

葉山君はそう言つて取り巻きを連れて去つていきました。

八幡「……お前スゲーな。葉山に対して」

由輝子「たいしたことじゃありません。これは本来戸塚君がやらなくてはいけないことです。戸塚君は次期部長ですからこれくらいの威厳は持つていなくてはいけません」

彩加「うん、そうだね」

由輝子「さて、昼休みも残り少ないですし練習を再開しましょう」

彩加「うん！」

雪乃「ええ」

八幡「ああ」

結衣「うん！」

こうして私達は戸塚君の練習に付き合ひ、後日、テニス部に部員が増えたそうです。

私と職場見学

今日のバイトは夕方からなので私は部室に顔を出す。

由輝子「おや、雪ノ下さんだけですか？」

雪乃「こんにちは剣さん。ええ、先程由比ヶ浜さんがまだ来ていない比企谷君を呼びに行ったわ」

由輝子「比企谷君なら平塚先生に呼ばれていました。もうすぐ来ると思うのですが……」

八幡「お疲れさん」

由輝子「おはようございます、比企谷君」

雪乃「会わなかったの？」

八幡「誰とだ？」

結衣「あーっ！いたーっ！！」

八幡「な、なんだよ……」

雪乃「あなたがいつまで経っても部室に来ないから捜しに行ってたのよ、由比ヶ浜さんか」

八幡「その倒置法で自分は違うアピールいららないから
まあ誰もいなくなるのは問題ですからね。

結衣「わざわざ聞いて歩いたんだからね。そしたらみんな『比企谷？誰？』って言う
し超大変だった」

八幡「その追加情報いらねえ……」

結衣「超大変だったんだからね！」

大事なことなので2回言いましたね由比ヶ浜さん。

八幡「わ、悪かったよ……」

結衣「べ、別にいいんだけどさ、そ、その……だから」

モゴモゴしながら由比ヶ浜さんが言う。

結衣「け、携帯教えて？ほ、ほら！いちいち捜し回るのもおかしいし、どんな関係か
聞かれるとありえないし……」

どんな関係か聞かれるのがあり得ないって比企谷君に失礼な気がしますが……。

八幡「ほれ」

結衣「あたしが打つんだ……っていうか迷わず人に携帯渡せるのがすごいね……」

由比ヶ浜さんはさっさと速い速度で携帯を打ち込みます。

八幡「打つの速いな……」

結衣「普通じゃない？ っていうかヒツキーの場合はメールする相手がないから指が退化してるんじゃないの？」

八幡「失礼な……。俺だって女子とメールくらいするぞ」

結衣「え……」

由比ヶ浜さんが携帯を落とす。最近の携帯は結構脆いから壊れてないといいいのですが……。

八幡「おい、それ俺の俺の……」

結衣「あ、ごめん。や、ヒツキーが女子とっていうのが想像できなくて……」

由輝子「私とメールしてますよね？」

結衣「えっ？ ユツキー、ヒツキーのアドレス知ってるの？」

由輝子「はい。入部した日に交換しました」

結衣「そうなんだ……。あ、ヒツキーありがと。……はあ」

由輝子「どうかしましたか？」

結衣「あ、うん……。ちよつと変なメールがきてうわってなっただけ」

雪乃「比企谷君、裁判沙汰になりたくなかつたら今後そういうメールを送るのはやめなさい」

八幡「内容がセクハラ前提で犯人扱いって……。証拠を出せ、証拠を」

由輝子「そもそも今由比ヶ浜さんとアドレスを交換したばかりですから比企谷君が犯人ではないでしょう」

コンコン

葉山「お邪魔します」

入ってきたのは葉山君でした。

葉山「ちよつとお願いがあつてさ。奉仕部つてここでいいんだよね？」

そう言つて葉山君は笑う。……どこか薄っぺらいですね。私の苦手なタイプの人間ですね。……そういえば初めて美咲さんと会つたときもこんな感じでしたね。今となつては懐かしい話です。

葉山「こんな時間に悪い。平塚先生に悩み相談するならここつて言われたんだけど……。なかなか部活を抜けさせてもらえなくてさ」

雪乃「能書きはいいわ。用があるからここへ来たのでしょうか？葉山隼人君」

葉山「……ああ、実はこれのことなんだ」

結衣「あつ……」

由輝子「チェーンメールですね。私のところにもきました」

内容は葉山君のグループの男子3人の名前は戸部君、大和君、大岡君でしたね。それ

で……。

戸部君は Yankee でゲームセンターで西高の生徒に暴力を振るい、問題を起こしているというもの。

大和君は3股をしていて最低の人間だというもの。

大岡君はラフプレーで相手のエースに怪我を負わせる卑怯者だというもの。

……なんと言いますか。

葉山「これが出回ってからクラスの雰囲気が悪くてさ、それに友達のことを悪く書かれてたら腹立つし、でも犯人捜ししたいんじゃないんだ。丸く収める方々を知りたい。頼めるかな？」

雪乃「……つまり事態の收拾を図ればいいのね？」

葉山「そうだね」

雪乃「では、犯人を捜すしかないわね」

葉山「え、なんでそうなるんだい？」

由輝子「むしろなんでそうならないんですか？」

雪乃「チェーンメール、あれは人の尊厳を踏みにじる最低の行為よ」

由輝子「こういうのは大元を根絶やしにしないと延々と続くことになりますからね」

雪乃「私は犯人を捜すわ。1言いうだけで止むと思うから。その後どうするかはあなたの裁量に任せる……。それで構わないかしら？」

葉山「……ああ、それでいいよ」

由輝子「っていうかこれ、犯人はこの3人の内の誰かですよね？」

葉山「ちよつと待ってくれ！これはあいつらのことを悪く言うメールなんだぜ？なに3人が犯人ってのはおかしくないか？」

由輝子「甘いですよ。そんなの自分に疑いがかからないために決まっているじゃないですか」

八幡「だな。もし俺なら誰か1人だけいいことを書いてそいつを犯人に仕立てあげる」

結衣「ヒッキーすこぶる最低だ……」

八幡「知能犯と呼べ」

由輝子「まあ、丸く収めるのが依頼ならなんとかかりますよ」

葉山「ほ、本当かい？」

由輝子「はい、まずは原因ですが職場見学のグループ分けが3人1組です。この3人はみんな葉山君と組みたくても葉山君を入れたら4人になります。だから誰かを蹴落とすためにこのチェーンメールを送った。こんなところでしよう。解決方法ですが

この3人が1つのグループになれば解決するでしょう。グループ分けの時に『俺はお前達と組まない』と言えばそれで終わりです」

由輝子（まあもしかしたら必要ないかも知れませんが）

葉山「そうしてみるよ。ありがとう、剣さん」

葉山君は去っていききました。

雪乃「……あれでよかったの？こういうのは大元を根絶やしにしないと……」

由輝子「まあ依頼人が丸く収めてほしいといっていたのでこれでよかったですよ……そろそろバイトの時間ですので私はこれで失礼します」

そう言っただけはバイトに向かいました。

職場見学のグループについてはみんなが葉山君のところに行きたいと言っていましたのでそこに決まりました。……やはり必要ありませんでしたね。

く数日後く

時刻は夜の10時。バイトの時間が終わり帰ろうとしたときに美咲さんに声をかけられました。

美咲「ねえ由輝子ちゃん、このあと飲みに行かない？」

由輝子「……未成年に言う台詞じゃないでしょう」

美咲「まあまあ私がリードするから！」

由輝子「デートみたいに言いますね……。それでどこに行くんですか？」

こう言うあたり私は美咲さんに甘いですね……。いつもお世話になってますから
なんででしょうね。

美咲「ここだよ！」

由輝子「『エンジェル・ラダー』天使の階？」

確かBARの名前でしたね。

由輝子「ここってドレスコードがいるんじゃないですか？ドレスとか持ってません
よ」

美咲「ふっふっふっ……そんな由輝子ちゃんにはこれ！」

由輝子「これはスーツですね……。なんでこんなの持っているんですか？」

美咲「由輝子ちゃんに着せるためだよ！」

由輝子「……深くは聞かないようにします」

美咲「うんうん、それがいいよ！」

由輝子「明日も学校がありますし長時間は居ませんよ？」

美咲「ありがとー！由輝子ちゃん!!」ダキッ

そう言つて美咲さんは私に抱きつく。

由輝子「はやく行きますよ。なるべく早く帰りたいですし」

美咲「じゃ、レッツゴー!!」

く エンジェル・ラダーく

美咲「私はカルーアミルク!」

美咲さんはもう決めていたみたいです。私はどうしましょうか?

美咲「由輝子ちゃん、ここマツカンあるよ!」

由輝子「私はMAXコーヒーでお願いします」

マツカンがあるなら最初から決まっていますよね。

私はBARで飲むMAXコーヒーに舌鼓を打っていると……。

ガシャン

とカウンター席の方から聞こえてきたので……。

由輝子「少し様子を見に行ってください」

美咲「いってらっしゃい!」

美咲さんに断りをいれてカウンター席の方に向かう。

結衣「ちよつと!ゆきのんの家のことなんて今関係ないじゃん!」

音の方向に着くと由比ヶ浜さんが激怒していました。

由輝子「なにやつてるんですか？」

結衣「ユツキーなの？」

由比ヶ浜さんは本当に私なのかと聞いてきた。

由輝子「ああ、いつもは髪を結んで眼鏡をかけていますからね。ちゃんと私は剣由輝

子ですよ」

雪乃「あなた、どうしてここに？」

由輝子「バイトの先輩に誘われてここに来たんです。それよりこの騒ぎは何があつたんですか？あとそこで働いてるのは同じクラスの川崎（かわさき）さんですよ？どうしてこうなったのかを話してもらえませんか？」

私が捲し立てて川崎に説明を求めようとします。

美咲「まあまあ由輝子ちゃん落ち着いて。冷静にならないと何も始まらないよ」

美咲さんが私を宥めてくれました。……於保ついています。……が何杯飲んだのでしょうか？

由輝子「……すみません、取り乱しました。……改めてこの騒動の原因を聞いてもいいですか？」

私はどうして川崎さんがここにいるのか、比企谷君の妹さんと川崎さんの弟君から奉

仕部に依頼で川崎さんのバイト先をつきとめたことなどを聞きました。

由輝子「……川崎さん」

沙希「確かあんたは剣だったね、あんたもバイトを辞めろと言いたいわけ？」

由輝子「いえ、違います」

結衣「ちよっ……ユツキー!？」

由輝子「由比ヶ浜さんは落ち着いてください。……川崎さん、幾つか質問させてください。川崎さんの弟君は確か中学3年から塾に行き始めたんですよね？」

沙希「……うん」

由輝子「川崎さんは予備校に通ってましたよね？」

沙希「そうだけど……」

由輝子「……最後の質問です。家族を心配させたくないですか？」

沙希「当たり前じゃん！私だって……」

由輝子「わかりました。比企谷君は予備校に通っていますか？」

八幡「あ、ああスカラシップを狙うために……っ！そういうことか……」

由輝子「比企谷君は気付いたようですね……川崎さん、予備校のパンフレットをもう1度よく目を通してください。キーワードは『スカラシップ』ですよ」

沙希「え……う、うん」

由輝子「美咲さん、帰りますよ」

美咲「あく由輝子ちゃん待つて〜。あ、これお会計ね」

結衣「ゆ、ユツキー待つてよ!」

由輝子「聞きたいことがあるかもしれないませんが解決方々については比企谷君が説明してくれます」

八幡「え、俺が!？」

由輝子「はい、比企谷君は私の言ったことの意味がわかりましたよね?ならあとは説明をお願いします。私は美咲さんを送って帰りますので」

美咲「ありがと〜由輝子ちゃん。ごめんね〜自己紹介はまたの機会ということ〜」

由輝子「美咲さん、飲みすぎです。ほら、自分で歩けそうですか?」

美咲「うう〜ん……まだちよつとキツいかも……」

由輝子「わかりました。肩を借りますよ」

美咲「ごめんね〜」

由輝子「いつもお世話になってますしこれくらい問題ないですよ」

私達はBARを出ました。

「職場見学当日」

職場見学が終わり帰ろうかなと思っていると川崎さんが声をかけてきた。

沙希「剣、ちよつといい？」

由輝子「はい、大丈夫ですよ」

沙希「その……ありがと。あなたのおかげで家族に迷惑をかけずにすんだ」

由輝子「私は質問をただけです。解決まで導いたのは比企谷君ですから、彼にお礼を言ってください」

沙希「うん、それでもあたしを冷静にさせてくれたからそのお礼を」

由輝子「……そうですね、では受け取っておきます」

沙希「うん、じゃ」

そう言つて川崎さんは去っていきました。

「そして」

おや、あれは比企谷君と由比ヶ浜さんですね。声をかけましようか。

八幡「気にして優しくしてんのなら、そんなのはやめろ」

……この言葉から察するに事故の事が比企谷君に伝わったのでしよう。……どう伝わったのか知りませんが。

結衣「や、やー……別にそういうんじゃないんだけどなー。なんてーの？……や、ほんとなんじやなくて」

由比ヶ浜さんはなんといいか分からない、そんな感じでしょうね。

八幡「まあ、なんだ……ほら」

比企谷君が吃りながらも何かを伝えようとすると。

結衣「……バカ」

由比ヶ浜さんはそう言つて涙目で走つてその場を離れて行きました。

由比ヶ浜さんはもしかしたら奉仕部を辞めるかもしれないね……。

……まあ考えても仕方がありません。これは比企谷君と由比ヶ浜さんの問題ですから私ごとやかく言うことはないですね。

私は彼らの会話を聞かなかつたことにして帰路につきました。

私と誕生日プレゼント

職場見学から数日が経ちますがあの日以降由比ヶ浜さんが部室に来なくなりました。

雪乃「……あなた、由比ヶ浜さんと何かあったの？」

流石に雪ノ下さんも気になるようで、比企谷君に訪ねました。

八幡「……何も」

雪乃「何もなかったら由比ヶ浜さんは来なくなったりしないと思うけれど。喧嘩でもしたの？」

八幡「喧嘩なんてそれなりに仲のいい奴がするもんだろ。だから喧嘩っていうよりは

……」

由輝子「……すれ違いですか？」

八幡「……まあそんな感じだ」

雪乃「……そう、なら仕方ないわね」

雪ノ下さんがそう言うのとガラガラと部室の戸が開いた。

平塚「……なんだ由比ヶ浜は今日もいないのか」

雪乃「先生、ノックを……」

平塚「彼女にはそれなりに期待してたのだがなあ……」

雪ノ下さんの言葉を無視して平塚先生は椅子に腰掛けながら言う。

八幡「……あの、先生何か用があるんじゃない」

平塚「ああそうだと企谷。君と雪ノ下の勝負だがこれからはバトルロワイヤルでいこう」

八幡「バトルロワイヤルですか？」

由輝子「勝負ってなんですか？」

平塚「ああ、そういえば剣は知らなかったな。比企谷と雪ノ下で奉仕の勝負をして勝った方は負けた方になんでも命令できるというルールになってるんだ」

『なんでも』の範囲がどれ程のものか気になりますね。

平塚「由比ヶ浜はもう来ないみたいだし必要ならば新入部員を確保してもいい」

雪乃「由比ヶ浜さんはまだ辞めたわけでは……」

平塚「来ないなら同じだろう。やる気も意志もない奴は去るしかあるまい」

まあ、やる気がない人にいられても迷惑ですからね。

平塚「由比ヶ浜や、剣のおかげで部員が増えると部が活発化することがわかった。そこで君達にやってもらいたいことがある」

由輝子「やってもらいたいことですか？」

平塚「君達の手でやる気と意志を持った者を確保し最低でもあと1人部員を補充したまえ」

やる気と意志を持った人ですか……。

平塚「期限は3日後の月曜日。なんなら今すぐでも構わん」

由輝子「もうすぐ下校時刻ですから実質2日後ですね」

雪乃「平塚先生、確認しますが『人員補充』をすればいいんですよね？」

平塚「その通りだよ雪ノ下。では、健闘を祈る」

そう言つて平塚先生は去つていきました。

八幡「……人員補充つてどうすりやいいんだ？」

雪乃「そうね、入ったくれそうな人に心当たりがあるわ」

八幡「誰？戸塚？戸塚か？戸塚だよな？」

由輝子「戸塚君はテニス部があるから無理でしょう」

雪乃「由比ヶ浜さんよ」

八幡「は？だつてやめるんだろ？」

雪乃「だつたらもう1度入り直せばいいだけでしよう。平塚先生は人員補充さえでき

ればいいと言つていたわけだし」

八幡「けど簡単に戻ってくるか？離れていったらそのまんまつてのが普通だぞ」

そもそも由比ヶ浜さんにやる気と意志があるかもわかりませんしね。

雪乃「…期限の月曜日は丁度6月18日。これがなんの日か知ってるかしら？」

6月18日、その日は確か……。

由輝子「由比ヶ浜さんの誕生日ですよね？」

雪乃「ええ、そうよ。剣さんは知っていたのかしら？」

由輝子「はい、アドレスを交換したときに聞きましたので」

雪乃「だから誕生日のお祝いをしてあげたいの。たとえ由比ヶ浜さんが奉仕部に来ないとしても、これまでの感謝はきちんと伝えたいから」

八幡「……そうか」

雪乃「ねえ、比企谷君……」

八幡「あん？」

おや？なんだか甘酸っぱい空気が流れてきましたよ？

雪乃「そ、その……つ、付き合ってくれないかしら？」

八幡「………は？」

おそらく雪ノ下さんは次の休日に由比ヶ浜さんの誕生日のプレゼント選びに付き合っしてほしいと言いたいのでしょうが言葉が足りないので比企谷君が勘違いしますよ？……まあとりあえず。

由輝子「私も行っていいですか？」
と言っておきましょう。

く土曜曰く

雪乃「ごめんなさいね剣さん。わざわざ休日なのに付き合わせてしまって……」

由輝子「いえ、私も奉仕部の一員ですし気にしないでください」

雪乃「あとは比企谷君達ね」

由輝子「達？比企谷君の他に誰か来るんですか？」

??「お待たせしました」

比企谷君と一緒に女の子が来ました。

八幡「そういえば剣は会ってなかったな。妹の小町だ」

小町「初めまして！比企谷小町です！」

由輝子「初めまして、剣由輝子です。よろしくお願いします」

小町「はい!!由輝子さんって呼んでもいいですか？」

由輝子「構いませんよ。私も小町さんと呼びますね」

性格は比企谷君と正反対ですね。

八幡「じゃあ早速行くか」

由輝子「時間も限られていますし効率重視で行きましょう。私は東側を、雪ノ下さんは西側を、女性へのプレゼントということで比企谷君は小町さんと中央付近を見ていきましょう」

雪乃「わかったわ」

八幡「ああ」

小町「ちよつといいですか？せつかくなのでみんなで回りませんか？その方がアドハイスもしあえるしお得です」

由輝子「……そうですね。では全員で中央を見て回りましょう」

くそしてく

八幡「あれ？剣、小町を見なかったか？」

由輝子「見てませんよ。携帯にかけてみてはどうでしょうか？」

八幡「ああ、そうする」

比企谷君が小町さんに連絡をしてる間に私は雪ノ下さんの方をみる。

雪乃「……」プニプニ

雪ノ下さんはパンダのパンさんに夢中のようですね。

比企谷君が連絡を終えてこちらに戻ってきた。

由輝子「小町さんとは連絡がとれましたか？」

八幡「あ……いや、なんか買いたいのがあるらしい。で、あとは丸投げされた」

雪乃「そもそも休日につき合わせてるのだし文句を言えた義理ではないわね。あとは私達でなんとかしましょう」

……本当にそうですか？小町さん自信がみんなで回りましょうと言っておきながら自分は買いたいものがあるから離脱してどういう意図があるか知りませんが無責任にも程があるのでは？……まあ2人は納得してるみたいですしまあいいでしょう。

くそしてく

由輝子「なんとか買えましたね」

雪乃「ええ」

八幡「そうだな」

私達は買い物を終えて一息ついていきます。

途中雪ノ下さんは服の耐久力を確かめていましたが事務用品をあげるわけじやありませんよ？

???「あれー？雪乃ちゃん？やつぱり雪乃ちゃんだ！」

そう言つて雪ノ下さんに声をかけたのは雪ノ下さんの姉の陽乃さんでした。

陽乃「あ、デートか！デートだな！このこのっ！」

八幡「別にデートじゃないですけど……」

陽乃「お、きみもムキになっちゃってえ。雪乃ちゃんを泣かせちやつたりしたら許さないぞっ！」

雪乃「いい加減にしてちょうだい姉さん!!」

そう言つて陽乃さんは比企谷君にスキンシップをとっています。……見ていて不愉快ですし何故か雪ノ下さんも不機嫌ですのになんとかしましょう。

由輝子「そこまでですよ、陽乃さん」

陽乃「いいじゃん由輝子ちゃん。彼が雪乃ちゃんの彼氏に相応しいか確かめてるんだから」

由輝子「……あまり度が過ぎると美咲さんに報告しますよ?」

陽乃「わ、わかつたからそれだけは勘弁して〜」

とやりとりをしていると雪ノ下さんも比企谷君もポカンとしますね。

由輝子「比企谷君この人は雪ノ下陽乃さんで雪ノ下さんの姉です」

陽乃「よろしくね」

雪乃「……剣さん、あなた姉さんと知り合いなの?」

由輝子「美咲さんの後輩にあたる方です」

雪乃「美咲さんってこの間の……?」

由輝子「はい、その人で間違いないよ。陽乃さんこの人は私と同じクラスの比企谷君と言ってあなたの妹と同じ部活に入っています」

陽乃「比企谷……へえ……」

比企谷という名前に意味深な反応をしていましたね。やはりあの事故が関係してるとはどうですか？

陽乃「比企谷君ね、うんよろしく」

陽乃さんはそう言って比企谷君に近付き何かを囁いた瞬間、比企谷君はバツと離れました。

陽乃「……私いま嫌がられるようなことしちゃったかな？」

八幡「その、俺耳弱いので……」

雪乃「比企谷君、初対面の女性に性癖を晒すのはやめなさい。訴えられても文句は言えないわよ」

陽乃「……あはは比企谷君すっごいおもしろーい！」

雪乃「もういいかしら？特に用がないなら私達はもう行くけれど」

陽乃「比企谷君、雪乃ちゃんの彼氏になったらお茶しようねー」

……ふう、相変わらず嵐のような人ですね。

八幡「……お前の姉ちゃんすげえな」

雪乃「姉に会った人は皆そう言うわね。誰もがあの人を褒めそやす」

八幡「はあ？そんなのお前も大して変わらんだろ」

雪乃「……え？」

由輝子「比企谷君が言いたいののは陽乃さんの強化外骨格みたいな外面のことですよね？」

わかりやすくいうと猫被りともいいます。

八幡「ああ、まさに男の理想みたいに人当たりがよくて、いつもにこにこしていても理想は理想だ。現実じゃない。だからどこか嘘くさい」

雪乃「腐った目でも……いえ腐った目だからこそ見抜けることがあるのね」

八幡「お前それ褒めてるのか？」

雪乃「褒めてるわよ。絶賛してるわ」

由輝子「……と私はそろそろバイトに行く時間ですのでこれで失礼します」

八幡「ああ」

雪乃「ええ、今日はありがとう。また月曜日に」

由輝子「はい」

私はバイトに向かいました。

く月曜日く

私と比企谷君が部室前につくと、由比ヶ浜さんが何故か深呼吸をしていました。

八幡「何してんだお前？」

結衣「うひゃあ！」

そんなに驚くことでしょうか？

結衣「……ヒ、ヒツキーにユツキー。やーその何？空気がおいしかったからというか」

由輝子「意味のわからないことを言っていないで行きましょう。雪ノ下さんも待っていますよ」

ガラツ

雪ノ下「！由比ヶ浜さん……」

結衣「や、やほーゆきのん……」

やつはろーじやないのはどこか元気がないからでしょうか？

雪乃「由比ヶ浜さん」

結衣「っ！」ビクッ

雪ノ下さんが呼ぶと由比ヶ浜さんはびくつく。

結衣「あ、あーっと……。ゆ、ゆきのんとヒツキーのことで話がある……んだよね」

おや？何故か私がハブられていますよ？

雪乃「ええ、私達の今後のことについて」

結衣「や、やーあたしのことなら全然気にしなくていいのに。そりや確かにびつくりしたっていうかむしろお祝いとか祝福とかそんな感じだし……」

雪乃「よ、よくわかったわね。そのお祝いをきちんとしたかったの。それにあなたには感謝しているから」

結衣「や、やだなー感謝されるようなことあたししてないよ……。何もしてない……。雪乃「それでも私は感謝してる…それにこうしたお祝いは本人が何かをしたから行われるものではないでしょう。純粹に私がそうしたいのよ」

結衣「う、うん……」

なんでしよう……？話が微妙に噛み合っていない気がします。

雪乃「だから……その」

結衣「それ以上聞きたくないかも……」

八幡「由比ヶ浜……お前なんか勘違いしてないか？」

結衣「へ……？」

くそしてく

結衣「じゃあ2人は別に付き合ったりとかしてないの？」

おそらく私がバイトに行った後に2人でいるところを由比ヶ浜さんは見たのでしよう。

八幡「そんなわけねーだろ……」

雪乃「由比ヶ浜さん、私でも怒ることくらいあるのよ？」

八幡「お前は年中怒ってるだろ」

確かにしよっちゆう怒っているイメージですね。

結衣「な、なんだ勘違いか？」

由比ヶ浜さんはほっと溜め息をつく。……やはり由比ヶ浜さんは比企谷君に好意を寄せているようですね。

雪乃「お祝いの時間がなくなっちゃったわね。せっかくケーキを焼いてきたのに」

結衣「なんでケーキ？」

雪乃「なんでもって……今日は由比ヶ浜さんの誕生日をお祝いしたくて呼んだのよ。慰労もかねて……あとはその……感謝の証しとでもいうのかしら」

結衣「プレゼントも!？」

雪乃「……別に私だけが用意しているわけではないけれど」

結衣「……え？」

由輝子「私からも用意しますよ。もちろん比企谷君からも」

結衣「あ、あはは……まさかヒツキーがプレゼント用意してるなんておもわなかったな。こないだからちよつと微妙だったし」

八幡「悪い、誕生日だからってわけじゃねえんだ」

結衣「え？」

八幡「なんつーか……これでチャラつてことにしないか？俺がお前んちの犬を助けたのもそれでお前が俺に気を使つたのも全部なし。そもそも俺が個人を特定して恩を売つたわけじゃないんだから、お前が個人を特定して恩を返す必要がないんだよ。けど気を使つてもらつた分は返しておきたい。これで差し引きゼロでチャラつていうことでもうお前は俺を気になげなくていい。だからこれで終わりだろ」

どうやら比企谷君は由比ヶ浜さんとの関係を終わりにしようとしてみたいですね。

結衣「なんでそんな風に思うの？同情とか気を使うとかそんな風に思ったこと1度もないよ……」

だつたら会つてすぐに謝礼の1つくらいするべきだと思いますが……。

結衣「なんか難しくてわかんなくなっちゃった……。もつと簡単なことだと思つたのに……」

雪乃「別に難しいことはないでしょう。比企谷君は由比ヶ浜さんを助けた覚えはない

し由比ヶ浜さんは比企谷君に同情した覚えはない。……始まりからすでに間違ってるのよ」

由輝子「そうですね。だから比企谷君の言う『終わりにする』という選択肢は正しいと思いますよ」

結衣「でもこれで終わりだなんてなんかやだよ……」

むしろお互いのためにも終わりにした方がいいと思います……。

由輝子「それが嫌ならまた始めればいいですよ」

雪乃「そうね……。あなた達は悪くないんだから始めから揉める必要はないのよ。だからちゃんと始めることだって出来るわあなた達は」

この機会に雪ノ下さんも自分が事故をおこした車に乗っていたことを伝えた方がいいと思いますよ？ こういうのは後々になって面倒なことになりますからね。

雪乃「私は平塚先生に人員補充完了の報告をしてこないといけないから」

由輝子「……私もバイトがありますので失礼します」

結衣「あつ、うん……。ユツキー、プレゼントありがとね」

由輝子「気にしないでください」

〈道中〉

由比ヶ浜さんが比企谷君に好意を寄せているとわかった時、胸部に痛みを感じました。……そういえば陽乃さんが比企谷君にスキンシップをしているときもこんなことがありましたね。

……この気持ちちが恋愛感情というものでしょうか？

……私は比企谷君のことが好きなんですか？

……わかりません。

私と奉仕部の合宿

夏休みのある日、バイトを終えた私は携帯を見ると平塚先生から数件のメールと20件の着信が来ているのに気づきました。……いや、何やってるんですか？メールの内容もなんか怖いのですし。あつ、またかかってきました。

由輝子「はい」

平塚「ああ、やっとでたか剣。電話にでなかった理由を聞こうか」

由輝子「やっとでたかじゃないでしょう。なんなんですかあの着信の数は？メールの内容も穏やかじゃないのですし。電話にでれなかったのはバイト中だったからです。……それでどんな用件で電話を？」

平塚「あつ、ああすまない……。夏休みの部活動についてな。8月の3日～5日に小学生的の林間学校のサポートを奉仕部でしようと思つてな。日程は空いているかね？」

確か学校で募集しましたね。8月3日～5日ですか……。

由輝子「はい、その日は問題ありません」

平塚「了解だ。詳細はメールで送つてあるから確認しておいてくれ」

由輝子「わかりました」

平塚先生との電話が終わると私は早速詳細を確認して準備にとりかかりました。

く8月3日く

由輝子「……忘れ物は特になし、マツカンの補充よし、紫外線対策よし、ではいつてきますお母さん」

母「いつてらっしや〜い」

確か集合は駅前ですね。

く駅前く

集合の1時間前……少し早かったですかね？その自販機でマツカンの補給といきましようか。

平塚「おお、早いな剣。感心だ」

由輝子「おはようございます、平塚先生」

朝マツカンをとっていると平塚先生と合流しました。

くそしてく

結衣「やつはろー！ユツキー!!」

雪乃「おはよう、剣さん」

雪ノ下さんと由比ヶ浜さんが一緒に来ました。

由輝子「おはようございます。雪ノ下さん、由比ヶ浜さん」

平塚「これであとは比企谷だな。念入りに電話して手回しもしておいたから大丈夫だ
と思うが……」

念入りに電話して手回しつて……。比企谷君に予定があつたらどうするつもりだつ
たんですか？

どうやら比企谷君が来たようですね。小町さんと一緒に。

平塚「さて、電話にでなかつた言い訳を聞こうか比企谷八幡」

八幡「……」

平塚「まあ無事ならそれで結構。色々と手を回して君の妹に連絡がとれたから一安心
だ」

八幡「つつーか何の用つすか？俺これから千葉に行くんですけど」

もしかして比企谷君は知らないんですか？

平塚「なんだ、まだメールを見てなかつたのか？」

八幡「はあ？」

結衣「ヒツキー遅いし」

平塚「そ、それは比企谷が逃げ出すと思つてな……」

由輝子「逃げ出すから……。彼に予定があつたらどうするつもりだったんですか？この時期は予備校の合宿がありますからそれに彼が参加してもいいとおかしくありません。今回は来てくれましたがこれからは前もつて連絡してください。これは彼に限つたことじゃなくて全員にお願いします」

平塚「あ、ああわかつた……」

由輝子「それと小町さん」

小町「は、はい！」

由輝子「あなたは勝手に比企谷君の予定を決めていましたね。先程平塚先生にも言いましたが比企谷君に予定があつたらどうするんですか？」

小町「そ、それは……お兄ちゃんなら大丈夫かなつて……」

由輝子「比企谷の予定を決めるのはあくまで彼自身です。もう少し彼のことも考えてあげてください」

小町「はい……」

由輝子「比企谷君も連絡事項くらいはちゃんと見ておいてください」

八幡「あ、ああ……」

由輝子「……空気を悪くしてすみませんでした」ペコッ

私はこの空気を作ったことを謝罪しました。

平塚「いや、こちらこそすまない……」

その後戸塚君も合流し、これで全員が揃う。……やたら比企谷君が嬉しそうにしてみました。……

平塚「では合宿に行くか！」

平塚以外『はい！』

（道中）

由輝子「小町さん、先程はすみませんでした」

小町「い、いえ！小町もお兄ちゃんのことを考えていなかったの……小町こそすみません」

由輝子「小町さんは比企谷君のためを思つての行動だったんですよね？」

小町「はい……」

由輝子「……まあこれからはもう少し比企谷君の都合も考慮してあげてください」

小町「はい！」

小町さんが元氣よく返事をするると急に目を輝かせ……。

小町「ところで由輝子さんは兄のことをどう思っているんですか？」

そう私に聞いてきました。比企谷君をどう思つて……。

由輝子「……わからないというのが正直な気持ちですね。良くは思つていますがこれが恋愛感情なのかはまだはつきりしてません」

小町「そうですね。ありがとうございます！由輝子さんみたいに兄を想つてくれる人は小町大歓迎です！」

先程のことがあつたにも関わらず悪い印象は持たれてないようですね。

小町「小町もつと由輝子さんと仲良くしたいです！兄のことを考えて行動してくれる人は今まで見たことありませんでしたし。由輝子さんのことが知りたいです！」

由輝子「私でよろしければ是非」

私は小町さんと親睦を深めました。

く千葉村く

由輝子「そういうえばこの件は学校側でも募集をかけていましたよね？他にはいなかったんですか？」

平塚「いや、君達以外にも何人か来てくれるさ」

由輝子「それって一体」

誰が来るんですか？と確認をとろうとすると一台の車がこちらについた。

葉山「や、ヒキタ二君」

八幡「葉山……？」

他には三浦さん、海老名さん、戸部君ですか……。学校側からはこの4人のようですね。

……葉山君は相変わらずわざと比企谷君の名前を間違えていますね。聞いていてイライラしてきます。

平塚「全員揃ったようだな。君達にはボランティア活動をしてもらう」

八幡「ボランティア？」

平塚「奉仕部の合宿も兼ねて、林間学校のサポートスタッフとして働いてもらう」

これから奉仕部の合宿が始まるわけですが……。何故でしょう？不安になってきました。

私と孤立問題

葉山「何かあつたらいつでも僕達に言つてください。この林間学校で素敵な思い出をたくさん作つて下さいね。よろしくお願いします」

葉山君が挨拶すると小学生のみなさんは元気に返事をしました。

雪乃「あの……何で葉山君達までいるんでしょうか？」

雪ノ下さんが平塚先生に聞く。

平塚「人手が足りないから内申点を餌に募集かけておいたのだよ。これもいい機会だ。君達は別のコミュニティと上手くやる術を身につけた方がいい」

確かに様々なコミュニティに対して上手く対応することは社会に出ると必要になるでしょう。

八幡「無理ですよ、あの辺と仲良くするなんて」

由輝子「別に仲良くする必要はありません。ただ敵対や無視じゃなくて無難にやり過ぎればいいんです」

平塚「その通り。それが社会に適應するというとき」

先生「それでは、オリエンテーリングスタート」

平塚「さて、君達の最初の仕事はオリエンテーリングのサポートだ。一緒に行動してトラブルのないように見守ってくれたまえ」

平塚先生がそう言い私達は小学生を見守りながら歩いていた。

戸部「いやー小学生マジ若いわー。俺ら高校生とかもうおっさんじゃね?」

三浦「ちよつとやめてくんない? あーしがババアみたいじゃん」

三浦さんは姉御肌が強いイメージがありますからオカンですね。海老名さんが鼻血を出すといつも彼女の面倒を見ているから。

彩加「でも僕が小学生の頃って高校生は大人に見えたなあ」

小町「小町から見ても高校生は大人って感じますよ。兄を除いて」

八幡「おい、俺めちやくちや大人っぽいだろ。愚痴をこぼしたり、汚い嘘をついたり、卑怯なことしたり」

結衣「ヒツキーの大人のイメージってそんな悲しいものなんだ!？」

由輝子「でもそんなものですよ大人って」

結衣「ユツキーもなんだ!？」

と大人のイメージについて話していると……。

雪乃「あの子達、何をしているのかしら?」

葉山「見てくるよ」

雪乃「……………」

葉山君が小学生のところに行って何があったのかを確かめています。おや、あの子は

……。

八幡「……………」

雪乃「……………はあ」

どうやら比企谷君と雪ノ下さんも気付いたようですね。

葉山「チエックポイント見つかった？」

???「……………いいえ」

葉山「そっか、じゃあみんなで探そう。名前は？」

留美「鶴見留美」

葉山「俺は葉山隼人、よろしくね。あっちの方とか隠れてそうじゃない？」

八幡「見た今の？あいつ超ナチュラルに誘ったぞ。さりげなく名前聞いてるし」

雪乃「あなたには一生かかってもできない芸当ね」

由輝子「でもあれは悪手ですね」

あの子の班の小学生達は意図的にハブにしていますね。……小学生でもああいうことをするんですね。

八幡「小学生でもああいうの、あるもんだな」

比企谷君も同じことを思ったようですね。

雪乃「小学生も高校生も変わらないわよ。同じ人間なのだから」

雪ノ下さんはそう言う。なくならないものですねイジメという行為は……。

くそしてく

平塚「よし、ざつとこんなところだな」

平塚先生が手慣れた感じで飯盒に火をつけました。

八幡「なんかめちやくちや手慣れてますね」

平塚「それでも大学時代はサークルでバーベキューをしたものさ。私が火をつけてる間カップル達がいちやこらいちやこら……ちつ、気分が悪くなった。男子は火の準備、女子は食材を取りにきたまえ」

ここで男女を引き離すのは過去の恨みが入ってますね。

雪乃「小学6年生の野外炊飯であることを考えればカレーは妥当なメニューね」

八幡「家カレーって作る人によって個性出るよな。母ちゃんの作るカレーとか色々入っていて厚揚げとか」

戸部「あるある、竹輪とか入ってるべあれ」

八幡「お、おう……」

ちなみにうちの場合はごぼうが入っています。

結衣「ママカレーってそういうのあるよね。こないだも変な葉っぱ入っててき、うちのママ結構ぼっーとしてることあるからな」

雪乃「……その葉っぱってローリエだったんじゃないかしら……」

結衣「ローリエ？」

由輝子「ローリエとは月桂樹の葉のことですね」

結衣「ティツシユのことじゃないんだ!?!」

くそしてく

あとは火が通ればカレーの完成ですね。

平塚「暇だったら見回って小学生の手伝いでもするかね?」

葉山「まあ小学生と話す機会なんてそうそうないし、行こうか?」

どうやら葉山君達は小学生のところに行くようです。

八幡「……俺、鍋見てるわ」

由輝子「私も鍋を見てます」

と私と比企谷君が鍋を見ようとすると

平塚「心配するな。比企谷、剣。私が見てやろう」

平塚先生に阻止されました。

……あの子は先程の子ですね。…浮かない表情から察するにやはりハブにされて
いるようですね。

葉山「カレー好き？」

葉山君はあの子ののに声を描けています。…ああいう子に声をかけるときはあくまで
秘密裏に、密やかに、晒し者にならないように配慮するべきでしょう。

八幡&雪乃「……はあ」

比企谷君と雪ノ下さんも同じことを思っているようですね。

留美「……別にカレーに興味ない」

彼女はそう言ってその場を離れました。……いい答えですね。好意的に答えれば
周りから調子に乗つてると思われ、かといってすげなく答えると何様かと言われる。だ
から戦略的撤退しか選択肢がありません。

葉山「……せつかくだし隠し味入れるか！なにか入れたいものがある人！」

結衣「はいっ！あたしフルーツがいいと思う！桃とか！」

由比ヶ浜さん……カレーに桃はあいせんよ？

八幡「あいつバカか……」

留美「……ほんとバカばっか」

八幡「……まあ世の中大概そうだ。早く気付いて良かったな」

雪乃「あなたもその『大概』でしょう？」

八幡「あまり俺を舐めるな。大概とかその他大勢の中ですら1人になれる逸材だぞ俺は」

雪乃「そんなことを誇らしげに言えるのはあなたくらいでしょうね。呆れるを通り越して軽蔑するわ」

八幡「通り越したら尊敬しねえか普通」

留美「……名前」

八幡「あ？名前がなんだよ」

留美「名前聞いてんの。普通さっきので伝わるでしょ」

由輝子「人に名前を尋ねるときはまず自分の名前を言うものですよ。私は剣由輝子と言います」

留美「……鶴見留美」

雪乃「私は雪ノ下雪乃。そこのは……ヒキ、ヒキガ……ヒキガエル君だったかしら？」

八幡「おい、なんで俺の小4の頃の渾名知ってんだよ。比企谷八幡だ」

結衣「何？どったの？」

八幡「で、これが由比ヶ浜結衣な」

結衣「鶴見留美ちゃんだよね？よろしくね」

留美「……………なんかそつちの3人は違う感じがする。あの辺の人達と。私も違うの。あの辺と」

鶴見さんは私と比企谷君と雪ノ下さんを見てそう言った。……………私達3人の共通点は過去に今の鶴見さんと似たようなことがあったということですかね。

結衣「違うって何が？」

留美「みんなガキなんだもん。だから…別に1人でもいつかなって」

結衣「で、でも小学校の頃の友達とか思い出って結構大事だと思ふなあ……………」

留美「思い出とかいらぬ。……………中学に入ったら余所から来た人と友達になればいいし」

雪乃「残念だけどそうはならないわ」

留美「……………え？」

由輝子「あなたを仲間外れにしている子も同じ中学に進学するんですよ？ならまた同じことが起こるでしょう。今度は最悪その余所から来た人も一緒になつて」

留美「やっぱりそうなんだ。ほんとバカみたいなことしてた」

結衣「何かあったの？」

留美「誰かをハブるのは何回かあつて……………。けどその内終わるし、そしたらまた話し

たりする。いつも誰かが言い出してなんとなくみんなそういう雰囲気になってんの。そんなことしてたらいつの間にか今度は私がそうなってた……。別に何かしたわけじゃないのに……。中学でもこんな風になっちゃうのかな……。？」

これは……。かなり深刻な問題ですね。

私と話し合い

結衣「大丈夫かなあ……」

平塚「何か心配事かね？」

葉山「ちよつと孤立しちやつてる子がいたので……」

三浦「可哀想だよねー」

由輝子「別に孤立していること自体は悪いことじゃないでしょう。問題なのは悪意によつて孤立させられていることです」

平塚「それで君達はどうしたい？」

葉山「俺は……出来れば可能な範囲でなんとかしてあげたいと思います」

この問題は私達の手に負える範囲ではないと思いますが……。

雪乃「可能な範囲で……ね、あなたには無理よ。そうだったでしょう？」

雪ノ下さんがそう言うのと葉山君は顔を俯かせます。……過去にやった過ちのことを雪ノ下さんは言っているのでしょうか。

平塚「それで雪ノ下、君はどうしたい？」

雪乃「これは奉仕部の合宿も兼ねているとおっしゃっていましたが彼女の案件も活動

内容に含まれますか？」

平塚「林間学校のサポートボランティアを部活動の一環としたわけだ。原則原理から言えばその範疇に入れてもよからう」

雪乃「……そうですか。では彼女が求めるならあらゆる手段を持って解決に努めます」

奉仕部の活動としては妥当ですね。彼女自信はもしかしたらこのままでもいいと思っているかもしれませんが。

平塚「それで助けは求められているのかね？」

雪乃「それはわかりません」

結衣「ゆきのん、あの子言いたくても言えないんじゃないかな？ 留美ちゃんも自分も同じことしてたって言ってたし……だから自分だけ助けてもらうのは許せないんじゃないかな。みんな多分そう……。仲良くしたくても話しかけたくても、それができない環境なんだよ……」

平塚「雪ノ下の意見に反対の者はいるかね？」

平塚先生が他に意見がないか確認する。

平塚「よろしい、あとは君達でなんとかしたまえ。私は寝る」

由輝子「平塚先生、今回の問題はかなり深刻です。監督である先生がこの場になく

ては駄目でしょう」

平塚「わ、私は生徒の自主性に重んじようと……」

由輝子「イジメの可能性が高いこの問題で自主性を重んじたなんて、なんの免罪符にもなりませんよ？」

平塚「なら剣、君はどんな考えかね？」

由輝子「この問題を林間学校の先生に報告をして私達は手を出さないことです。私達が出していい問題じゃありませんので」

平塚「……君はイジメられている生徒を放っておくのかね？ 私は君達なら解決できると思って任せようと考えてるのだが……」

由輝子「仮にこの林間学校の期間に手を出したとしましょう。その後何か問題が起きたら平塚先生達は責任をとれるんですか？」

平塚「それは……」

由輝子「……彼女が本当に助けを求めている場合私達奉仕部を中心に解決を努めて無理そうならば林間学校の先生に報告をするというのでどうですか？」

平塚「ああ……。それでいい」

平塚先生は力なくそう発言すると話し合いが始まりました。

三浦「あの子結構可愛いし、他の子とつるめば良くない？ 試しに話しかけてみんじや

ん、仲良くなるじゃん、余裕じゃん？」

戸部「それだわー。優美子冴えてるわー」

結衣「そ、それは優美子だから出来るんだよ……」

それは強者の理論ですね。由比ヶ浜さんの言う通り三浦さんみたいな人は出来るかもしれないが鶴見さんは内気そうですから可能性は低いでしょうね。足がかりを作るという意味では正しいですが現状では少しハードルが高いかもしれません。

??? 「はい」

次に拳手したのは海老名さん。

葉山「姫菜、言ってみて」

海老名「大丈夫、趣味に生きればいいんだよ。趣味に打ち込んでいるとイベントとかに行くようになって色々交友が広がるしきつと自分の本当の居場所が見つかると思うんだよね。だから学校だけが全てじゃないって気付くよ」

いい意見ですね。確かに学校だけが全てじゃないですし趣味を生き甲斐にすれば、それに没頭出来て嫌なことを忘れることができます。小学生の頃の私がまさしくそうでした。学外の交流で美咲さんと出会ったのがとてもいい思い出です。だからこの意見を採用するのはありだと思います。……まあ海老名さんの趣味や性格を考えるとオチが見えますが。

海老名「私はBLで友達が出来ました！」

八幡「……は？」

海老名「ホモが嫌いな女子はいません！だから雪ノ下さんと剣さんも」

雪乃「えっ？」

由輝子「お断りします」

葉山「……優美子、姫奈と一緒にお茶取ってきて」

三浦「おっけー……」

海老名「ああつままだ布教の途中なのにつ！」

三浦「ほら海老名行くよ」

雪乃「あの人は私に何を勧めようとしたのかしら？」

結衣「ゆきのんは知らなくていいよ……」

由比ヶ浜さんも被害者のようですね……あの人は見境なく女子に布教しようとしてませんか？

葉山「やつぱりみんなで仲良くできる方法を考えないと解決にならないか……」

八幡「ふっ、みんなねえ……」

比企谷君が呆れるように言う。葉山君はこの問題を本当にわかってるんですか……？

雪乃「そんなことは不可能よ。ひとかけらの可能性もありはしないわ」

三浦「ちよつと、雪ノ下さんあんた何？」

雪乃「何か？」

三浦「折角みんなで仲良くやろうってしてんのになんで空気壊すようなこと言うわけ？別にあーしあんたのこと全然好きじゃないのに旅行だから我慢してんじやん」

結衣「まあまあ優美子……」

雪乃「あら、意外に好印象だったのね。私はあなたのこと嫌いだけれど」

結衣「ゆきのんも抑えて抑えて……」

三浦「ちよつと結衣ー？」

雪乃「あなたはどっちの味方なのかしら？」

結衣「ひいっ！」

雪乃「それに私は事実を淡々と述べただけよ。それに激昂して空気を壊しているのはあなたじゃないかしら？」

三浦「あんたさあ！そういう上から目線をやめろって言ってんの！」

雪乃「あら、自分が劣っている自覚があるから上から見られているように感じるのではなくて？」

三浦「このっ！」

由輝子「はあ、くだらないですね」

八幡「剣？」

由輝子「あなた達は鶴見さんを救う気があるんですか？葉山君はその場しのぎの案しか出さずその後のことを考えない、雪ノ下さんは反対意見しか出さない、三浦さんは雪ノ下さんとくだらない口論をする、やる気がないなら出ていってください。そもそも雪ノ下さん、あなた部長ですよ？なのに案の1つも出さないで何が『解決に努める』でですか？今あなた達がやっていることは時間の無駄でしかありません。……私は先に部屋に戻ります。あなた達は延々となんの役にも立たない口論を繰り返せばいいですよ」
私はそう言つて部屋に戻ることになりました。

く翌日く

今日の予定は夜に肝試しとキャンプファイヤーをする予定で、昼間小学生は自由時間のためその間に私達が準備をすることになります。肝試しは私達が小学生を脅かす役のようですが。……あと雪ノ下さんに謝罪されました。あなたのおかげで目が覚めたと言われました。私は当たり前のことを言っただけです。

準備が終わりみなさんは川で遊んでいます、私は木陰で休んでいます。……比企谷

君はどうやら水着を持ってきてないようで私と同じく休んでいます。

八幡「剣は川で遊ばないのか？」

由輝子「はい、どうも遊ぶ気にはなれませんので」

八幡「それにしても昨日は大変だったな」

由輝子「あれから比企谷君はどうしたんですか？」

八幡「俺は流れて部屋に戻った。雪ノ下になんか言われたが、剣の言う通り時間の無駄でしかなかったからな」

私と比企谷君が話していると鶴見さんがこちらにやって来てそのまま隣に座りました。

八幡「よっ」

由輝子「こんにちは」

留美「……」ペコッ

鶴見さんはこちらに軽く会釈しました。やはり元気がないみたいですね。

留美「……2人は川で遊ばないの？」

八幡「俺は水着持ってきてないんだよ……」

由輝子「私はそういう気分じゃありませんでしたから」

八幡「……お前は？」

留美「……今日は自由行動なんだって。朝ごはん部屋に戻ったら誰もいなかった」

八幡「……えげつねえな」

結衣「留美ちゃん」

由比ヶ浜さんと雪ノ下さんもこちらに来ました。

結衣「留美ちゃんも一緒に遊ばない？」

由比ヶ浜さんの誘いに鶴見さんは首を横に振ります。

留美「ね、八幡」

八幡「呼び捨てかよ……」

留美「八幡、小学校の友達っている？」

八幡「……いない。多分だいたいみんなそうだから放っておいていいぞ。あいつら卒

業したら1人も会わないぞ」

結衣「そ、それはヒツキーだけでしょ！」

雪乃「私もないわ」

由輝子「私もいませんね。その当時親しい人は美咲さんくらいですから」

結衣「留美ちゃん、この人達が特殊なだけだからね」

八幡「特殊で何が悪い。英語で言えばスペシャルだ。何か優れてるっほいだろ」

雪乃「言葉の妙よね……」

日本語って不思議ですよ。

八幡「由比ヶ浜、お前小学校の同級生で今でも会う奴何人いる？」

結衣「え？えーと……1人か2人かなあ……？」

八幡「お前の学年何人いた？」

結衣「30人3クラスだけ」

由輝子「つまり卒業から5年後も友達やつてる確率は3%から6%くらい。由比ヶ浜さんみたいにかなりコミュ力が高い人でこの確率ですから常人はもつと低いでしょう。……まあ1%くらいとみていいと思います」

結衣「でも1%でいいって考えると少しは気が楽かもね。みんなと仲良くってやっぱりしんどい時あるし」

由比ヶ浜さんでもそう感じるものです。それくらい大変なんです。『みんな仲良く』ってことは……。それができれば戦争なんておきませんし鶴見さんはこんな状況になっていません。

留美「……それだとお母さんが納得しない。いつも友達と仲良くしてるかって聞かれるし、林間学校もたくさん写真撮って来なさいってデジカメ……」

彼女のお母さんはなんとなく察してはいると思えますよ？自分自身が本当のことを言ってくれるのを待っているだけで……親ってそういうものですか。

留美「それに、シカトされるってちよつと嫌だな。惨めっばいし、でも……もうどうしようもないし」

雪乃「何故？」

留美「私……ハブられてる子見捨てちゃったし、もう仲良くできない……。仲良くしてもいつかまたこうなるかわからないし……。なら、このままでもいいかなって……」

鶴見さんは自分とその周囲を見限ったのですね。『自分が変われば世界は変わる』なんてことは実際ありませんし、悪目立ちすればそれを材料に攻撃の標的になります。……それが世の中のどうしようもないルールというものでしょう。

八幡「……惨めなのは嫌か？」

留美「……うん」

八幡「……肝試し、楽しいといいな」

結衣「ヒツキー？どうしたのヒツキー」

雪乃「……」

比企谷君は鶴見さんを救う方法が何か浮かんだようです。……彼の案ならもしかしたら彼女を救済出来るかもしれません。時間的にもこの案が失敗したら林間学校の先生に報告した方がいいですね。

……もう比企谷君だけが頼りですね。

私と肝試し……そして合宿の終わり

私達は肝試しで小学生を脅かす役をするのですが……

三浦「何この安っぽいコスプレ……」

戸部「宇宙人とかあんべ」

八幡「確か肝試しのオバケって言ってたよな……」

由輝子「これでは肝試しというよりハロウィンですね」

向こうの趣味ですかね？海老名さんの衣装は巫女さんですし。

彩加「ねえ八幡」

八幡「ん？」

彩加「魔法使いつてオバケかな？」

八幡「まあ大きい括りだとオバケなんじゃないか？」

彩加「でも、怖くないよね？」

八幡「……いや、怖いぞ」

戸塚君は魔法使い、小町さんは化け猫、雪ノ下さんは雪女（すぐく似合っています）、なにやらポーズをとっている由比ヶ浜さんが悪魔と様々な衣装に着替えています。

……さて、私は何を着ましようか？

雪乃「……それで件の問題は どうするの？」

葉山「留美ちゃん が皆と話すし かないのかもな。そういう場所を設けてさ」

結衣「でもそれだと留美ちゃんが みんなに責められちゃうよ」

葉山「じゃあ1人ずつ話し合えば」

由輝子「それも同じですね。その場ではいい顔をしてその裏でまた同じことの繰り返しとなるでしょう。女子は男子とはまた違う怖さを持っていますから」

力が男子なら言葉は女子。イジメはそういう風に展開されていくんですね。

八幡「なあ、俺に考えがあるんだが」

雪乃「却下」

八幡「決断が早すぎる……。おまえ、家の購入とか向いてないタイプだろ」

由輝子「それでどんな案ですか？比企谷君」

八幡「折角の肝試しだ。これを利用するに限る」

彩加「どう利用するの？」

八幡「……人間関係に悩みを抱えているならそれ自体を壊してしまえば悩みはなくなる。みんながぼっちになれば争いも揉め事も起きない」

成程……。人間極限状態でこそ本性が出ますから本当に怖いときは何がなんでも自

分の身を守ろうとします。人のことは考えずに自分だけ助かろうとする。そうやって酷い部分を晒してしまえばもう仲良く出来ない。そうなったらグループはバラバラになります。

周りはドン引きしていますね。確かにこの案は客観的に見ても最悪ですが比企谷君もそれがわかった上での提案でしょう。結果を残すためには手段を選んではられませんからね。

葉山「でもそれだと問題は解決しないんじゃないのか」

葉山君が言う。

八幡「だが問題の解消はできる」

由輝子「ですがリスクが高いですよ？バレたら問題になります」

八幡「ああ、だから実行は俺だけでやる」

結衣「ヒツキーだけで？」

八幡「ああ、だからもしバレても被害は俺だけだろ」

由輝子「……その役目、私もやっていいですか？」

八幡「剣？」

由輝子「比企谷君だけに責任を負わせるわけにはいきません。同じ部活の仲間として、そして友達として、私もやります」

八幡「友……達？」

由輝子「はい、少なくとも私はそう思っています。比企谷君は違うのですか？まあ仮に違うと言っても私はそのつもりですから」

八幡「ありがとな……。じゃあ、頼んでいいか？」

由輝子「はい、任せてください」

雪乃「なら、私も……」

結衣「あたしだって……！」

由輝子「由比ヶ浜さんは小町さんと進行役をお願いします。雪ノ下さんは部長らしくどっしりと構えていてください。大丈夫です。私と比企谷君を信じてください」

雪乃「そう……ならお願いするわ……頑張って」

結衣「うん……ユツキーもヒツキーも無理しないでね」

八幡「ああ……」

由輝子「はい」

くそしてく

……時間的にもそろそろですね。

八幡「そろそろだな」

由輝子「そうですね」

ガサガサ

由輝子「どうやら小学生に追いつかれそうですね」

八幡「ああ、急いで隠れ……少し遅かったみたいだな」

小学生男子1「ゾ、ゾンビだっ！」

小学生男子2「いや、あれはグールだよ！」

小学生男子3「あいつ目がヤバイぞ！」

小学生男子4「に、逃げろっ！」

八幡「……納得いかねえ」

まあドンマイとしか言いようがないですね。私は嫌いではありませんよ？比企谷君の目。それよりも……。

由輝子「計画の方はどうですか？」

八幡「……小町から開始の合図がきた。やるぞ」

由輝子「はい」

そして鶴見さんのグループがこちらに気付きました。……それにしても言いたい放題ですね。普通の格好をしてダサいのだ、やる気を出せだの、高校生なのに頭悪いだの、

さて、やりますか……。

由輝子「……何を調子に乗っているんですか？目上の人間に対する礼儀も知らないんですか？」

先程までの態度から急に小学生が怯えましたでしたが、比企谷君が続けて……。

八幡「今すげえ馬鹿にした奴いたよな？年上に接する態度じゃねーぞ。言ったのは誰だ？」

由香「……ごめんなさい」

由輝子「誰が謝れと言いましたか？私達は誰が言ったのかを聞いたんですよ？」

私の言葉で小学生達は沈黙する。

由輝子「誰が言ったのかって聞いてるんですよ!!」

私は怒鳴りながら聞く。……こんなに声を荒げたのはいつぶりでしょうか？

八幡「落ち着け剣。……そうだな、2人は見逃してやるから3人はここに残れ。誰が残るかは自分達で決めていいぞ」

比企谷君の発言で小学生達はお互いに顔を見合わせる。

仁美「……ごめんなさい」

今度は先程よりしおらしく誰かが謝った。

由輝子「謝ってほしいんじゃないやありません。3人残れと言ったんです。……早く選んで

ください」

冷たい声が周りに響きわたる。

由香「鶴見、あんた残りなさいよ……!」

酷いですよ。やはりと言いますか……。真つ先に鶴見さんを選びましたがここまでは想定内。本番はここからですね。

八幡「30秒だけ待つてやる。あと2人だ。早く選べ」

葉山君は根はいい子達だと言いましたが本当に根がいいのであれば5人で助かることを考えますが……というよりそもそもこんなことになりませんよね。だからあの子達は鶴見さんをハブっている時点でそれはありません。そしてあの子達が本当に仲が良かったらここで終わりでしょうが多分違うでしょうね。誰かを陥れて喜んだり、安心してるような人の側にはそういう人しか集まりません。

仁美「……由香がさっきあんなこと言わなければよかつたんだよ……。由香のせいじゃん……!」

森ちゃん「そうだよね」

仁美「由香、残んなよ」

由香「ちよっ!」

森ちゃん「私もそれがいいと思う」

しょうがないよといった感じで由香ちゃんという子が残ることになりました。……まあしょうがないですよね。誰でも空気には逆らえないですし、そのせいで誰かが辛い思いをしてもどうにもならないこともあります。

……だから私はそんな世の中に負けないように様々な情報を集めて自分が不利にならないよう立ち回っていますし、自分が標的にならないよう元々薄かった存在感をさらに薄くしようと気配を消すことにしました。

八幡「あと1人だ。早く選べ」

由輝子「残り10秒ですよ。9、8、7、6……」

仁美「私は何も言っていない。森ちゃんの態度が悪かったの!」

森ちゃん「はあ私? 最初が仁美でその後は由香だったじゃん!」

カウントを続ける私達ともうみんなで謝ろうと促す小学生。

八幡「5、4、3、2、1」

そろそろ頃合いですね。『なんちゃってドツキリでした♪』とでも言うておけばそれでOKです。

留美「あの!」

鶴見さんがそう言った瞬間

ピピッパシヤ

!?!これは……デジカメのフラッシュユ?

留美「こつち、急いで!!」

そう言つて鶴見さんは小学生の手を掴んで走りました。

雪乃「……………あの子がみんなを助けたつてことかしら」

そう言いながら雪ノ下さんと、由比ヶ浜さんがこちらに近付いてくる。

結衣「本当は仲良かった……のかな」

八幡「誰かを貶めないと仲良くしてられないのが本物なわけないだろ……」

由輝子「そうですね。……でも偽物とわかつていても手を差し伸べたいと思つたらそれはきつとそれは本物なんでしょうね」

私は自分を守るために情報収集をしていますですがいつかそういうのが手に入るのでしょうか……?

肝試しが終わりキャンプファイヤーの時間。私と比企谷君は石段に座っています。

平塚「随分と危ない橋を渡つたな」

由輝子「平塚先生……」

平塚「1歩間違えれば問題になっていたかもしれない」

八幡「はあ……すいません」

平塚「責めてはいない。むしろ時間がない中でよくやったと思っている」

由輝子「方法は最低でしたけど向こうの先生に鶴見さんの問題が知られるよりかはよかったですとは思いますが」

平塚「そうだな……。そういう人間だからこそどん底に落ちた人間に寄り添えるかもしれない。そういう人間は貴重だ」

由輝子「……それって褒めてますか？」

キャンプファイヤーが終わり2日目すべてのプログラムを消化した後私は比企谷君に話しかける。

由輝子「比企谷君、お疲れ様でした」

八幡「剣か……。悪かったな。あんな役目させちまって」

由輝子「私がやると言ったんです。それに鶴見さんは自分で自分の意志で前に進みました。比企谷君の案のおかげです」

私も彼女を見習って頑張りますよ。

くそしてく

平塚「ご苦労だったな。家に帰るまでが合宿だ。気をつけて帰りたまえ。では解散！」

最後なんか遠足みたいですね。

由輝子「では、私はバイトがありますのでこれで失礼します」

八幡「お前今日もバイト入ってるのかよ」

由輝子「昨日の夜に帰りの車でぐつすりと眠れましたので問題ありません。お先に失礼します。みなさん、お疲れ様でした」

雪乃「ええ、お疲れ様」

結衣「じゃーね、ユツキー！」

小町「バイバイです、由輝子さん!!」

彩加「またね、剣さん」

八幡「お疲れさん、バイトがんばれよ」

由輝子「はい、では」

この合宿は色々ありましたね。早速美咲さんにお土産話が出来ましたね。……話せない内容もありますが。

八幡 side

ふう、やつと終わったか……。色々あったな。小町に騙されて行った合宿も今となつては悪くない思い出だ。雪ノ下には相変わらず罵倒されるがその罵倒も剣のおかげで大分少なくなつたな。

剣か……。初めて見た時は地味な印象を持っていたが結構グイグイいく奴だとわかつたらビックリしたな。アドレスを交換しようとか言つてメールもほぼ毎日してるし。

俺のベストプレイスに剣がいたことにも驚いた。聞くと2日に1度はここで飯を食つてるとか……。俺の知らない間に彼女と飯を食つていたらしい。それに気配遮断のスキルも羨ましいと思つた。それにマツカンが好きだと言つたことも好印象だったな。

他にもテニスの件で葉山達を追い返したり、合宿のことで小町に騙された時もキチンと小町や平塚先生に注意したり、千葉村で雪ノ下と三浦の口喧嘩を止めたり、あいつに驚かされてばっかだな俺……。

俺の人間関係を壊すという提案にも1番に賛成してくれた上に俺1人でやろうとしたことに対して危険を省みず手伝つてくれた。あの件も剣がいなきやどうなつてたかわかんないしな。それにあいつは俺のことをと、友達つて言つてくれたし。

そういえば合宿の夜寝る前に戸部が好きな奴の話をしたときに海老名さんに気があると言った時はマジかよと思つたし、葉山もこういうことに乗つたのも意外だった。イニシャルだけだと折れた形だったが、葉山が好きな奴のイニシャルをYつて言つてたな。雪ノ下か、由比ヶ浜か、三浦か、それとも剣か……。

……俺は剣のことをどう思ってるんだ？あいつは由比ヶ浜以上に俺に優しい気がするし、俺自身優しい女の子は嫌いだと思つていたが剣には不思議とそんな感情を抱いていない。……何だろうな、この気持ちは

小町「お兄ちゃん？早く帰るよ」

八幡「ああ……悪いすぐ行くわ」

まあいいか……。

私と花火大会

奉仕部の合宿が終わった数日後のある日

美咲「由輝子ちゃん、月末にある花火大会、今年はどうするの？」

この辺りは毎年花火大会が月末にあります。去年は美咲さんと、貴賓席で一緒に見ましたが：

由輝子「今年はある人を誘ってみようと思ひまして」

美咲「そうなんだ。それってBARで見た男の子？」

由輝子「そうですね。比企谷君というのですが」

美咲「そっかそっか、由輝子ちゃんも遂に好きな男の子が出来たんだね」

由輝子「そうなんですかね？ 良くは思っていますが、わからないんですよね。なので気持ちを確かめるためにも彼を誘います」

美咲「わかった！ なら、去年私と見たところをとっておくから、由輝子ちゃんはその比企谷君と一緒に来てね」

由輝子「気が早いですよ。もしかしたら彼にも行く相手がいるかもしれませんし」

美咲「そっか…。他にも女の子2人いたもんね。もしかしたらその2人のどちらかと

行くかもなんだよね……」

何故かしよぼんと落ち込む美咲さん。

由輝子「なのでもし彼が無理そうなら美咲さんと一緒に行くこうと思います」

美咲「わかった。なら今日誘ってみてよ！」

由輝子「今日……ですか？」

美咲「うん！なるべく早い方がいいからね！」

由輝子「はあ。わかりました」

ですがいざ誘うとなると緊張しますね。……この緊張は今までなかった感情です。

pull……pullガチャツ

八幡「もしもし？」

由輝子「こんにちは、比企谷君」

八幡「おう、剣か。どうした？」

由輝子「実は比企谷君と月末にある花火大会に行きたいので、こうしてお誘いするために電話しました。その日は予定は空いてますか？もし先約があるならそちらを優先して構いませんが……」

もし先約があったら少し切ない気持ちになりますね。これが恋愛感情なんですよか……

八幡「俺と…2人で？」

由輝子「はい、比企谷君と2人きりで行きたいです。いわゆるデートというやつです」

八幡「おまつ…、急に言われると意識しちゃうだろうが……」

私も言っていてすごくドキドキしています。おそらく私は今顔が赤くなっていますね

……

由輝子「それで…どうでしょうか？」

八幡「俺でよければ……一緒に行ってもいいぞ」

由輝子「ありがとうございます。当日、楽しみにしていますね」

八幡「お、おう」

由輝子「現地集合にしたいところですが、現地は混雑しますので駅前集合しましょう」

八幡「わかった」

由輝子「では楽しみにしますね？比企谷君」

八幡「あ、ああ…俺も…た、楽しみにしてるぞ」

由輝子「では、失礼します」

そう言つて私は比企谷君との通話を終わりました。

由輝子「ふう、なんだか疲れました」

美咲「それでそれで!? どうだったの!？」

由輝子「はい、無事に誘うことが出来ました」

美咲「おおうっ! じゃあ2人のためにもいい席を用意しとくね!」

と何故か私以上にはしゃいでいる美咲さん。やたらと興奮してますね…私もしゃぎたい気持ちはあるんですよ?

美咲「じゃあ、現地についたらLINEちょうだい!」

由輝子「わかりました」

さて、家に帰って準備しましょうか。この花火大会で比企谷君のことをどう思っているか、時々感じる嫉妬みたいなもの、そして…彼のが好きなのか…。全て確かめます。…なんだかドキドキすると同時に楽しみです。

八幡 side

ふう、ドキドキしたぜ…。まさか剣に花火大会の誘いが来るとは…。そしてどこかわくわくしている俺がいる。…俺は剣のことが好きなんだろうか? わからんな。この気持ちをは花火大会で確かめるか。…今度は勘違いじゃないといいけどな。

ピンポン

小町「あつ、結衣さんかな?」

「そういえば今由比ヶ浜の犬を預かっていたな……」

結衣「いやゝありがと。サブレが迷惑かけてなかった？」

小町「いえいえそんな、またサブレ連れて遊びに来てくださいね」

結衣「来る来る！絶対来るよ」

小町「小町待つてますから、是非遊びに来てください」

結衣「そうだ！花火大会行かない？サブレの面倒見てくれたお礼に」

小町「月末の花火大会ですね！」

結衣「うん」

小町「あー、小町も行きたいんですけどねゝ受験生だからどこか遊びに行くのは無理
そうです……」

結衣「そっか……そうだよね」

小町「ええすみません。でも！小町買ってきて欲しいものはあるんです。あくでも小町にはその時間がない！困ったなー、結構量あるから結衣さん一人だと大変だなあ」

小町がジロリとこつちを見ながら言う。

結衣「そ、そうだヒッキー！小町ちゃんのお礼の品を買いに行くことにしようよ！
ヒッキーも小町ちゃんにお世話になつてゐるんだし！」

八幡「や、でもな……」

小町「花火大会に女の子だけで行くのは心配ですわ…最近の世の中は物騒ですし…ああ、こんな時に暇な男手があるといいのに…」ハア

小町と由比ヶ浜がこつちをじつと見ている。でもな…

八幡「悪いがその日は予定がある。だから無理だ」

小町「お兄ちゃんもしかしてもう誰かと約束してるの？」

この日は俺にとっても大事な日だからな。剣のことをどう思っているかを確かめなくてはいけない。

八幡「ああ、だから小町の欲しいもんはそいつと買いに行く」

結衣「えっ…」

小町「お兄ちゃん…そんなに大切な約束なの？」

八幡「そういうわけだすまんな由比ヶ浜、俺にとって大切な約束なんだ」

結衣「それって…誰と行くの？」

剣のためにも言わない方がいいだろうな。

八幡「なんで言わなくちゃいけないんだ？それに聞いてどうする気だ？」

結衣「そっ、それは……」

八幡「とにかく無理なもんは無理だ。俺は準備するから帰ってくれ」

そうやって俺は2階に上がっていった。

八幡「さて、とは言ってもスマホと財布くらいしか持っていくものがないんだよな……」

小町「お兄ちゃん、本当に先約があるの？」

八幡「ああ、嘘じゃない」

小町「本当に？誰と行くの？」

しつこいな……まあ小町ならいいか。

八幡「……剣とだよ」

小町「由輝子さんと？」

八幡「ああ……」

小町「それってもしかしてデート!?お兄ちゃんいつの間に由輝子さんと約束したの!?」

八幡「今日誘われたんだよ」

小町「そうなんだ……。由輝子さん、積極的だなあ」

それは俺も思った。

小町「そつか。結衣さんは残念だけど、由輝子さんとのデート頑張つてね！」

デート……か。

八幡「ああ、頑張るよ」

この気持ちを確認めなきやな。

八幡 side out

く花火大会当日く

浴衣の着付けに手間取って少し遅れましたね。比企谷君はもう来てるでしょうか？

……いましたね。

由輝子「すみません、遅れました」

八幡「…あ、いや別に大丈夫だ。まあその…」

由輝子「?どうかしましたか…?」

八幡「その、浴衣、似合ってるぞ」

由輝子「あ、ありがとうございます」

不意に褒められるのは慣れてなかったので、初デートというのもあつていつもの調子がでませんね…。付き合う前の男女はみんなこんな感じなんでしょうか？

八幡「…とりあえず行くか」

由輝子「はい」

さて、気を取り直して比企谷君とデートです。お祭りデートというやつですね。……意識するとなんだか恥ずかしくなってきました…。

く花火会場く

花火までまだ時間がありますね……。美咲さんはまだ来てないみたいですし……。
…とりあえず美咲さんにLINEをしておきましょう。

八幡「花火の開始って7時半だよな。まだ時間あるしどうする？」

由輝子「小町さんからメールで欲しいもののリストがきてますのでそれを見ましようか」

えっと

焼きそば：400円

わたあめ：500円

ラムネ：300円

たこ焼き：500円

花火を見た思い出：プライスレス

……なんでしょうか？この、

八幡「なんだこの最後の…」

まあ言いたいことはわかりますが……

八幡「んじゃ、適当に回るか」

由輝子「そうですね」

くそしてく

由輝子「まずは常温でも問題のないわたあめからにしましょう」

八幡「そうだな」

それから私達は買い物リストを少しずつ買っていく、もうすぐ花火の始まる時間なので、美咲さんのいるところまで行くことになりました。

由輝子「この辺りまで来てようやく人が少なくなりましたね」

八幡「そうだな。こんなに混むって知ってたら小さなビニールシートくらいは準備してきたんだけどな」

比企谷君は本当に気が使えて優しい人ですね。何故他の人は彼の優しさに気付くことができないのでしょうか？

八幡「ここ、有料エリアだな」

由輝子「問題ありません。美咲さんに頼んで場所をとってもらってますから、そちらに行きましょう」

八幡「美咲さんってBARで剣と一緒にいた人だよな？」

由輝子「はい、確かこの辺のはずですが…」

美咲「由輝子ちゃん。こっちこっち！」

由輝子「美咲さん、こんばんは」

美咲「うん、こんばんは！それでそっちの子が比企谷君？」

由輝子「そうですよ」

美咲「BARで合ったけど改めてお話しするのは初めてだね。私は佐野美咲だよ！よろしくね！」

八幡「ひ、比企谷八幡です。よろしくお願いします」

美咲「うん！よろしくね！…じゃあ私は挨拶回りに行ってくるからあとは2人で楽しんでね！」

由輝子「はい、ありがとうございます。美咲さん」

八幡「すげえな…佐野さん。確か雪ノ下の姉ちゃん先輩だったよな、何者なんだ？」

由輝子「そうですね。陽乃さんの先輩で佐野グループの御令嬢にあたる方です」

八幡「そんなすげえ人といつ知り合ったんだ？」

由輝子「私が小学3歳の時に母に紹介してもらいました。私は美咲さんに出会って世界が変わりました。あの人は私にとって恩人です。バイトも美咲さんの紹介でしたし」

八幡「佐野グループって世界的に有名なとこだよな？俺でも知ってるくらいだし…そんな人がなんでバイトを？」

由輝子「本人曰く社会勉強だそうですよ。グループを継ぐ前に労働の苦勞を知るためだと言っていました」

八幡「本当にすげえ人だな。俺には真似できん」

由輝子「比企谷君は比企谷君のよさがありますよ」

八幡「そっか、ありがとな」

由輝子「いえ、私は思ったことをそのまま口にしただけですのぞ」

ああ、楽しいですね。彼と2人きりは初めてで緊張しましたが、話してみると改めて彼の優しさが伝わってきます。この気持ちは本物ですね。

私は：彼の、比企谷君のことが好きみたいです。

彼と話したり、彼とメールしたり、彼と部活をしたり、彼といるのは本当に楽しいです。願えばこの時間がずっと続けばいいと思います。

八幡 side

今日のデートでわかった。これは勘違いじゃない。

俺は彼女が：剣のことが好きみたいだ…。

あいつとは話していても楽しいし、アニメネタとも通じるし、あいつ自身もたまにアニメネタ使うし、同じマツカン好きだし、彼女といるのが楽しい。俺はいつの間

にか彼女と会うのを楽しみにしてたんだ。

八幡 side out

由輝子「花火が始まりますよ」

八幡「そうだな」

綺麗ですね。……花火大会で告白する人もいますがムードとしては今以上に最高のタイミングはないでしょう。……しかし漫画とかだと告白が花火の音で掻き消されて某難聴系ラノベ主人公の如く『えっ?ごめん聞こえなかった』状態になるでしょう。……それでもタイミングは……

今しか……

由輝子「比企谷君に話があります。……いいでしょうか?」

八幡「剣?」

由輝子「……比企谷君、……私は」

花火がどんどん打ち上がる。例え……聞こえなくても!

由輝子「私はあなたのことが、比企谷八幡君のことが好きです」

八幡「!!」

由輝子「初めて見たときから気になってました。その時はまだそこまで意識してませ

んでしたが、私が奉仕部に入ってから比企谷君と話すようになって、一緒に部活をして、千葉村に行つて、小学生を怖がらせたり、…これはなんか違いますね…。とにかく一緒に過ごしている内に比企谷君の存在が私の中で大きくなっていききました。比企谷君の優しさに触れて…、この時間も含めて比企谷君といえるのが楽しいです。…そしてこの花火大会でようやく気付きました。私はあなたのことが好きなんだと。もう一度言います、私は比企谷君のことが好きです。私と付き合ってください」

私は頭を下げる。遂に言いました。花火の音に負けずに、比企谷君に告白しました。…ですが比企谷君は私をどう思っているでしょうか？…でも断られる可能性があるとと思うと顔が上げられません。私はこんなに臆病だったんですね。

八幡「剣、顔を上げてくれ」

比企谷君に言われ、私は顔を上げる。

八幡「…俺も剣に言おうと思つてたことがある」

由輝子「なん…でしようか」

八幡「俺も今日の花火大会で気付いたことがあってな、今までもどこか引つ掛かつてたんだ。この気持ちはなんだって…でもそれがようやくわかった。俺はお前が、剣由輝子の子のことが好きだ」

由輝子「それって…」

八幡「俺も剣と話しているのが楽しかったんだ。剣と過ごしている時間が好きで、優しくてもどうせ勘違いだと思ってた。剣は奉仕部の誰よりも俺に優しくしてくれた。優しい女の子なんだと思ってた、でも違った。剣は誰よりも、あの雪ノ下よりも厳しく、そして強かった。俺はそんなところに惹かれていったんだ。俺もこの時間が楽しい。…俺は剣のことが好きだと気付いた、だから俺は剣のことが好きだ。俺と付き合ってくれ」

比企谷君も私といるのが楽しいと言ってくれました。…そして、告白をしてくれました。…：返事は決まっています。

由輝子「はい！よろしくお願ひします！」

八幡「ああ、これからよろしくな」

美咲「戻ったよ。どうしたの？2人共なんか嬉しそうだよ？」

由輝子「はい、とても嬉しいです」

八幡「ちよっ！」

美咲「…なるほどね、おめでとう2人共。これからも幸せにね」

由輝子&八幡「はい」

美咲「ファイトだよっ！」

美咲さんの『ファイトだよっ！』頂きました。これを糧に2人で頑張ります。

美咲「花火も終わったし、私は帰るね」

花火も終わり、美咲さんは帰っていききました。

八幡「……俺らも帰るか」

由輝子「そうですね」

く帰り道く

由輝子「今日はとても楽しかったです」

八幡「ああ、俺もだ」

由輝子「ここでお別れですね。……また学校で会いましょう、……八幡君」

八幡「……おう、またな由輝子」

私達は抱擁を交わしました。

今日の花火大会で私は八幡君と付き合うことができました。もしかしたら振られるかとも思っていました。が両思いでとても嬉しいです。

これからが楽しみです。八幡君との思い出をたくさん作っていきましょう。

私と文化祭準備

花火大会が終わり、今日は始業式。折角恋人同士になったので、八幡君と一緒に学校に行こうと思いい昨日メールを送りました。

最初の内は恥ずかしがってましたが、恋人なのですからいいでしょう？とメールをしたら一緒に行ってくれることになりました。

由輝子「おはようございます、八幡君」

八幡「おう、おはよう由輝子」

挨拶をして八幡君と登校する。なんだか夢のようですね。

八幡「なんか：夢みたいだな」

八幡君もそう思っていたようですね。

由輝子「ですが紛れもない現実です。私は八幡君と恋人同士の関係になれてとても嬉しいです」

八幡「ああ、俺もだ」

学校につくと八幡君は目立ちたくないから教室には別々に入ろうと提案があったので、私はお手洗いにいくことにして八幡君と別れました。：彼女としては些か不本意で

すが、まあ私もあまり目立ちたくないので問題ないでしょう。

〈教室〉

今日は始業式ですが、早いうちに文化祭の実行委員を決めようということになり、このLHRでやることになりました。

公平に決めるため、くじ引きで男女2名ずつが実行委員に決定します。…私ですか？もちろん実行委員になりました。…バイトのシフトを変更しないといけませんね

八幡「なん…だと…」

どうやら八幡君も文実になったようですね。私は八幡君と一緒に嬉しいですけど、彼はこの世の終わりのような顔をしていますね。

その後、女子は相模さん、男子は立花君に決まりました。

先生「これでホームルームは終わりだ。実行委員に選らはれた人は明日から委員会があるから頑張つて励むように」

ホームルームが終わり、私は八幡君と一緒に部室に行くことにしました。

〈部室〉

私は雪ノ下さんに私と八幡君が実行委員になったことを伝えました。

雪乃「……そう、わかったわ。剣さんと比企谷君はそちらを優先して構わないわ」

八幡「雪ノ下は実行委員じゃないのか？」

雪乃「ええ、……それにしても比企谷君が実行委員なのは意外ね」

八幡「……くじ引きだったからな」

結衣「やつはろー！」

雪乃「こんにちは、由比ヶ浜さん」

由輝子「おはようございます」

八幡「おう」

結衣「それにしてもヒツキーとユツキーが実行委員なんてなんか意外かも！」

由輝子「まあ、くじ引きですからね。もしかしたら由比ヶ浜さんが選ばれていたかも

しれませんよ？」

結衣「うっ……あたし、選ばれたら上手く出来る自信ないかも……」

八幡「終わった話をしてもしようがないだろ」

由輝子「そうですね」

その後特に依頼人が来ることもなく、今日の部活は終わりました。

由輝子「……というわけでしばらく入れそうにありません」

私は文実になったことで美咲さんにバイトを休むことを伝えました

美咲「わかった。由輝子ちゃん、文実頑張つてね！」

由輝子「はい」

……：そういえば奉仕部の2人に私と八幡君が付き合つてることを言つてませんでしたね。八幡君が自分から言うとは思えませんし、聞かれたら答えることにしましょう。

（翌日）

由輝子「八幡君、一緒に委員会に行きましょう」

八幡「ああ、わかった」

放課後になり、私は八幡君と一緒に文実に行こうとすると後ろから声が聞こえました。

立花「比企谷、剣、俺達も一緒に行つてもいいか？」

八幡「ああ。……えつと」

立花「あー……名前知らない感じか。立花剛（たちばなごう）だ。よろしく」

相模「じゃあうちも……相模南。よろしくね」

八幡「ああ、よろしくな立花、相模」

立花「ああ」

相模「よろしくー」

由輝子「では行きましょう」

くそしてく

実行委員は始まり、城廻生徒会長が軽く挨拶をした後

めぐり「じゃあ早速実行委員長を決めたいんだけど、誰かいませんか？」

誰の手も挙がりませんね。進んでやろうとする人はいないということですね。：私
はどちらかというサポートターですし：このまま決まらなかつたら、私が立候補しま
しようかね？

相模「あの、誰もやりたがらなかつたら：うちがやってもいいですけど」

めぐり「本当に？じゃあ自己紹介を」

相模「2年F組の相模南です。あまり前に出るのは得意じゃないけどよろしくお願
い
します」

めぐり「他に立候補は：：：うん、ないみたいだね。委員長は相模に決定します」

相模さんに拍手が上がる

めぐり「それでは今日の委員会はここまで。明日からもよろしくね」

こうして最初の文実は終わりました。

立花「大丈夫か？相模」

相模「正直ヤバいかも…」

八幡「じゃあなんでなったんだよ…」

相模「だって誰もやらなかったんだもん！」

由輝子「やばくなったら生徒会長や私達に言ってくださいね」

立花「ああ、俺達も協力する」

八幡「…まあクラスメイトだし、文化祭が中止になったら困るしな」

相模「みんな…ありがとう」

立花「比企谷は素直じゃないな…」

八幡「うるせーよ」

由輝子「八幡君らしくていいと思いますよ」

相模「そういえば剣さんって比企谷と付き合ってるの？」

由輝子「はい」

立花「そうなのか。野暮なことを聞くがいつから付き合ってるんだ？」

八幡「花火大会の時からだな」

相模「うう、いいなあ。なんか青春って感じで…。うちなんか女だらけの花火大会だったし…」

立花「どこぞの水泳大会みたいだな」

由輝子「ではそろそろ帰りましょうか」

八幡「もうこんな時間なのか」

立花「また明日もよろしく」

相模「じゃあね！」

く帰り道く

八幡「まさか相模が実行委員長になるとはな。…自信なさそうだったし大丈夫か？」

由輝子「私達でサポートしましょう。立花君もいますし問題ないと思います」

八幡「由輝子が言うなら大丈夫だろうな」

由輝子「はい」

く数日後く

相模「剣さん、今の進行状態がこんな感じなんだけど」

由輝子「そうですね…。このペースですと…」

立花「相模の奴頑張ってるみたいだな」

八幡「つーか由輝子だけでサポートが事足りてるじゃねーか」

立花「俺達は先に行くか」

八幡「そうだな。由輝子ー、俺達は先行ってるぞ」

由輝子「わかりました。…という感じにしてください」

相模「うん、ありがとね剣さん」

由輝子「大丈夫ですよ。持ちつ持たれつでいきましょう」

相模「うち持たれてばっかのような…」

由輝子「気にしたら負けです」

く会議室く

相模「それでは、定例ミーティングを始めます。宣伝広報お願いします」

宣伝広報係「掲示予定、ポスター制作が大体6割終わっています」

相模「少し遅れ気味ですね。まずは掲示物から終わらせてください。あとポスター協力の店舗への交渉を速めにスタートしてください」

宣伝広報係「はい」

相模さんが指示を出すと宣伝広報担当の人は言われたことをメモにとって席につきました。

相模「次は有志統制お願いします」

有志統制係「はい、現在の有志参加団体は10組です」

相模「地域賞のおかげで増えていますが、地域との繋がりという姿勢をしてるから参加団体の減少は避けたいところです。あとはステージの割り振り、集客の見込みや開演時のスタッフ内訳をタイムテーブルの一覧にまとめて提出してください。じゃあ次は記録雑務の…」

いい感じで進行できてますね相模さん。…これならもう心配ないでしょう。もちろん最後まで油断出来ませんが

〽翌日〽

八幡 side

今日も由輝子と相模は事前の打ち合わせのため俺と立花は先に会議室に行くのだが

…

八幡「なんかすごい人だからだな」

立花「どうしたんだろう」

会議室に入ると雪ノ下の姉である雪ノ下陽乃がいた。

陽乃「あれー？比企谷君だ！」

八幡「雪ノ下さん…どうしてここに」

めぐり「ご、ごめんね私が呼んだんだ。有志団体が足りないからどうだろうと思って

…」

城廻先輩は申し訳なさそうに言う。

立花「比企谷、知り合いか？」

八幡「J組の雪ノ下雪乃は知ってるだろ？」

立花「ああ」

八幡「この人はその雪ノ下の姉だ」

立花「そうなのか。確かにどこか似ているな」

それにしても何しに来たんだ？城廻先輩は有志団体って言ってたが…

陽乃「ねえ比企谷君、私も有志に出てもいいかな？雪乃ちゃんはいないみたいだし」

八幡「俺は委員長じゃないので決定権はありませんよ」

陽乃「そうなの？じゃあ誰が委員長？」

とやりとりをしていると由輝子と相模が遅れて入ってきた。

相模「すみません、遅れました」

由輝子「遅れて申し訳ありません」

八幡 side out

会議室に入ると陽乃さんがいました。：何をしに来たのでしょうか？

陽乃「あれ？由輝子ちゃんやつほー。由輝子ちゃんが委員長なの？」

由輝子「こんにちは、陽乃さん。それに私は違いますよ。委員長は隣にいる相模さんです」

相模「こ、こんにちは」

陽乃「ふうん、ねえ委員長ちゃん私も有志団体に出たいんだけどどうかな」

陽乃さんがそう言うのと相模さんは私に尋ねる。

相模「剣さん、団体の数は足りないから出てもいいよね？」

由輝子「そうですね。陽乃さんは一昨年の文化祭でも活躍しましたし、いいですよ」

相模「うん、ありがと。：えつと、じゃあお願いします」

陽乃「ありがと。友達も誘ってみるね！」

陽乃さんは嬉しそうに言う。そういえば美咲さんは出ないと言っていましたね。：：少し楽しみにしていたので残念です。

相模「みなさん、ちよつといいですか？」

相模さんの声でみんなが注目する。

相模「考えたんですけど、実行委員は文化祭を楽しんでこそだと思えます。クラスの方も大事でしょう。ですのでペースを上げ、早めに終わらせてクラスの出し物もがんば

りましょう」

相模さんの提案にみんなは賛成し、ペースを上げるということになりました。

相模「ふうー。疲れたー」

由輝子「お疲れ様です、相模さん」

立花「ああ、これで余裕を持ってクラスの方にも参加できるな」

八幡「それにしても…いい感じに進んだな」

相模「剣さんのおかげだよ。もし剣さんがいなかったらと思うとぞつとするよ」

由輝子「ですがここまで出来たのは相模さん自身の功績です。自信を持ってください」

相模「ありがとう。よし、この調子で文化祭を成功させるぞ！」

由輝子「そうですね、頑張りましょう」

立花「ああ」

八幡「おう」

文化祭まであと2週間ですね。最後まで実行委員として頑張りましょう。

私と文化祭本番

「文化祭当日」

あれから2週間、何事もなく順調に作業が進み、当日に間に合うことができました。

めぐり「お前らあー！文化してるかー！！」

総武高校生徒「わーわーっ！！」

めぐり「千葉の名物踊りとー！」

総武高校生徒「祭りー！！」

めぐり「同じ阿呆なら踊らにやー！」

総武高校生徒「シンガツソー！！」

すごい盛り上がりようですね。…こういう熱気はあまり得意ではありませんが、こ

れもまた一興でしょう。

由輝子「相模委員長、スタンバイします」

相模「うう…」

立花「相模、大丈夫か？」

相模「緊張で吐きそう…」

八幡「ここを乗りきれればあとは閉会の挨拶までは大きな仕事はないはずだ」

相模「……そうだね。ありがと2人とも」

めぐり「では、文化祭委員長による挨拶です」

相模さんが壇上に立つ。

相模「みなさー」

キイイイン

立花「こんなときにハウリングかよ……」

八幡「相模の奴大丈夫か？」

相模さん、大丈夫です。落ち着けば問題ありません。

めぐり「では気を取り直して実行委員長、どうぞ」

相模（ふう、落ち着けうち。さっきのは偶然、呑まれるな。深呼吸、深呼吸……）

相模「みなさん、実行委員長の相模南です。今年のスローガンはー」

ハウリングが鳴ったときはどうなるかと思いますが、なんとか持ち直せたようです

ね。

それから相模さんの挨拶は問題なく進みました。

くそしてく

相模「き、緊張した……」

八幡「頑張ったな」

立花「あのハウリングは焦ったな」

相模「ほんとだよ！うち一瞬間の中真つ白になったんだから」

由輝子「でもなんとか乗りきりましたね」

相模「うん、みんなのおかげだよ！」

由輝子「相模さんの力です」

八幡「だな、俺達は少し手伝っただけだ」

立花「そうそう、自信持っていいぞ！」

由輝子「このまま調子で最後まで頑張りましょう」

相模「うん！」

八幡「ああ」

立花「そうだな！」

由輝子「それでこれからどうしますか？」

相模「とりあえずクラスの方見に行かない？」

立花「ああ、星の王子様か……」

八幡「葉山と戸塚が主役の……」

相模「あれ？2人ともどうしたの？」

由輝子「知らない方が幸せなこともありますよ」

文実の方に余裕ができてクラスの方も手伝うことになった私達はクラスでやる劇、『星の王子様』のキャスティングに八幡君と立花君は驚愕してましたね。始めは八幡君と葉山君が主役だったのですが、八幡君が文実の仕事もあるから無理と言っていたので葉山君と戸塚君になりましたね。……海老名さんは不満そうでしたが…。

それにしても…すごい人気ですね。葉山君が主役だからでしょうか？

彩加「僕はなんにもわかってなかったんだ！」

葉山「仕方ないよ、君はまだ若い。彼の愛し方を知らなかったんだ」

彩加「今晚、君は来ちゃいけない」

葉山「そんな！どうして!?俺達はずっと一緒だって言ってただろ!!」

……台詞がB Lのそれに聞こえるのはきつと気のせいでしょう。……ええ、気のせいです。

くそしてく

相模「結構おもしろかったね！」

由輝子「…まあ、そうですね」

立花「なあ…、原作の台詞がB Lに聞こえた俺の耳はおかしくなったんだらうか…」

八幡「大丈夫だ立花……。俺もそう聞こえたから……」

劇に女子がいまいませんでしたからね。海老名監督の采配もとんでもないものです。

立花「もうこんな時間か」

相模「うち、お昼買ってくるよ！」

由輝子「私も一緒に行きましょう」

相模「ありがと、由輝子ちゃん！」

文実の仕事をしているうちに相模さんから名前と呼ばれるようになりましたね。……友達ってこんな感じでしょうか？

それから何事もなく1日目は終了しました。

く2日目く

文化祭2日目。今日は一般客も来る日、私と八幡君は記録雑務で、主に写真撮影が仕事なので……

女性客「写真取るのとかやめてもらっていいですか？」

八幡「あ……すいません。実行委員なんです」

……こんな感じで中々作業が進まなかつたりしています。

小町「お兄ちゃん！」

八幡「うおっ！」

小町さんが八幡君にハグをしていました。微笑ましい光景ですね。

八幡「おお、小町」

小町「久々の再開はハグ、これ小町的にポイント高い」

八幡「…家で毎日会ってんだろ」

小町「由輝子さんもこんにちは！」

由輝子「こんにちは、小町さん」

小町「イヤー、聞きましたよ！兄と付き合い始めたそうで！」

由輝子「はい、花火大会の日からお付き合いさせていただいています」

小町「由輝子さん、お兄ちゃんのことをよろしくお願いします!!」

由輝子「もちろんです」

八幡「…で、小町は1人で来たのか？」

小町「うん、お兄ちゃんと由輝子さんに会いに来ただけだし。お兄ちゃんは何してんの？」

八幡「……仕事だ」

小町「お兄ちゃんは何してんの？」

八幡「や、だから仕事だつて」

小町「お兄ちゃんが仕事……。小町なんか嬉しいよ。お兄ちゃんが立派になつて」

由輝子「八幡君は真面目ですから、なんだかんだ言つてもキチンとやることこなしてくれませう」

八幡「けど仕事つつても下つ端の使いつ走りみたいなものだ」

小町「そつか、じゃあ小町色々見てくるね！またね、お兄ちゃん、由輝子さん！」

そう言つて小町さんはそそくさと走つていきました。

由輝子「……では、仕事を続けましょうか」

八幡「……そうだな」

くそしてく

相模「ふう……、ふう……」

八幡「……なんだ？相模はどうしたんだ？」

立花「今エンディングセレモニーの打ち合わせしてるとこなんだが、さつきからずつ

とこの調子なんだ」

由輝子「相模さん、大丈夫ですか？」

相模「……あんまり大丈夫じゃないかも。急に緊張が戻つてきた」

めぐり「もう少しだよ相模さん。がんばろ？」

相模「は、はい」

くそしてく

相模「今年の文化祭はこれまでの中で最高の盛り上がりを見せー」

閉会の挨拶、相模さんは緊張しながらもしっかりと挨拶をしました。

相模「……文化祭実行委員長、相模南」

立花「…無事終わったようだな」

八幡「そうだな」

くそしてく

相模「な、なんとかやりきった…」

由輝子「お疲れ様です」

立花「なあ、これから打ち上げに行かないか？」

八幡「クラスのか？」

立花「それもいいけど、俺達の打ち上げにしようと思つてな。ほら2年F組文実のお

疲れ様会的な」

相模「それいいかも！」

由輝子「そうですね、八幡君も行きませんか？」

八幡「家に帰ってゆつくりしたいとこだが……、まあ、たまにはいいだらう」

立花「決定だな。場所はどうするか……」

相模「せっかくだからあまり混み合わないところがいいよね」

八幡「ああ、人混みは苦手だしな」

立花「でもこの辺だと学校の奴がたくさんいるだろうし」

由輝子「ふむ、なら穴場に詳しい人に聞いてみましょう。少し電話しますね」

そうやって私はその場を離れる。

立花「穴場に詳しい人ってどんな人なんだ？」

相模「ちよつと気になるよね」

八幡「まあその内わかるんじゃないか？」

由輝子「お待たせしました。もう少しで来るそうですので、その人も一緒に行きたい

そうです」

八幡「わかった」

立花「了解」

相模「由輝子ちゃんの知り合いなら全然いいよ」

由輝子「ありがとうございます。…あ、来ましたね」

美咲「おーい、由輝子ちゃん！」

由輝子「こんばんは、美咲さん」

美咲「比企谷君もやつほー！」

八幡「どうもっす」

美咲「そつちの2人は初めましてだね！私は佐野美咲、よろしくね！」

立花「立花剛です。よろしくお願いします」

相模「さ、相模南です」

美咲「立花君に相模さんだね！よろしく！それでどこに行くかだけど…、みんなは何か食べたいものとかある？」

立花「そうですね…ガッツリと肉を食べたいですね」

相模「うちは…野菜系が食べたいかも…」

由輝子「私は魚介類ですかね？八幡君は何か食べたいものはありますか？」

八幡「俺はそうだな…炭水化物系だな」

美咲「ふんふん、お肉に野菜に魚介に炭水化物。その条件であまり組み合わせないところは…」

由輝子「難しそうですか？」

美咲「う〜ん：あそこがいいかな？ 駅から少し歩くけどいいところがあるからそこに
行こうか！」

美咲以外『はい！』

くそして〜

美咲「ついたよ！」

由輝子「『お好み焼き・もんじゃ焼き〜吉江〜』ですか」

立花「なるほど、確かに肉も野菜も魚介も炭水化物も当てはまるな」

相模「こんなところにこんな店があつたんだ…」

美咲「ふふん、なんていったつて穴場だからね！」

由輝子「とりあえず入りましょうか」

八幡「だな。仕事詰めで腹が減った」

店員「いらつしやませー」

美咲「5人です」

店員「テーブルとお座敷どちらにいたしましょうか？」

美咲「座敷をお願いします」

店員「かしこまりました。ではこちらの席にどうぞ」

くそしてく

美咲「まずは飲み物頼もうか！みんな何飲む？」

相模「烏龍茶お願いします」

立花「俺はコーラにします」

八幡「マッカンがない……だと」

由輝子「千葉のソウルドリンクですのに……」

立花「いや、さすがにこういったところでマッカンを出さないだろ……」

その後私と八幡君は烏龍茶を頼みました。

くそしてく

相模「ふう、結構食べたね」

立花「ああ、いい感じに腹一杯だ」

八幡「お前たくさん食ってたもんな……」

美咲 「ここは私の奢りだよ！」

由輝子 「いいんですか？」

美咲 「もちろん！みんな文実頑張ってたからね！」

由輝子 「ありがとうございます」

立花 「すみません。俺かなり食べたのに……」

美咲 「気にしない気にしない！男の子だからね！食べ盛りだから食べれる時に食べた方がいいよ!!」

相模 「ありがとうございます。ご馳走さまです」

美咲 「うん！」

八幡 「佐野さん、ありがとうございます」

美咲 「うんうん！比企谷君、これからも由輝子ちゃんのことよろしくね!!」

由輝子 「美咲さん……」

八幡 「うっす」

美咲 「じゃあ私は用事があるからこれで失礼するね！みんな気を付けて帰ってね！」

由輝子 「美咲さん、ありがとうございます」

くそしてく

立花「じゃあ俺達はここで」

相模「じゃーね、由輝子ちゃん！また学校で！」

由輝子「はい、2人共今日はお疲れ様でした」

相模さんと立花君と別れ、今は八幡君と2人きりです。

由輝子「八幡君は今日、楽しかったですか？」

八幡「…ああ、楽しかった。これも由輝子のおかげだ」

由輝子「フフ、そうですか。…とところで八幡君」

八幡「なんだ？」

由輝子「11月に修学旅行があります。この修学旅行は1日目、2日目は班行動です

が3日目は自由行動ですので2人で回りませんか？」

八幡「そうだな、俺も由輝子と2人で回るのを楽しみにしてたし」

由輝子「修学旅行は京都ですので京都デートですね。今から楽しみです」

八幡「ああ、俺も」

修学旅行3拍4日：1日目と2日目は相模さんと立花君と一緒に組んで色々行つて見るのも悪くないですね。

3日目は八幡君とデート…楽しみですね。

私と修学旅行前

文化祭が終わり、体育祭も文化祭に負けないほどの盛り上がりを見せて過ぎていき、11月になりました。

もうすぐ修学旅行なので少しワクワクしています。

〈部室〉

結衣「もうすぐ修学旅行かあ。うちの学校も沖縄とかがよかつたなく。京都行っても結構どうしようもなくない?」

京都はかなり見所のある場所なのですが…人によつてはつまらないというイメージもあるものなんです。ね。

雪乃「そんなことないわ。あなた達だつて楽しみの1つや2つあるでしょう?」

結衣「あたしまだ全然調べてないからなく」

由輝子「3日目の八幡君とのデートが特に楽しみですね」

八幡「3日目の由輝子とのデートが1番楽しみだな」

結衣「ゆきのんは?」

雪乃「そうね、龍安寺の石庭や清水寺もそうだけれど、鹿苑寺や慈照寺あたりの有名なところも押さえておきたいわね」

結衣「ろくおんじ…：しようじ？」

八幡「混ざってる混ざってる」

由輝子「一般的には金閣寺、銀閣寺といいますね」

雪乃「あとは、神社によつては夜に特別拝観が行われているらしいから予定が合えば行つてみたいのだけれど、でも修学旅行となると夜間は難しいでしょうね」

由輝子「修学旅行などで行けなかつた観光名所などは後に個人で行つてみたいするのもありですけどね」

コンコン

雪乃「どうぞ」

葉山「失礼します」

戸部「つべー、マジ緊張するわー」

葉山君に戸部君ですね。何の依頼でしょうか？

雪乃「何かご用かしら」

葉山「ああ、ちよつと相談があつて…」

戸部「あの…：実は俺…：海老名さんのこといいなつて思つて、この修学旅行で決め

たいなことなんだけど」

結衣「えっマジ!？」

由輝子「言葉を要約すると海老名さんに告白して付き合いたい……ということでしょうか？」

戸部「そうそう、振られるとキツイわけ」

八幡「振られたくない……ねえ……」

告白は両思いじゃない限り確率は50%未満になりますから……

葉山「やつぱりそう簡単にはいかないかな？」

八幡「まあ……」

そもそも他人の恋愛事情に首を突っ込んでいいわけがありませんしね。

雪乃「悪いけどお役に立てなそうね」

結衣「えーっ！いいじゃん手伝ってあげようよゆきのん！戸部っちも困ってるみたいだし」

雪乃「……まあ、そこまで言うなら少し考えてみましょうか」

なんか段々由比ヶ浜さんに甘くなってますね、雪ノ下さん。

結衣「ね、ヒッキー、ユッキー……」

八幡「えー……」

どうやらやる流れのようですね…。流れに身を任せてもろくなことになりませんよ

?

由輝子「みなさんがやるなら構いませんが、何があっても私達は責任をとれませんよ

？」

戸部「あざーす！」

葉山「……………」

？…葉山君の様子がなにやら変ですね。

八幡「で、具体的にどうすればいい？」

戸部「俺が告るわけじゃん。そのサポート的なことを」

由比ヶ浜さん、何故か嬉しそうですね…

八幡「なるほど…とりあえず身の丈はわかった」

逆に身の丈しかわかりませんが…

由輝子「リスクは大きいですよ？」

葉山「まあその辺はうまくやるから」

やはり葉山君の様子が変ですね…

〳翌日〳

雪乃「では、戸部君のアピールポイントを探してみましよう」

戸部「……………隼人君と友達？」

結衣「人頼みだし…」

既に戸部君のアピールポイントではありませんね…

由輝子「他に何かありますか？」

結衣「えっと…明るい…とか？」

八幡「明るいだけで好かれるなら禿げ大人気だろ」

それは極論のような気がします…

八幡「雪ノ下は？」

雪乃「そうね……………うるさい…騒がしい…騒々しい？…賑やかなところかしらね」

八幡「お前褒める気ないだろ…」

由輝子「良く言えばムードメーカーといったところですね」

この話は前に聞いたことがあります…

八幡「戸部のいいところを探すより海老名さんの好みに合わせていこう。こういう男に弱いかあるだろ」

結衣「なるほど」

八幡「どうなんだ？海老名さんは」

結衣「えつと……姫菜の場合はこういう男子が好きとかじゃなく男同士が好きっていうか……」

男子が好きじゃなくてホモオな男子が好きなんでしょう。もう少し抑えてほしいものです。

雪乃「海老名さんは戸部君のことをどう思っているのかしら」

戸部「ヤバイわー、それ気になるっしょ」

八幡「いいのかよ…聞いちまって？」

戸部「いや、聞かないと先に進めないでしょー」

結衣「えつと……いい人だとは思ってるんじゃないかな」

女子にとってのいい人Ⅱどうでもいい人のことを言うらしいですね。

戸部「……これプラス査定じゃね？」

八幡（プラスなのはお前の頭だけだろ…）

由輝子（むしろ脈なし確定ってことになりませんか？）

戸部「つとごつめ、今日先輩来るから部活行かないとヤバいんだわ。じゃまた！」

由輝子「戸部君、最後に1つ聞きます。今回の告白は本気ですか？」

私がそう尋ねると

戸部「……ああ、本気だ」

戸部君はいつものふざけた感じではなく真剣な表情で答えました。

由輝子「……そうですね。すみません、時間をとらせてしまって」

戸部「いいっていいって！今度こそ失礼するわ」

そう言つて戸部君は部活に行きました。

結衣「ユツキー、さっきのはなんだったの？」

由輝子「戸部君の決意表明みたいなものです。今回彼がいかにも本気で海老名さんのことを想っているか改めてわかりましたから」

八幡「なるほどな……」

コンコン

雪乃「どうぞ」

海老名「失礼します」

入つて来たのは海老名さん。……やはり戸部君に関することでしょうね。

結衣「姫菜じゃん」

海老名「や、結衣はろはろ。雪ノ下さんと剣さんに比企谷君もはろはろ」

由輝子「こんにちは」

八幡「どうも」

雪乃「どうぞ、適当にかけて」

海老名「うん、ありがと」

海老名さんが腰掛ける。…仕掛けてみますか。

由輝子「今日はどうしたんですか？」

海老名「あ、あのね…実は戸部つちのことで相談があつて…」

結衣「と、とと戸部つち!?!戸部つちが何?」

動揺しすぎでしょう。もう少し取り繕えないんですか?

海老名「その、言いづらいんだけど…戸部つちが」

結衣「戸部つちが…!?!」

勘のいい人ならこの後のオチがわかっているでしょう。

海老名「戸部つち最近比企谷君や隼人君と仲良くしすぎてるっぽくて、大和君と大岡君がフラストレーション!!」

八幡「は?」

結衣「ん?」

やはり…

海老名「私はもつと爛れた関係が見たいのに!これじゃトライアングルハートが台無しだよ!」

由輝子「そんなこと知りません」

雪乃「…つまりどういうことかしら…？」

海老名「…：…なんかね、今のグループがちよつと変わっちゃった感じがして…」

由輝子「良い方に変わっていくのならそれは良いことではないでしょうか？」

海老名「でも必ずしも良い方とは限らない…。もしかしたら悪い方に変わってしまつてるかもしれないし、それはちよつと嫌だな。…：…これまで通り仲良くやりたいから…」

彼女はグループが崩壊するかもしれないから、それが嫌なんでしょうね。

海老名「あ、でも比企谷君も仲良くしてくれるのは全然いいよ。私も目の保養になるし」

八幡「ねえよ」

目の保養になるけど、それと引き換えで鼻血を出すんですね。…：…この人いずれ出血多量で死ぬんじゃないでしょうか？

海老名「じゃ、修学旅行でもおいしいの期待してるからよろしくね？」

海老名さんはわかりにくく依頼をしましたが、多分由比ヶ浜さんがいるから直接は話せないでしょうね。…：八幡君が勘づいてるかもって感じぐらいですし、私も彼女の情報がなければわからないままでしたし、ハッキリと言った方が良さそうですね。

由輝子「海老名さん、依頼があるならちやんと言つてください。そうでなければ私達

は何もしませんよ?」

海老名「!!」

八幡「…やっぱりか」

八幡は気付いていたようですね。

結衣「えっ? 依頼?」

雪乃「今の言葉の中に依頼があつたと言うのかしら?」

海老名「……………」

由輝子「戸部君のこと、グループが変わった、それが悪い方に変わって嫌だからこれまで通り仲良くやりたい、修学旅行でおいしいの期待している、これらを要約すると海老名さんは戸部君が自分に好意を持っていると知って、告白を断りたいけどそれでグループが崩壊するのは嫌だからそれを防いでほしい、ということでしょう」

雪乃「そうなのかしら?」

海老名「……………そうだよ。戸部っちの告白を防いでほしいのが私の依頼」

結衣「そんな……………なんで…」

由輝子「海老名さん本人は誰とも付き合う気はないと聞いたことがあります、…由比ヶ浜さんは知らなかったみたいですね」

結衣「…ユツキーはこのことを知ってたの?」

由輝子「前に三浦さんが海老名さんに男子を紹介しようとしたのを嫌がったという話を聞きました。…由比ヶ浜は三浦さんか海老名さんに聞いてなかったんですか？」

結衣「……うん」

海老名「…すごいね剣さん、あれだけわかりにくくしたのに、わかっちゃうなんて……」

由輝子「情報を整理してそこから答えを導きました。かなり前の情報なので、思い出すのに時間がかかりましたが……」

八幡「改めて聞くと情報ってすげえ…」

雪乃「それで、依頼の方はどうすればいいのかしら？」

雪ノ下さんが私の方を見る。本来なら部長である雪ノ下さんが決めるべきでしょうが、経験がないのか私が答えを出すみたいになってますね。…私も八幡君以外は告白の経験はありませんよ？

由輝子「海老名さん、戸部君の告白を受けてください。それで今は誰とも付き合う気はないと断るしかないでしょう」

海老名「……でもそれで気まづくなったら」

由輝子「戸部君は本気でした。彼はグループ崩壊のリスクを承知の上での行動でしょう。本気には本気で答えるべきです」

八幡「あの時の戸部への質問はそういうことだったのか…」

海老名「…わかったよ。ごめんね、迷惑かけて」

由輝子「いえ、こちらこそすみませんでした」

（翌日）

放課後、私は部活に行く前に葉山君を呼び出しました。

葉山「遅くなってごめん。それで話って何かな？ 剣さん」

由輝子「昨日、海老名さんが奉仕部に依頼に来ました。かなりわかりにくかったです
が、戸部君の告白を防いでほしいと」

葉山「…そうか」

由輝子「…葉山君はこのことを知っていたのではないですか？ 戸部君と海老名さん、
両方の話を聞いて板挟みになったのではないですか？」

葉山「そこまでわかっていたのか…ああ、もしかしたら奉仕部なら…いや比企谷と
君なら何かわかるんじゃないかと期待してたかもしれない。比企谷は俺には出来ない
やり方で問題を解決するし、君は戸塚の件で物事をハッキリと言うことがわかったから
もしかしたら断ることも出来るんじゃないかと考えてたんだ」

由輝子「結局受けることになりましたが、ハッキリと断ればよかったですね」

葉山「いや、俺が戸部に言い聞かせるべきだったんだ。姫菜への告白は待つてほしいと」

由輝子「……戸部君は本気で海老名さんに告白するつもりです。海老名さんはそれによつてグループが気まづくなつたら、それが原因で壊れてしまつたらと思つていますが、葉山君も同じですか？ 私から見れば上辺だけのグループに見えますがそれでも守りたいですか？」

葉山「……俺はあのグループを守りたい。そしてあのグループが上辺じゃなく、本物であることを信じたい」

由輝子「……そうですか。まあ頑張つてください。戸部君は本気ですから、仮に海老名さんがどう言おうと彼に告白してもらいます」

葉山「ああ、そうだな」

そう言つた葉山君はどこかスッキリした表情をしていました。……あとは戸部君と海老名さん次第ですね。

ホームルームの時間に班を決めました。うちのクラスは34人で7人班4つの6人班1つでしたので、私達の班が6人班でメンバーは私と八幡君、相模さん、立花君、戸塚君、川崎さんの6人になりました。

修学旅行が楽しみですね。

私と告白作戦

修学旅行1日目

三浦「あーし窓側がいい。ほら、結衣、海老名」

海老名「どう座る？」

戸部「適当でいいべー」

結衣「じゃあ姫菜が優美子の隣で、あたしは向かい側に座るから。戸部っちは」

海老名「はいはい、結衣はそっち。私はその隣」

結衣「わっ！」

由比ヶ浜さんは海老名さんと戸部君を隣同士しようとして失敗したみたいですね。

…まあ席が隣になっただけで距離が縮まるなら戸部君も苦労しないでしょうね。

相模「ねえねえ、みんなでトランプしようよ！」

立花「おっ、いいねやろうか」

彩加「あつ、僕もやる！」

由輝子「私達もやりましょうか、八幡君」

八幡「そうだな、川崎もやるか？」

沙希「…うん」

川崎さんはどこか恥ずかしそうですね。こういうのに慣れていないのでしょうか？
それから私達は京都に着くまで6人でトランプをしました。…戸塚君がとても強
かったです。

〈京都〉

私達の班は依頼のこともあつて葉山君達と同じところを回ることになりました。…
相模さんは三浦さんが苦手なようです。話せば案外気が合うような感じですが。

それから色々あつて、日が暮れました。

自販機の前を通りかかると八幡君が呆然としていました。…何があつたんでしょう
か？

由輝子「どうかしたんですか八幡君？」

八幡「ああ…由輝子か。マツカンがなくて絶望してたとこだ」

由輝子「私のでよかつたらどうぞ」

八幡「マツカンを持つてるのか…？」

由輝子「はい、京都にはマツカンがありませんので、予め持つてきてました」

八幡「…そうか。ありがとな」

由輝子「好きな人に尽くすのは当たり前のことです。……ところで戸部君の様子はどうですか？同じ部屋でしたよね？」

八幡「それなんだが…戸部は2日目に告白するつもりらしい」

由輝子「3日目じゃないんですか？」

八幡「なんでも2日目だからこそできる秘策があるんだと」

由輝子「それ次第でどう転ぶかってことですな」

八幡「それに葉山も言いたいことがあるって言ってたな」

由輝子「葉山君がですか？」

八幡「ああ、これもいい機会だからって言ってたが…あいつになんかあったのか？」

おそらく前に葉山君に言ったことが関係しているでしょうね。…葉山君達はあのグループが『本物』になれるかどうか、或いはそれに近づくことができるかどうか…それがこの1件でわかるかもしれませぬ。

〈修学旅行2日目〉

2日目は八幡君達と色々なところに見て回りました。その中でもう1度行ってみたいところは3日目に八幡君と行くことにします。

そして私と八幡君は奉仕部で集合して、戸部君の告白を見守ることにしました。その向こうには葉山君のグループが見えています。由比ヶ浜さんはグループの方にいますね。

告白場所は青々とした竹林。夜になると灯籠が光り、とても綺麗なことで有名な観光スポットですね。：告白されるとしたらこういうところがいいんでしょうね。

雪乃「この2日間どうだったかしら？私は何もできなかったから：」

雪ノ下さんはクラスが違いますからね：

結衣「いい雰囲気にはなるんだけど：」

八幡「海老名さんが戸部を避けてる感じだったな」

雪乃「そう：」

戸部君の秘策、そして葉山君が伝えたいこと、この2つ次第で葉山君のグループに大きな影響を与えることになるでしょう。

葉山「剣さん、少しいいかな？」

葉山君が話があると声をかけてきたので、私はそれに従いついていきました。

由輝子「どうかしましたか？」

葉山「この2日間、君はどう感じた？」

由輝子「戸部君と海老名さんですか？：：：そうですね、海老名さんが一方的に避けている感じでした」

葉山「…そうか」

由輝子「…：それで、葉山君は2人に…：というよりはグループ全員に言いたいことがあるのですが、何を言うつもりですか？」

葉山「俺は、あのグループが本物の友達関係になれたらいいと思ってる。…それを戸部達に伝える」

由輝子「…まあ頑張ってください。それで、戸部君は秘策があると言っていました、葉山君は心当たりがあるんですか？」

葉山「いや、何も聞いてない」

由輝子「そうですか…。私はそろそろ戻りますね」

葉山「ああ、時間をとらせて悪かった」

八幡「葉山と何を話してたんだ？」

由輝子「…：たいしたことじゃないですよ」

八幡「そうか。由輝子がそう言うならきつとそうなんだろうな」

戸部「あのさ…」

いよいよ告白するようですね。

戸部「ずっと前から好きでした！俺と付き合ってください!!」

海老名「…：ごめん、今は誰とも付き合う気はないから。…：話はそれだけ？」

戸部「あ、あのさ、俺らこれからも友達としてー」

海老名「無理だよ」

戸部君の秘策はこれからも友達として一緒にやっていこうということです。スッキリとした状態で3日目みんなで回ろうといった感じでしょう。

戸部「え……なんで……」

海老名「もう今まで通りにはできない。できたとしても変に取り繕うことになる。私達の関係はそこまで深くないから……」

海老名さんが続きを言おうとしたところで葉山君が2人のもとに歩いてきた。

葉山「……………」

海老名「隼人君？」

戸部「どしたん？」

葉山「…俺は、ある人に言われたんだ。俺達は上辺だけのグループだと。それを否定したいのに、できなかった……。言われるまで気付かなかったんだ。他でもない俺自身が好きなんだ。素の自分を出せるように安心、信頼できる関係になりたい。俺は『本物』が欲しいんだ。…戸部や姫菜だけじゃない。優美子も結衣も、もちろん大和や大岡も入れたこのグループで」

三浦「隼人……」

三浦さんは心配そうに葉山君の方を見る。

海老名「……できるの？……私達がそんな関係になれるの？」

葉山「ああ、みんながそう思ってたらきつと」

三浦「あーしもこのグループが好きだからそう思いたいし」

海老名「優美子……」

結衣「……私もみんなと本物の信頼関係を築きたい！」

葉山「そうだな、結衣の言う通り俺達で『本物』を作っていこう！」

海老名「うん！」

戸部「よっしゃ！明日もみんなで回ろうぜ!!」

大和「ああ」

大岡「楽しみだな！」

いつの間にか葉山君のグループが勢揃いで楽しく話していますね。……どうやら『本物』に近づけたようですね。

雪乃「……意外な展開だったわね」

雪ノ下さんは驚いた様子で言う。彼女からしたら葉山君があそこまで拘るところを見るのは初めてでしょうから。

八幡「…あれが葉山にとっての本物なんだな」

由輝子「そうですね。これであのグループの結束がよりいっそう固まることでしょう」

私達は帰ろうとすると葉山君がこちらに近づいてきた。

葉山「ありがとう」

由輝子「私は何もしてません。葉山君自身が変わったんですよ」

葉山「今の俺がいるのは間違いなく剣さんのおかげだ」

由輝子「…これからはその『本物』を手放さないようにした方がいいですよ」

葉山「ああ、もちろん！」

そう言つて葉山君は去つて行きました。

雪乃「彼も変わったのね…」

八幡「だな、あいつはもう今までの葉山じゃない。イケメンに拍車がかかつてる」

由輝子「戸部君の依頼もこれで終わりですね」

明日はいよいよ八幡君とのデートですね。

私と京都デート

（修学旅行3日目）

3日目、今日は八幡君とのデートです。楽しみで朝食が終わるとすぐにロビーに向かいました。……まあ流石に八幡君はまだ来てませんね。待つのも楽しみの一つですし、長い待ちましよう。

八幡君を待つっていると誰かがこちらに近づいて来ます。あれは由比ヶ浜さんですね。

結衣「ユツキー……」

由輝子「おはようございます、由比ヶ浜さん」

結衣「うん、……今回はありがとう」

由輝子「グループのことですか？ 私は何もしてません。葉山君が解決しましたから、実際何もしてませんしね。」

結衣「……それでもありがとう。隼人君がユツキーのおかげだって言ってたから」

由輝子「……そうですか。……用はそれだけですか？」

ちよつと嫌な言い方になってしまいましたがあいまいでしょう。

結衣「えつとね……ユツキーってヒツキーと付き合ってるの？」

由輝子「どうしてそう思うのです?」

結衣「教室や部室のふんいき?でそう思ったから」

由比ヶ浜さんはよく見ていますね。…隠す理由もありませんので、言ってしまうでしょう。

由輝子「そうですよ。私と八幡君は付き合っています」

結衣「そつか…うん、ユツキーなら納得かも…おめでとう」

由輝子「ありがとうございます」

結衣「じゃああたし行くね。今日はヒツキーとデートなんだよね?がんばってね」

由輝子「はい」

由比ヶ浜さんが行った数分後八幡君が来ました。

八幡「悪い、待ったか」

由輝子「気にしないでください。今日が楽しみで早く来すぎただけですから」

八幡「俺は楽しみすぎて念入りに準備してたらこんな時間になっちゃった」

由輝子「それでは行きましょうか」

八幡「ああ、そうだな」

私は八幡君と手を繋ぎ、ロビーを出ました。京都デートの始まりです。

くそしてく

最初にやってきたのは常寂光寺にある多宝塔。この場所に咲く紅葉が綺麗なことで有名な秋の観光スポットです。

八幡「すげえ咲いてるな」

由輝子「どうやら今が満開の時期みたいですね。これはラッキーでした」

八幡「だな、じゃあ歩いて行くか」

由輝子「はい」

しばらく歩いて……

八幡「結構歩いたな」

由輝子「そのベンチでひと休みしましょう。八幡君、これをどうぞ」

八幡「これは……マツカンじゃねーか」

由輝子「はい、今日のために持ってきておきました」

八幡「ありがとな由輝子」ナデナデ

八幡君はそう言っつて私の頭を撫でてくれました。……とても気持ちいいです。

その後は2人でマツカンを飲みながら紅葉狩りを楽しみました。

お昼は天下一品でラーメンを食べることにしました。

実は私はラーメンがかなり好物です。特にこつてりが好きで、なりたけでもギタキタを頼むほどなんです。なのでここに来るのはとても楽しみにしてました。……まあデートでラーメン屋は違うと言う人がいるかもしれないですが、お互いに行きたいところなので問題ありません。

八幡「こつてりで」

由輝子「私もこつてりをお願いします」

それからラーメンがきたので早速食べます。

食べるときは基本黙々と、ラーメンは基本無言で食べるらしいのでそれに見習います。……まあ基本食事中は喋りませんが、

他にも餃子を頼み、八幡君とわけあって食べました。

もちろんブレスケアはかかしません。紳士淑女の嗜みというやつです。……ラーメンとても美味しかったです。

八幡「うまかったな」

由輝子「はい、また行きたいです」

食後に来たのは京都のお土産といたらやっぱり生八つ橋ということですので『八つ橋庵かけはし』にやっ来て来ました。

美咲さんのお土産に買っていきましよう。

八幡「ここ、試食もやってるな」

由輝子「そうですね。食べてみて気に入ったものをお土産として買っていきましよう」

八つ橋を購入した後は私達も買ってそのスペースで食べました。

八幡「試食の時も思ったが甘さが控えめで美味しいな」

由輝子「はい、ちょうどいい甘さです」

私も八幡君も甘党ですが、この八つ橋は控えめな甘さでも物足りないなんてことがありませんね。

次にきたのは懐石カフェ『蛙吉』。あるアニメにも出てきたらしいですが、なんのアニメでしたっけ？

流石にコースは高いので、コーヒーだけ頼みました。

八幡「なんかすげえとこだな」

由輝子「私はこういうところは好きですけどね」

コーヒーがきたので、一口飲んでみます。…ふむ、おいしいですね。

八幡君は砂糖とミルクをたっぷり入れていますが、私はコーヒーの風味を楽しむためにそのままで飲みます。…飲み方は人それぞれですよ。私はマッカンが好きな甘党ですが、ブラックコーヒーもそれなりに好きです。

八幡「それにしてもこの修学旅行は大変だったな…」

由輝子「そうですね。戸部君の依頼から始まりましたし、そこから海老名さんが来て遠回しな依頼も来て板挟みになりましたし」

もしも私が気付かなかったらどうなっていたでしょうか？何もわからない状態で多分八幡君なら気付きそうな感じで言っていましたから、後になって八幡君が気付きそこから…いえ、考えるのはやめましょう。あのグループも『本物』になろうとしています。彼らにとってもこれがハッピーエンドだったのでしよう。終わりよければすべてよしです。

八幡「葉山達がテニスに乱入してきた時から思ってたが由輝子ってかなり強気だよな。初めて見たときはそうは見なかったが」

由輝子「私は言いたいことがあつたらはつきり言うことにしています。余計な気遣いなんて必要ありません。例えば恋人の八幡君であつても遠慮せずに言います。それが私に

とつて間違っていることなら」

八幡「……そうか」

由輝子「八幡君も私が間違っていると思つたら言つてくださいね？」

八幡「ああ、もちろん」

こうして八幡君とのデートはあつという間に終わつてしまいました。

……楽しい時間は過ぎるのは早いですね。

夜になって部屋に戻ると相模さんがなにやらニヤニヤして今日はどうだったか聞いていました。特に気にすることなく

由輝子「楽しかったです。とても幸せな時間でした」

と答えた。恥ずかしそうにしてましたね。

これからもこういう風に八幡君との思い出を作っていきたいですね。また2人で京都に行くのも楽しそうです。

私と休日の過ごし方

〓 修学旅行の翌日〓

由輝子「……んんっ」

時刻は午前4時。私はこの時間に必ず目が覚める。…朝は弱い方だったのに、走ることを習慣にしたらからすっかかりおきるのが苦じゃなくなりました。

由輝子「さて、着替えましょう」

そう言って私は走り込み用の服装に着替え、家を出る。この時点での時刻は4時15分です。

由輝子「はっはっ…ふっふっ…」タッタッタツ

私はいつものように2.5 km先にある公園を目指して走る。…上記の台詞が笑つてるように見えますが別に笑っていません。…メタいですね。

公園につくと水道まで行き、水を飲む。

由輝子「……ふう」

水を飲み終わると、今通った道を引き返す。いつか（『私とテニス』を参照）雪ノ下さんに話したようにこれで5kmになります。

家に戻ると母が起床しており、現在は6時30分。

由輝子「ただいま戻りました。そしておはようございます、お母さん」

母「おかえり。そしておはよう」

由輝子「今日もお仕事ですか？休みなのに大変ですね」

まあ私も休日にバイトを入れることがありますか…

母「そうなの。働きたくない」

由輝子「働いてください。うちは母子家庭ですので、お母さんが働かなかったら家計がもちません」

父は私が生まれたすぐ後に他界してしまっただけで、私は写真でしか父の顔を見たことがありません。

女手一つで私を育ててきた母に楽をさせてあげたいのですが、…それは大学を卒業してからのお話ですね。

母「そうなんだよね。あゝあ、宝くじでも当たらないかな」

宝くじ…夢を見るのはいいことですが、母の場合半分現実逃避が入ってますから

ね。

由輝子「…それよりも時間は大丈夫ですか？」

母「おっと、もうこんな時間。じゃあ行つてくるね」

由輝子「はい、いつてらっしゃい」

どこか慌ただしく母は家を出ました。

シャワーを浴び、再び着替えると、朝食を作ります。

7時30分、私は朝食に作ったフレンチトーストを食べ、食後にマッカンを飲みます。

由輝子「今日は自室で読書にしましょう」

私は部屋に戻り、未読の本がたくさんあるので読書に没頭しました。

くそして

由輝子「ふう、中々面白かったですね。続きが気になるところです」
時計を見ると、午後の4時30分をさしていました。

8時間も経っていましたか…。

由輝子「本屋にでも行きましようか」

私は完全に読書の気分だったので、準備を済ませ本屋に向かう。

「本屋」

由輝子「何を買いますようか…」

先程まで読んでいたライトノベルにしましょうか、それとも純文学、いつそのこと漫画もありですね。

「そして」

悩んだ末、科学と魔術が交差する物語の最新刊に目がいききましたので、ラノベを買うことにしました。早速帰って読みましょう。

「ブーツ！ブーツ！」

おや、メールがきてます。…母からですね。内容は今日夜は外で食べてくるということです。

ふむ、でしたらこのまま外食して帰りますか。…サイゼにしましょう。千葉県民はサイゼが好きなのです。

くサイゼく

夕食時なのかかなり混んでますね…。…おや、あれは…

由輝子「こんばんは、八幡君」

恋人の八幡君がいたので挨拶しました。

八幡「由輝子か。そっちも晩飯か？」

由輝子「はい、母が外でご飯を食べてくるそうなので」

八幡「なるほどな…」

八幡君もサイゼが好きなのでもしかしたら…とは思っていましたが、本当にいるとは思いませんでした。

由輝子「一緒に食べませんか？」

八幡「ああ、俺も1人だったから構わないぞ」

八幡君とご飯を食べることにしました。…思わぬところでデートですね。

くそしてく

由輝子「では、私はこれで失礼します」

八幡「ああ、また学校でな」

由輝子「はい」

私は八幡君と別れ、帰路につきました。

家につくと時刻は20時、お風呂に入りましょう。

お風呂から出ると着替えを済ませ、早速今日買ったラノベを読むことにしました。
このシリーズを読むのは久しぶりなので楽しみです。
∴

くそしてく

読み終わると既に目をまたいでいます。そろそろ寝ましょうか。

由輝子「おやすみなさい」

と私はベッドに寝込み、そう言いました。

…明日も1日頑張りました。

私と生徒会選挙前

昼休み私は八幡君とベストプレイス（八幡君曰く）でご飯を食べています。

由輝子「八幡君、今日はパンですか？」

八幡「ああ」

八幡君は大体週3で購買でパンを買って食べています。

由輝子「八幡君さえよかったら私がお弁当を作りますよ？」

この提案はかなり前、それこそ付き合う前からしているのですが八幡君が私に悪いか
らと言つて遠慮していました。

八幡「…いいのか？」

由輝子「私がしたいことです。私は八幡君の恋人ですから八幡君のために尽くしま
す」

今は恋人同士ですから、彼氏にお弁当を作るのは普通ですよね？

八幡「じゃあ頼む」

由輝子「はい、料理は得意ですのでとびつきりおいしいお弁当を作ります」

こうして昼休みは過ぎていきました。

放課後になり、今日はバイトがないので八幡君と部室に行くことにしました。

八幡「うーす」

由輝子「おはようございます」

雪乃「こんにちは」

結衣「やつはろー！ヒツキー、ユツキー」

部室につくなり私達はそれぞれ挨拶をしました。

私と八幡君、雪ノ下さんは読書を、由比ヶ浜さんは携帯をいじっていると

コンコン

ノックが聞こえた。

雪乃「どうぞ」

平塚「邪魔するぞ」

入ってきたのは平塚先生でした。…遂に平塚先生もノックをするようになりました

か…

平塚「少し頼みがあるんだ。…入ってきたまえ」

そう言つて入ってきたのは城廻生徒会長と1年の一色さんでした。

結衣「あつ、いろはちゃんだ」

いろは「結衣先輩こんにちは〜」
めぐり「あ、一色さんとは面識あるんだね。…それで相談したいことがあつて」

〜そして〜

話を要約すると次の生徒会選挙で一色さんが生徒会長候補にさせられていたらしく、当選しないようにしてほしいとのこと。

取り消しをしたくても一色さんのクラスの担任がかなり乗り気でそれが出来ない和平塚先生が語る。

八幡「やりたくないなら選挙で落ちればいいだろ」

由輝子「むしろそれしかないでしょうね」

めぐり「ただ、候補は一色さんだけしかないなくて…」

雪乃「となると信任投票ですね」

いろは「信任投票で落選って超カッコ悪いじゃないですか〜」

そんな我儘言ってる場合ではないでしょう…とはいえ仮に一色さんが落選して候補が他にいないとなると別の問題が発生しますね……。

由輝子「他の候補者を見つけて、その人が選挙に勝つのが無難ですが」

八幡「そんなやる気のある奴ならもう立候補してなきやおかしいだろ」

そうなんですよ。……いざとなったら最終手段を使うとしましょう。……この方法を使うときは八幡君に協力してもらいましょう。

結衣「でも……やってくれそうな人に当たってみれば……」

平塚「……すぐに結論は出なさそうだな。また後日にするでしょう」

雪乃「平塚先生、少しよろしいでしょうか？」

雪ノ下さんが平塚先生を呼び止める。

雪乃「今のところ勝敗はどうなっていますか？」

結衣「勝敗って？」

八幡「誰が1番人の悩みを解決するか、の勝負で勝つたらなんでも言うことを聞いてくれる」

結衣「そんなのあったんだ……」

そういうえば勝負の話をしたとき、由比ヶ浜さんはいませんでしたね。

平塚「そ、そうだな……最近の依頼は協力することが多いからな。みんなよくやってる感じだ。うん」

平塚先生……勝負のことを忘れてましたね？

雪ノ下さんが勝敗が余程気になるのか、平塚先生をじつと見る。

平塚「はあ……単純な結果を評価するなら、剣が1歩勝るだろう。次点で比企谷といった

ところか……。だが、過程などを考えると雪ノ下の方が良かろう。とはいえいずれも由比ヶ浜なしでは成り立たないことも多かつただろう」

得手不得手を考えるとそんな感じですかね。

雪乃「つまりまだ勝負はついてないということですね？」

平塚「まあそういうことになるな」

雪乃「なら私達の意見が割れてもなんら問題はありませぬね」

八幡「そうだな」

結衣「どう言うこと？」

由輝子「私達と同じ意見とは限りませぬからね。今回みたいな依頼だと様々な分岐点があります。だから無理に合わせる必要はない、ということですよ？雪ノ下さん」

雪乃「ええ、今までは剣さん、あなたがほとんど解決してみせた。私は見ていることしか……。だから今回は剣さんなしでも解決できるところを証明したいの」

由輝子「買い被りですよ……。アフターケアは雪ノ下さんがしてくれています。私のやり方はいわゆる諸刃の剣のようなものです」

剣だけに……。ンンッ！実際は雪ノ下さんの方が安全に依頼を遂行出来ることが多いですし、コミュニティー関係の依頼だと由比ヶ浜さんの方が上手くできるでしょう。方法はともあれ八幡君は解決法に導くのがとても早い。それぞれの方法に良し悪しがあ

ります。

由輝子「雪ノ下さんの言いたいことはわかりました。ここはチーム戦にしましょう。雪ノ下さんと由比ヶ浜さんのチーム、私と八幡君のチームで案を考えて、一色さんがいいと思うやり方で依頼を遂行するというのはどうですか？」

雪乃「わかったわ、それでいきましょう」

由輝子「決まりですね」

雪乃「由比ヶ浜さん、あなたを頼らせてもらおうわ」

結衣「ゆきのん……。うん！がんばろ！ヒツキー達に負けないように！」

雪乃「ええ、もちろんよ」

由輝子「私達は先に帰りますね。行きましょう八幡君」

八幡「ああ、そうだな」

くそしてく

八幡「で、考えの方は決まってるのか？」

由輝子「一応1つありますが、これは最終手段として使います。八幡君は何かありますか？」

八幡「俺は一色をその気にさせて生徒会長にさせるのがいいと思っているが……」

由輝子「問題は一色さん次第ということですね」

八幡「ああ」

由輝子「ではその案でどうすれば一色さんをやる気にさせるか考えていきましょう。

ここではなんですし、そのドーナツ屋に入りましょう」

そう言つて私達はドーナツ屋に入り、注文を済ませ、席につこうとしたとき……

陽乃「おや、珍しい顔だ」

美咲「あつ、由輝子ちゃんに八幡君だ！」

美咲さんと陽乃さんに声をかけられました。

私と修羅場?

美咲「奇遇だね、よかつたら一緒に食べようよ!」

由輝子「私はいいですよ。八幡君はどうしますか?」

八幡「由輝子がいいなら構わないぞ」

私達は美咲さんと陽乃さんと相席することにしました。

由輝子「美咲さんと陽乃さんが一緒なのは珍しいですね」

美咲「バイト帰りに寄って行ったら偶然陽乃ちゃんに会ったの。陽乃ちゃん、なんだ私の事を苦手のように感じられるからこれを機に親睦を深めようと思って!」

陽乃「美咲先輩が私の弱みを握ってるからじゃないですか」

美咲「握ってないよ!!?人聞きの悪いこと言わないでよ!陽乃ちゃんだって私の秘密を探ろうとしてるくせに!」

ええ…。そんなことしてたんですか陽乃さん。

美咲「ところで2人はどうしてここに?もしかしてデート中だった?なら悪いことしたかも…」

シヨボンと落ち込む美咲さん。

由輝子「違いますよ。少し八幡君と話し合いをしようと思い、ここに来ました」
陽乃「話し合いつて？」

八幡「えつと……」

八幡（由輝子、話した方がいいのか？）

由輝子（大丈夫です。美咲さんは生徒会長をやってましたから、もしかしたらいい答えが出るかもしれません）

由輝子「実はですね……」

私は美咲と陽乃さんに事情を話しました。

美咲「……それって生徒が関わっていい案件じゃないと思うんだけど」

由輝子「はい、ですがこのまま生徒会長がいなくなると問題になってきますから」

陽乃「雪乃ちゃんは生徒会長やらないの？」

八幡「いえ、特にそういうことはなかったですね」

美咲「由輝子ちゃんはどうかの？」

由輝子「私はどちらかというとサポートする方ですので、……ですが最終手段として視野に入れています」

八幡「由輝子の案って由輝子が生徒会長になることだったのか……」

由輝子「はい、多分雪ノ下さんもそれは考えているかもしれませんが」

八幡「雪ノ下が？」

由輝子「他に方法がなかったらですが……」

美咲「う〜ん……。私はその一色さんにやる気になってもらうのがいいと思うよ」

八幡「俺達もその考えでいこうと思うんですが、方法が思い付かなくて……」

美咲「簡単だよ。その子は生徒会長になることに何らかのデメリットを考えると、それから、それをメリットに変えればいいんだよ」

由輝子「そのメリットというのは？」

美咲「私はその子じゃないからわからないけど、例えば彼女が生徒会長に立候補するように仕組んだ子供達を見返すためとか。……まあこれだけじゃ理由としては弱いから、他にメリットを考える必要があるけどそれは由輝子ちゃん達がやることだよ」

八幡「成程……。参考になりました。ありがとうございます」

流石美咲さんですね。生徒会長をやっていただけあつて頼もしいです。

????「あれ？比企谷？」

????「もしかして剣さん？」

八幡「折本……」

由輝子「こんにちは、仲町さん」

八幡君の名字を呼んだのは折本さんという人で、その人と一緒にいるのが仲町さん。

仲町さんとは中学が同じで、今も同じバイト先で働いています。折本さんとは中学が一緒だったのでしょうか…？

美咲「あつ、千佳ちゃん！」

仲町「こんにちは、美咲さん」

折本「千佳の知り合い？」

仲町「うん、バイトが同じで剣さんは中学も一緒だった」

折本「そうなんだ。それにしても超ナツインだけど！レアキャラじゃない？」

八幡「人のことをポケモンみたく言うな」

折本「比企谷つて総武なんだ。頭いいんだね。知らなかった」

八幡「まあ全然話してなかったからな…」

折本「ところで、3人の誰かが彼女さんだったり？」

由輝子「私がそうです」

折本「へー…。あつ、自己紹介がまだだった。あたしは折本かおり。比企谷と同中だったよ」

由輝子「剣由輝子です。八幡君の彼女で、仲町さんとは同じ中学で同じバイトで働いています」

美咲「私は佐野美咲！由輝子ちゃんと千佳ちゃんと同じバイトの先輩で、八幡君とは

友達だよ!」

八幡君とのデート中たまに美咲さんと会うことがあり、そのときに八幡君と美咲さんは互いに名前で呼ぶようになりました。

陽乃「私は雪ノ下陽乃。比企谷君の…ねえ私って比企谷君のなんなの?」

八幡「や、俺に聞かれても…」

由輝子「学校の先輩でいいのでは?」

陽乃「つれないな」

何故だか頬をふくらませる陽乃さん。

陽乃「比企谷君と同じ中学か。何か面白いこととかなかったの?」

そういうことは詮索することじゃありませんよ?

折本「えーと…」

美咲「陽乃ちゃん、やめといた方がいいよ?」

美咲さんから怒気を感じますね。

陽乃「いいじゃないですか。あつ、比企谷君の恋バナとか聞きたいなく」

私も気になります、それが必ずしもいい思い出とは限りませんからね。現に八幡君の顔色が悪くなっています。

折本「そういえば私、比企谷に告られたりしたんですよ」

折本さんがとんでもない爆弾を落としました。…八幡君が彼女に再会したときに苦い顔をしていた理由がなんとなくわかりました。

仲町「そ、そうなんだ…」

仲町さんが怯えていますね。まあ無理もありません。美咲さんは普段は優しいですが怒りが爆発すると止まりませんから。…笑顔なのが余計に怖さを引き立てていますね。八幡君も冷や汗が出ていますし、…色々な意味で。

陽乃「それ気になるな」

美咲「陽乃ちゃん？2度は言わないよ？」

八幡「!!」ビクッ

由輝子（大丈夫ですか？八幡君）

八幡（大丈夫だけど、美咲さん怖い。笑顔なのが余計に怖い）

由輝子（あそこまで怒ったのは2年ぶりぐらいですかね）

陽乃「す、すみません！」

折本さんは気付いてないみたいですね。大物なのか鈍感なのか…。…多分後者だと思いますが…

美咲「とりあえずこの話はここでおしまい！今話すことでもないし」

折本「そうですね。あ、総武なら葉山君って知ってる？」

八幡「まあ一応……」

折本「マジで!? ほら千佳紹介してくれるかも!」

仲町「私はいいよー」

この2人……少なくとも仲町さんの方は葉山君のファンの方ですね。
相変わらず人気のようです。

八幡「……別にいいけど」

折本「本当に!?!」

陽乃「比企谷君、いつの間に隼人と仲良くなったの?」

八幡「別に仲良くなったわけじゃありませんが、……最近よく話すようになったぐらいですよ」

陽乃「そうなんだ。……で、由輝子ちゃんとはいつから付き合ってるの?」

由輝子「花火大会の時からですね」

修学旅行の後、八幡君と葉山君はよく話すようになりました。葉山君は八幡君に思うところがあったのでしょうか? 連絡先を交換してますし……。仲良きことはいいことですね。

くそしてく

葉山「珍しいな。比企谷が俺に電話するなんて」

八幡「お前のことを紹介してほしいんだと」

折本「ほんとに葉山君だ……」

八幡君が葉山君を紹介したのが意外だったようですね。

くそしてく

折本「葉山君、またメールするね！」

折本さん達がそう言うのと葉山君はにこつと返しました。

葉山「……ところでどうして陽乃さんまで？」

陽乃「だって面白そうだし」

葉山「……またそれか……」

美咲「陽乃ちゃん、そういうのやめた方がいいよ」

陽乃「……すみません」

陽乃さんは美咲さんのことをとことん苦手としているようです。

美咲「……つと、初めましてだね。私は佐野美咲だよ！よろしく！」

葉山「佐野グループの御令嬢ですよね？葉山隼人です」

美咲「葉山君だね。確か父が弁護士だったよね？」

葉山「はい、よろしく願います」

由輝子「美咲さんは陽乃さんと同じ大学の先輩です」

葉山「そうなのか。……じゃあこれで俺は失礼するよ」

八幡「ああ、悪かったな葉山」

葉山「気にしないでくれ」

葉山君はそう言つて店を出ました。

美咲「私も行くね。由輝子ちゃん、八幡君、がんばつてね！ファイトだよっ！」

美咲さんの『ファイトだよっ！』頂きました。

陽乃「私も行くかな。じゃあね、2人共」

美咲と陽乃さんも去つていきました。

八幡「…俺達も出るか。いい時間だし」

由輝子「その前にもう1度確認しましょう。一色さんにその気になって生徒会長になつてもらおうという案でいいですか？」

八幡「ああ、それでいいこうと思う」

由輝子「わかりました。あとはメリットですね」

八幡「とりあえず一色に会つてみるか」

由輝子「そうですね」

余り時間もありませんし早めに行動する必要がありますね。

私と選挙の行方

翌日、早めに行動するため私と八幡君は昼休みに一色さんのいる教室を訪れた。

由輝子「すみません、一色さんはいますか？」

私が一色さんと呼ぶと彼女はパタパタとこちらに走ってきた。：仕草があざといことには突っ込みませんよ。

くそしてく

いろは「それで依頼の方はどうなったんですか？」

なんでいちいち語尾を伸ばしてるんですかね？聞く人によつては喧嘩をうってるよ
うなものですよ。

八幡「その前に語尾を伸ばすのやめろ。薄ら寒い」

八幡君も同じことを思っていましたね。

いろは「う……」

由輝子「単刀直入に言います。一色さん、生徒会長になりませんか？」

いろは「えっ、どういうことですか？」

由輝子「まずはこうなった原因を挙げましょう。どうしてこうなったのですか？」

いろは「えっと…それは、無理矢理…」

由輝子「そうですね。このまま落選すると無理矢理立候補させた人達の思い通りになります『調子に乗ってるからこうなるんだ』みたいなことを言われるでしょう」

いろは「っ！」

まあ細かい理由までは知りませんが、その人達は一色さんが男子にちやほやされてい
るのを見て調子に乗っていると判断したんでしようね。

由輝子「そんな人達にやられっぱなしで悔しくないですか？やり返したくありません
か？」

いろは「…：…悔しいです。できたらやり返したいです。…でも、できるんですか？」

由輝子「できます。そのための提案ですからね」

いろは「でもいきなりは無理ですよ…」

八幡「まあお前は部活もあるらしいし、両立は大変だろう」

由輝子「ですがメリットもあります。何かわかりますか？」

いろは「…：経験ですか？あとは内申…？」

由輝子「それもメリットですが、一色さんはまだ1年生ですから失敗が許されること
もあります。もし生徒会の仕事…：まあたらくなくなった時に部活を言い訳にできますし、
逆もまた然りです。この2つは一色さんだけが持っているいわばアドバンテージです」

いろは「で、でも大変だと思えますし…」

由輝子「一色さん、あなたは確かサッカー部ですよ？そして葉山君に好意を抱いていますね？」

いろは「な、なんで知ってるんですか？」

由輝子「私の情報網にかかればそういうのはすぐにわかります。…プライベートに関することですので余り公表はしません」

八幡「まあ俺は聞いちまったが、その情報をもとに考えた結果だが…、そういうときは葉山に相談すればいい」

八幡君がそう言うのと一色さんだけがハツとした表情をしました。

八幡「なんなら手伝ってもらえ」

由輝子「それに部活の後なら一緒に帰って家まで送ってもらえるアフターケアまでついてきますよ」

一色さんにとってはハッピーセットのようなものです。

いろは「…先輩達って頭いいんですね」

八幡「まあな」

この結論まで辿り着いたのは八幡君ですからね。とても頭の回転が速くてすごいと思いました。

由輝子「さて、もう1度聞きます。一色さん、生徒会長になりませんか？」

いろは「：確かにその提案は魅力的ですね。それにクラスの子達に陰で笑われるのは嫌ですし、先輩達に乗せられてあげます♪」

一色さんにはにと笑い、生徒会長になることを決意しました。

由輝子「困った時はまた奉仕部に相談に来てください」

八幡「まあ最初は生徒会の連中に頼めよ」

〈部室〉

雪乃「それで、案はでたのかしら？」

八幡「そっちはどうなんだ？」

結衣「えつとね、隼人君にやってもらおうと思って、その方向で話を進めてたの」

八幡「そうか…。こっちの案だが、一色は生徒会長をやる気になった」

雪乃「……そう、どうやら私達の負け…みたいね」

八幡「それは違うだろ」

結衣「どういうこと？」

由輝子「一色さんの依頼は生徒会長になりたくないというものですから、彼女が生徒会長になることになったので依頼自体がなくなります。つまり元々勝負が成立してい

ません」

私はそう言うのと雪ノ下さんはどこか納得した様子で

雪乃「では、先生に報告してくるわ」

と部室をあとにしました。

〳数日後〵

由輝子「ということで一色さんは生徒会長になることを決意しました」

美咲「そっか、どうなるかとは思ったけど流石由輝子ちゃんと八幡君だね！」

私は一色さんが生徒会長になったことを美咲さんに報告しました。

美咲「あくあ、私も由輝子ちゃんと同じ学年だったらもつと学校が楽しくなってきただろうな」

由輝子「もしそうなら美咲さんは生徒会長になっていましたか？」

美咲「そうだね！私が会長で由輝子ちゃんが副会長、八幡君は……庶務かな？」

そこは役職じゃないんですね。

仲町「おはようございます」

美咲「おはよう、千佳ちゃん！」

由輝子「おはようございます、仲町さん」

仲町「あつ、2人共こないだはかおりがごめんね」

由輝子「折本さんに悪気はないと思いますよ？」

美咲「でも、もうちよつと八幡君に配慮するべきかも」

仲町「ですよね、これからは気を付けますてかおりのこと見ます」

折本さんが暴走機関車みたいになってますね。

由輝子「では、今日はありがとうございます。お疲れ様でした」

仲町「お疲れ様」

美咲「おつかれ」

くそして

一色さんが生徒会長になってから数日：ああいう業務は慣れてきた頃からが大変です。すから、彼女のこれからに期待ですね。

私と合同企画

生徒会選挙が終わって数日後

コンコン

雪乃「どうぞ」

いろは「先輩。やばいですう」

八幡「は？」

いろは「やばいです、やばいです、超やばいですう」

やばいと連呼している一色さんがこちらに詰め寄ってきました。

由輝子「何がやばいんですか？」

いろは「それが……」

一色さんは私達に事情を説明しました。

結衣「クリスマスイベント？」

いろは「はい……。海浜総合高校つてとこと合同で、お年寄りと子供相手のイベントなんですけど」

生徒会長としての初仕事に合同イベント……荷が重いですね。

八幡「それで、その企画は誰が言い出したんだ？」

いろは「向こうからですよ。わたしから言うはずありません」

八幡「だろうな……」

いろは「でも、そんなの断るに決まってるじゃないですか。私もクリスマスは予定
ありませんし」

結衣「断るに決まってるんだ……」

由輝子「私的な理由ですわね」

いろは「でも平塚先生がやれて……」

八幡「やつばあの人一枚噛んでるのか……」

平塚先生も何か考えあつてのことでしょう。

いろは「それで始めたものの、上手くいかなくて……」

八幡「他校と一緒にやそんなもんだろ」

由輝子「そうですね、簡単ではないと思います。城廻先輩には相談したんですか？」

いろは「え、えくと……何て言うか……、そう！受験生に迷惑かけるわけにはいかないじゃないですか！」

城廻先輩が苦手みたいですわ……。

いろは「もう先輩達しか頼れないんですよ」

八幡「とは言ってもな…」

結衣「なんとかしてあげたいけど…」

由輝子「それって今日からやった方がいいんですか？」

いろは「はい、できればすぐにでも手伝ってほしいんですけど…どうかしたんですか？」

雪乃「先程奉仕部に依頼が入ってきたの」

いろは「ええー！じゃあどうすればいいんですか!？」

私達が他に依頼が入っているのを聞いて唸る一色さん。

初めての仕事から人に頼るのは余りいいことではありませんが…

由輝子「雪ノ下さん、先程きた依頼は2人で人手は足りると思います。私と八幡君で一色さんを手伝いますので雪ノ下さん達はこの依頼が続くようならそちらが終わり次第2人にもお願いしたいのですが、雪ノ下さんはそれでいいですか？」

雪乃「そうね、お願いしてもいいかしら」

八幡「わかった、そっちもがんばれよ」

結衣「うん！ヒツキーとユツキーもがんばってね！」

由輝子「はい、では早速行きましょう」

いろは「ありがとうございます、剣先輩、比企谷先輩」

くそしてく

いろは「お疲れ様でくす」

海浜側は雑談で盛り上がっていますが、うちの生徒会は肩身が狭そうにしています。

???「やぁいろはちゃん、そちらは？」

いろは「うちのヘルプさん達です」

玉縄「僕は玉縄、海浜総合の生徒会長なんだ。よろしく」

八幡「はぁ…」

由輝子「よろしくお願いします」

玉縄「お互いリスペクトできるパートナーシップを築いてシナジー効果を生んでいけるように頑張ろう！」

…一色さんが私達に泣きついてきた理由がわかってきました。
さて、どうしましょうか。

私と企画会議くプレストループから抜け出せく

玉縄という人のビジネス用語を適当に並べてるような喋り方はひとまず置いておいで、今は会議の進行状況の確認ですね。

八幡「なあ由輝子、何を言ってるか半分くらいわからなかったんだが…」
由輝子「私も部分的にしかわかりませんでした」

どうやら玉縄君が今回の合同イベントの提案をしたようですね。こういうの好きそうですし。

折本「あれ、比企谷？」

仲町「剣さんも、どうしてここに？」

八幡君と話していると仲町さんと折本さんに声をかけられました。

八幡「折本…」

由輝子「こんにちは、仲町さん」

折本「比企谷達は生徒会なの？」

八幡「いや、俺達は手伝いだ」

折本「じゃああたし達とおんなじだ」

仲町「私は今回が初めてだけど、かおりは1回目から参加してるよ」

由輝子「仲町さんはバイトもありますしね」

折本「そういえば千佳は剣さんと同じバイトだったね。そっちはバイトは大丈夫なの？」

由輝子「はい、今日はバイトがありませんから問題ありません」

いろは「先輩方そろそろ会議始まります」

由輝子「わかりました。八幡君、席につきましょう」

八幡「ああ、わかった」

玉縄「会議を始めよう」

この企画の発案者である玉縄君の司会により会議が始まりました。

くそしてく

玉縄「みんな、もっと大事なことがあるんじゃないかな？ロジカルシンキングで論理的に考えるべきだよ」

何回論理的に考えたらいいんですか？

玉縄「お客様目線でカスタマーサイドに立っつていうかさ」

そんなにお客になってどうするんですか？

くそしてく

玉縄 「じゃあ休憩にしよう」

八幡 「ふう、やつと休憩か」

由輝子 「……………」

八幡 「由輝子？大丈夫か？」

由輝子 「はい、なんとか」

八幡 「そこまで疲れ切ってるの初めてみるぞ」

由輝子 「精神的に疲れています…」

く翌日く

玉縄 「今日は昨日に続いてブレストからやっていこう」

海浜の生徒 「折角だしもつと派手なことしたいよね」

玉縄 「確かに小さくまとまりすぎてたかもしれないな」

何かまとまってきましたっけ？

玉縄 「ちよつと規模を上げたいんだけどどうかな？」

いろは 「そうかもですね」

一色さんは完全に流されてますね…

八幡「規模を上げるには時間と人手が足りないぞ」

玉縄「ノーノー、そうじゃない。ブレインストーミングは相手の意見を否定してはいけない。時間的問題と人員的問題で大きくできないからそれをどう対応していくか、それを議論でいくんだよ。すぐに結論をだしてはいけない。だから君の意見はだめだよ」

相手の意見を否定してはいけないのに八幡君の意見は否定するんですね…。…。自分の言ってることに矛盾を感じないんですか？

く翌日く

今日は昨日の会議によって近くの小学校に協力してもらうことになりました。…。どうしてこうなったのでしょうか。

玉縄「君達1人1人のマンパワーに注目している。これから一緒に決めていこう！」

小学生達「よろしくお願いしまあす」

玉縄君は小学生に挨拶をして、自分達のところに戻っていききました。…。呼んでおいて放置ですか…。

すると小学生の1人がこちらにきました。…。あれは千葉村で会った鶴見さんですね。

留美「何をしたらいいですか？」

由輝子「少し待っていてくださいいね」

私はそう言うところに行つて

由輝子「小学生の指示出しの方はどうしますか？」

いろは「えつと、まだ決まっていなくていいです。向こうに確認した方がいいですかね？」

八幡「いや、対応はこつちが請けてしまった以上はこつちで考えるべきだ」

いろは「ですよね…」

八幡「とりあえずこつちの邪魔にならず必要なことをやってみようか」

由輝子「だとしたら飾り付けとかですね」

いろは「…そうですね。そうします」

一色さんは小学生達のところへ行き、作業内容を伝えました。

くそしてく

今日も会議が進まずに議題だけが増えています。

由輝子「ふう……」

仲町「剣さん、大丈夫？何だか元気ないけど…」

仲町さんが心配そうに声をかけてきました。

由輝子「精神的に辛いです。玉縄君は海浜でもあんな感じですか？」

仲町「あはは…。まあ」

由輝子「…あの生徒会長をなんとかしないとこの企画は崩壊します」

本当はすぐにでもぶちまけたいのですが、一色さんの立場もありますからね…。

仲町「やつぱりそうなんだ…。かおりもなんとなくそれに合わせてる感じだし…」

確かにことあることに「それある！」と言つてましたね。…折本さんが少し心配になつてきましたよ…。

く数日後く

あれから同じことの繰り返しでビジネス用語ばかりを適当に使つた議論ばかりやつて進行は硬直状態。もう爆発寸前です。

由輝子「……………」

結衣「ゆ、ユツキー？今日から私達も参加できるから大丈夫だよ」

由輝子「…助かります。正直もう我慢の限界です」

八幡「会議も全然進まねえしな…」

雪乃「とりあえず行きましょう」

くそしてく

玉縄「やあ！そちらはニューフェイスだね、僕はー」

彼はいちいちルー語を使わないと会話ができないんですか？

玉縄「じゃあ会議を始めよう」

くそしてく

玉縄「つまり2校別々のプランで2部構成にしたいということかな？

いろは「そうですね。わたし的には演劇とかやりたいかなって思うんですよ。そっちの音楽系？とこっちの演劇でどっちも観れるとかお得ですよ」

玉縄「ただセパレートするとシナジー効果が薄れるし、ダブルリスクじゃないかな？」
副会長「そもそも2部構成に反対の理由ってなにかな？」

玉縄君が反対意見？を出すと副会長が理由を尋ねる。

玉縄「反対ってわけじゃなくてさ、ビジョンを共有すればもつと一体感を出せると思うんだ」

玉縄君が2部構成に反対してるわけではない。では何故一緒にやることに拘るので

しようか？

八幡「合同でやる必要ってあるか？」

八幡君が反対意見を出す。

玉縄「もちろん。合同でやることでグループシナジーを生んでー」

八幡「このままだと大したことができないのになんでまだ形に拘るんだ？」

玉縄「企画意図とずれるし、コンセンサスとれてたし、ブランドデザインの共有もできたしー」

八幡「…違うな、自分はできると思い上がってたんだ。だから間違っても認められなかったんだ。自分の失敗を誤魔化すために言質をとり安心しようとした。間違えてもそのときは誰かのせいにできたら楽だからな」

海浜生徒「でもそれってコミュニケーション不足のような気がするけど」

玉縄「よし、1度クールダウンの期間を置いて話し合いを重ねれば」

このままではまた平行線ですね

雪乃「ごっこ遊びは余所でやってくれないかしら？」

玉縄「え…」

雪乃「さつきから随分と中身の無いことばかり言っているけれど、覚えたての言葉を使って議論の真似事をしたお仕事ごっこがそんなに楽しいかしら？」

雪ノ下さんが淡々と言う。∴私もこの波に乗りましょう。

由輝子「そうですね、ビジネス用語を並べて自己満足してるようにしかみえません。そうやって意味のない会議を何度も何度もやって∴こちら暇じゃないんですよ？時間の無駄でしかありません。こちらはいっそのこと別々にやるのも視野に入れていませ。まだごっこ遊びをしようと言うなら早々にあなた達を切り捨ててこちらで内容を決めさせてもらいます」

雪乃「これ以上∴」

由輝子&雪乃『私達の時間を邪魔しないでください（しないでもらえるかしら）』
私と雪ノ下さんが声を揃えて言うと周りはシーンとしている。

結衣「無理に一緒にやるより2回楽しんでもらえるって思った方が良くない？ホラ、それぞれの学校の個性ってあると思うし∴」

いろは「た、確かにそうですね。それでいいと思います」

折本「そ、そうだね。それもあるかもね」

仲町「う、うん、賛成」

こうして会議はぎこちない感じで終わりました。

いろは「はあ∴一時はどうなることかと思いましたよ。今でも雰囲気が悪いですし∴」

由輝子「でもこれでよかったと思います。このままだと企画倒れもいいところですか
ら」

雪乃「それに私達は間違ったことは言っていないもの」

いろは「そうかもですけど」

結衣「ま、まあ丸く収まったし、フオローの方はあたしといろはちゃんできちんとやっておくよ」

いろは「え、わたしもですか？」

八幡「お前は生徒会長だから当たり前だろ…」

それからはトントン拍子で会議が進んでいき企画当日までになんとか間に合うことができました。…何故ちゃんどできるのにここまで遅れたんでしょうね…

当日、イベントは大きな盛り上がりを見せました。

私と1年の振り返り

く大晦日く

八幡「今年も今日で終わりだな」

由輝子「そうですね」

この1年は色々なことがありましたね。

2年生になったばかりの頃に作文のことで平塚先生に呼び出されたことから始まりましたね。内容は『高校生活を振り返って』でしたね。

そういえば八幡君もこの作文で奉仕部に入ったそうです。

この頃は八幡君のことが気になっていました。もしかしたらもう既に恋愛感情を抱いていたのかもしれない。

奉仕部という部活はこの学校で1番の有名人である雪ノ下さんがやっている部活です。陽乃さんからこの情報をいただきましたが、どこでそんな情報を手に入れることができるのでしょうか？妹が好きなんですね。

その雪ノ下さんとはこの日初めて話しますが、誰も救われないという発言には少し思うところがありました。親が県会議員みたいですが、あなた自身はただの高校生なのにそんな簡単に『救う』なんて言葉を使うなんて、その言葉の重さを全くわかっていない。というのが第1印象でしたね。

その次の日に私と八幡君にとつては初の依頼人がきましたね。同じクラスも由比ヶ浜さんでした。この時入学式の日起きた事故の当事者がここに集結したのは何かの因果でしょうか？

由比ヶ浜さんの依頼はある人：八幡君にお礼の品、手作りのクッキーを作りたいけれど自信がないから手伝ってほしいとのことでした。

出来たのは炭のような物体でした。その後も雪ノ下さんの厳しい言葉にもめげずに彼女は頑張っていましたね。

そしてお礼にともらったクッキーは前にみた炭と何が違うのかわからないものでした。一口食べると視界が暗くなり、目が覚めたら自宅のベッドに仰向けになつていました。：由比ヶ浜さんは暫く誰かが付きつきりで料理を見た方がいいでしょうね。

その次は材木座君の依頼でしたね。小説の原稿を読んで感想がほしいとのことでした。文法は滅茶苦茶で、展開も意味がわからないものでしたが、材木座君の気持ちだが、魂が伝わりましたね。：彼のこれから期待しましょう。

それからは戸塚君のテニスの依頼に葉山君のチェーンメール、川崎さんのバイトの依頼もありましたね。：川崎さんの依頼は私は参加してませんが、彼女は家族に心配をかけたくなってバイトをしてたそうですが結果それが弟君に心配させてましたね。

夏休みに千葉村へ奉仕部の合宿に行つて小学生のサポートをしました。

そして鶴見さんが他の人達にはハブにされていたので、方法として彼女の周りの人間関係を壊すという八幡君の案にはとても驚きましたが、他の案が良くないものばかりで時間もないので、案を実行しました。

結果、鶴見さんの周りはみんな1人になりました。やり方はいいものではありませんが、問題を解消するのにベストな案だと私は思っています。

花火大会で私は八幡君に告白して、恋人同士になることができました。この瞬間は人生で1番幸せかもしれません。もし八幡君に先約がいたり、告白を断られたりしたらどうなっていたでしょうか?…:考えたくありませんね。

文化祭や体育祭、修学旅行に生徒会選挙と私達にとつては大きなイベントでしたね。京都デートは楽しかったですね。また行きたいです。そしてその後のクリスマスイベントは特に大変でした。企画倒れになるところでしたから。

イベントの後に八幡君とクリスマスデートをしました。とは言っても特別なことは

していませんが…

それからは昨日までバイト続きでしたね。イベントまでシフトをいれることができなかつたから働き時だと思い、せつせと働きました。

八幡「由輝子？」

今年の出来事を大雑把に振り返っていると八幡君が私を呼んでいました。

由輝子「いえ、今年を振り返っていました」

八幡「そうか…。おつ、もうすぐ年明けだな」

由輝子「そうですね」

私は八幡君の肩に寄りかかりました。なんだか甘えたい気分です。

除夜の鐘が鳴り終わり、新しい年になりました。

由輝子「八幡君、今年もよろしくお願いします」

八幡「ああ、よろしくな」

今年もいい年になりますように。

私と手作りバレンタイン

2月上旬、そろそろバレンタインですね。スーパーの売場もバレンタイン仕様になっています。去年までは美咲さんにチョコを作っていました。今年も作りますのでいつもより楽しみます。

美咲「由輝子ちゃんんだか嬉しそうだね！」

由輝子「そうですね？」

美咲「うん！」

美咲さんからは嬉しそうに見えるみたいです。いつも通りにしていたつもりだったのですが、恋人にチョコを渡すという初めての経験で楽しみという気持ちが顔に出たのでしょうか？

美咲「今年は八幡君にもチョコを渡すんだよね？」

由輝子「はい、精一杯作ります」

美咲「由輝子ちゃんの作るチョコはおいしいから楽しみだよ！」

由輝子「もちろん美咲さんにも作ります。いつもお世話になっていますので」

美咲「うん、ありがと！」

くそしてく

まずは材料からですね。チョコにトッピングするクリームと隠し味に入れるマツカ
ン、それからー

くそしてく

ふう、結構買いましたね。バレンタインまでまだ日はありますし、早速試作に入りま
しょう。

く剣家く

まずはチョコクッキーにしましょう。作るのは由比ヶ浜さんの依頼ぶりですが、まあ
問題ないでしょう。

くそしてく

こんな感じですかね。たくさん作ってしまいましたがおやつや夜食にしましょう。
糖分補給は大事ですから。

クッキーしか作ってませんが、今日はここまでですね。

「翌日」

さて、今日はチョコケーキに挑戦してみましよう。ケーキを作るのは初めてですがレシピ通りに作れば大丈夫だと思いますが…。

「そして」

形は問題ないですが、少し甘くしすぎましたかね？味の調節が難しいところです。私はこの甘さでも食べられますが、人にあげるものとしてはもう少し甘さを抑えた方がいいでしょうね。

「数日後」

明後日はいいよいよバレンタインですね。色々試してみましたが、チョコクッキーを作ります。

今日はバイトですので明日作ることになりました。

美咲「あつ、由輝子ちゃんこんにちは」

由輝子「おはようございます、美咲さん」

美咲「由輝子ちゃんは八幡君にどんなチョコを作るか決めた？」

由輝子「はい、チョコクッキーにします。凝りすぎずにシンプルなものにしようと考えてましたから」

美咲「そっか、私も八幡君に作ろうと思うんだ！」

由輝子「珍しいですね。美咲さんが男子にチョコを作るなんて」

美咲「そうかな？由輝子ちゃんの大切な人だもん。私にとつても大切な人だからね！」

美咲さんは男女問わずとても人気がありますが、実際に仲良くしているのはほんの数人だけですからね。男子だと八幡君ぐらいでしょうね。あれくらい仲良くなるのは。

美咲「由輝子ちゃんにも作るから楽しみにしててね！」

由輝子「はい」

美咲さんの作るチョコはとてもおいしいですから、今年も楽しみです。

くバレンタイン当日く

バレンタイン当日、私は早速八幡君の家の前にいます。

男子に渡すのは初めてですからとても緊張しますね。

八幡「おう、由輝子か。おはようさん」

由輝子「おはようございます」

こういうのは遅くなればなるほど緊張するものだと言ったことがありますが、すぐに渡しましょう。

由輝子「八幡君、今日のために作ったチョコクッキーです。どうぞ」

八幡「…今日はバレンタインだったな。あんまりいい思い出がないから、忘れてたぜ」

由輝子「小町さんから貰わないのですか？」

八幡「ああ、小町は特に何も言っただけでなかったな」

後で渡すつもりでしょうか？

八幡「ありがとな由輝子」ナデナデ

八幡君が私の頭を撫でながらお礼を言います。…好きな人に頭を撫でられるのは気持ちいいですね。

その後八幡君にチョコをあげた人は学校で雪ノ下さん、由比ヶ浜さん、相模さん、川崎さん、一色さん、城廻先輩、学外で美咲さんと陽乃さん、家で小町さんと八幡君のお母様で私を含めて11個でした。

意外な人が何人かいますが、みんな八幡君にお世話になったからだと言っていましたね。

……由比ヶ浜さんが不安でしたが、本人が「ママと一緒にだから大丈夫！」と言っていたので問題ないと思います。

八幡君がまた由輝子で作ったクッキーを食べたいと言ってくれたときはつい顔がにやけてしまいました。

来年のバレンタインはもつと美味しく作れるように頑張りましょう。

私と卒業

（1年後）

急に時間が流れましたが、今日は私達の卒業式です。

八幡「なんかあつという間に卒業式を迎えた気がするんだが……」

八幡君も時間がすぐく速く進んだことに違和感を覚えていますが……、指摘してはいけない気がします。なので気のせいということにしておきましょう。

由輝子「気のせいでしょう」

八幡「そうか……」

そんな他愛のない会話をしながら私達は学校に向かいます。

立花「よう、比企谷、剣」

相模「おはよー、由輝子ちゃんに比企谷」

八幡「ああ、おはよう」

由輝子「おはようございます、相模さん、立花君」

登校中に相模さんと立花君に会ったので挨拶する。……何故でしょう。学校でいつも会ってるはずなのに久しぶりに感じます。特に立花君は……。……これ以上は触れ

ない方がよさそうですね。

〈教室〉

葉山「おはよう、4人共」

八幡&立花「おはようさん、葉山」

相模「おはよー、葉山君」

由輝子「おはようございます、葉山君」

葉山「なんか：時間の流れが速い気がするな。気がついたら俺達も卒業だし」
葉山君も私達と同じことを考えていたんですね。

由輝子「年をとると時間がたつのが速く感じるのと同じでしょう」

立花「いや、俺達まだ高校生だから：」

相模「まあ、今日卒業するけどね」

〈講堂〉

『在校生代表、一色いろは』

そういえば一色さんは2年でも生徒会長になってましたね。今度は自分の意思で。

なりたての頃と比べて彼女はすっかりと生徒会長らしくなりました。……まあ何故か奉仕部に遊びに来ていました……。……

くそしてく

雪ノ下さんの答辞も終わり、すべてのプログラムが終了しました。

いよいよこの学校ともお別れですね……。そう考えると感慨深いですね。何人かは涙ぐんでいますね。別れが悲しいのか送辞に感動したのか……。色々ありますね。

く部室く

結衣「この部室に来るのも今日で最後かあ……」

八幡「そうだな」

小町「4人がいなくなりますから、小町寂しくなります」

由輝子「小町さんは奉仕部を続けるのですか？」

小町「はい！もちろんです！」

雪乃「ならこの部室をお願いね。私物は持ち帰らせてもらおうけれど」

いろは「ええ、なんでですか」

八幡「いや、当たり前だろ」

小町「でも小町一人だとこの部活が廃部になりませんか？」

雪乃「それなら平塚先生に掛け合って再び顧問をしてもらえるから大丈夫よ」

由輝子「それに小町さんの友人に頼んで入ってもらうのもいいと思いますよ。これからは小町さんの奉仕部ですから小町さんのやり方でやっていけばいいんです」

いろは「わたしもたまに様子を見に行くからね」

八幡「俺も行くぞ。小町が心配だからな」

結衣「相変わらずのシスコンっぶりだ……」

由輝子「まあOB、OGとして部活の様子を見に行くぐらいは普通のことですよ」

結衣「そうだね！あたしも時々遊びに来るよ！」

雪乃「私は……頻繁に行くのは難しそうね」

由輝子「確か……海外の大学に進学でしたっけ？」

雪乃「ええ」

八幡「まさか雪ノ下が海外留学するとはな」

雪乃「中学の頃も留学していたし、珍しいことではないわ。私は私のやり方で姉さんを越えてみせるわ」

雪ノ下さんはいつでも陽乃さんに対抗心剥き出しですね。姉の背中を追いかければかりだと陽乃さんは言っていました。彼女も色々な出会い、経験によって考えが変わったのでしょうか。

八幡「俺と由輝子はそろそろ行くわ。この後バイトがあるんでな」

由輝子「もうそんな時間でしたか」

結衣「ヒツキーがバイト!？」

雪乃「どういう心境の変化かしら？」

八幡「これからのことを考えるとある程度軍資金が必要だからな」

小町「お兄ちゃん、結構前からバイトしてたよね」

結衣「そうなんだ」

由輝子「3年にあがる前からやっていますよ。私と同じところで」

八幡「受験もあるから週2とかそんな感じたが、終わってからは週4でやってるぞ」

八幡君も働くことの必要さを覚えてしまいましたからね。本人は専業主婦を諦めて

いないようですが…

八幡「じゃあな」

由輝子「またいずれ会いましょう」

こうして私達の高校生活は幕を閉じました。

4月からは八幡君と同じ大学でキャンパスライフです。

私と八幡君は無事に同じ大学に進学することができました。他にも戸塚君や仲町さんも同じ大学に行くそうです。……八幡君は戸塚君が同じ大学だと知って嬉しそうでしたね。

なんにせよ大学がとても楽しみです。

第2章 大学生編

私と大学生の日常

皆さんこんにちは。剣由輝子です。今回は私と八幡君、戸塚君と仲町さんの4人の大
学生活をお送りします！

八幡「ふう…。やつと講義が終わった：」

由輝子「お疲れのようですね、八幡君」

彩加「でも今日結構難しかったよ」

仲町「だよね」

皆講義で参っているようですね…。

由輝子「今日は私達バイトがないですし、戸塚君さえよかったら4人で遊びに行きま
せんか？」

仲町「剣さんから遊びに誘うなんて珍しいね」

そうですね？

彩加「うん、今日はサークルもないし行きたいな」

八幡「なら決まりだな」

由輝子「では行きましょうか」

くそしてく

まずはゲームセンターにやって来ました。

彩加「まずは皆でこのゲームをやろうよ!」

戸塚君が目を輝かせながらそう言う。そういえば戸塚君はゲームセンターとか好きでしたね。

八幡「このゲームは…クイズゲームみたいだな」

マジック千葉デミーみたいなものですかね…。

彩加「うん!一度皆でやってみたいと思つてたんだ!どうせなら2対2のチーム戦にしようよ!」

仲町「でもチーム分けはどうしようか?」

由輝子「折角ですから色々なペアでやってみましょう」

彩加「そうだね!」

それから様々なペアを組んでゲームを楽しみました。

くそしてく

クイズゲームが終わった後私達はクレーンゲームのところへ来ました。

仲町「ぐぬぬ……！」

由輝子「どうしたんですか？ 仲町さん」

仲町「何度やってもこのぬいぐるみが取れなくて……」

仲町が好きなぬいぐるみが取れなくて項垂れているみたいですね。

由輝子「偉い人がクレーンゲームは貯金箱だと言っていましたよ」

仲町「その人も上手いこと言うよね……」

くそしてく

次はエアホッケーですね。早速八幡君と戸塚君がプレイをしています。

八幡「はっ！」 カッ

彩加「えいっ！」 カッ

……中々激しい攻防が続いていますね。

それから私達は色々なゲームで遊びました。

くそしてく

仲町「うくん、楽しかったね」

彩加「そうだね!!」

八幡「もうこんな時間か…」

由輝子「晩御飯どうしましょうか?」

仲町「どこかに食べに行こうよ!」

彩加「それいいね!どこに行こうかな?」

ふむ、どうやら外食の流れのようですね。ゲームセンターでお金を少し使いましたし、それを踏まえて考えると…。

由輝子&八幡「サイズですね(だな)」

流石八幡君ですね。千葉県民の気持ちが変わっています。

仲町「2人共サイズ好きすぎるでしょ…」

彩加「あはは…」

おや? 仲町さんが呆れてますね。戸塚君も何故か苦笑いですし何か問題でもありませんか? したかね?

私達はサイズゼリヤで食事を済ませ、2人と別れて、今は八幡君と2人きりで帰り道を歩いています。

由輝子「今日は楽しかったですね」

八幡「そうだな。講義は疲れるけど」

由輝子「学生の本分ですから頑張りますよ」

八幡「…まあこうして由輝子や戸塚、仲町と一緒に過ごす大学生活が何だかんだ好きなんだよな」

由輝子「そうですね」

こんな感じで私達の大学生活はとても充実しています。

八幡「…なあ由輝子」

由輝子「はい…！」

八幡君に名前を呼ばれて振り向くと八幡からキスをしました。

八幡「…すまん。我慢できなかった」

由輝子「気にしないでください。私も嬉しかったですし」

八幡君は不意にキスをすることがあるからドキドキしますね。

八幡「…帰るか」

由輝子「…はい！」

これからもこんな日常が続きますように…！

私と大掃除

大晦日、私は美咲さんの家に大掃除に来ています。

美咲「ごめんね由輝子ちゃん。掃除を手伝ってもらって」

由輝子「気にしないでください。特に予定はありませんでしたから」

美咲「あれ？八幡君とは過ごさないの？」

由輝子「八幡君は年末年始はバイト三昧だそうです」

美咲「そうなんだ……」

なんでも八幡君は欲しいものがあるらしく多めにシフトを入れているそうです。何をかうのでしょうか……？無理をしないといいのですが……。

美咲「とにかく早く掃除を終わらせよう！そしてゆっくり過ごそう!!」

由輝子「そうですね」

たまにはこんな日も悪くはないですね……。

くそしてく

美咲「この部屋で最後だね！」

由輝子「ふう……相変わらずこのお屋敷は広いですね」

美咲「あはは……じゃあやろつか！」

由輝子「はい」

くそしてく

ヒラッ

おや？何か落ちましたね。これは……。

美咲「どうしたの由輝子ちゃん？」

由輝子「美咲さん、これが棚の上から落ちてきました」

美咲「どれどれ……？これは……この部屋にあつたんだ……」

私が拾ったのは美咲さんが高校の頃の麻雀部の写真でした。

由輝子「かなり前の写真ですからね……。アルバムにはしまわなかったんですか？」

美咲「うん……これはお守りにしようと思ったんだけどその年の大掃除で何処かに紛失してしまっただよ。見つかってよかったよ……」

美咲さんは涙を流しながら写真を握りしめた。それにしても……。

由輝子「この写真に写っている人の中で今でも会えるのは2人だけ……でしたよね」

美咲「……そうだね。綾香ちゃんと伊吹先生だけ」

由輝子「私は綾香さんにも長いこと会ってませんね……」

美咲「綾香ちゃんはプロ雀士として今ノリに乗ってるところだからね。今年は横浜の方で過ごすんだって」

由輝子「それにこの中央にいる人とは面識がありません」

美咲「……鈴音ちゃんだね。未来ちゃんは知ってるよね？」

響未来さん「……1度しか会ったことはありませんが、私と本質的に似ている部分があり、意気投合したんですよね。」

由輝子「はい……」

美咲「大宮鈴音ちゃん……。鈴音ちゃんは未来ちゃんの親友でね、その2人は私なんかじゃ手の届かないところにいたんだ。麻雀に関しても、それ以外に関しても……。だから私は必死で2人に追い付こうとしたんだ。……結局届かなかったけどね」

あの美咲さんですら届かない境地にいる大宮さんと未来さん……。2人は一体何者なんでしょうか？

美咲「卒業式の日に行方がわからなくなったんだ。……後輩の杏子ちゃんと一緒に」

由輝子「行方不明……。ってことですか？」

美咲「そう思っておりとあらゆる人脈とかを使って3人を探したんだけどね……。その3人は名前すら存在していないんだ……」

名前すら存在しない……？ どういうことでしよう？

美咲 「多分覚えてるのは私と綾香ちゃん、伊吹先生に未来ちゃんと杏子ちゃんに関わりを持った由輝子ちゃん、あとは3人にお世話になった人……たとえばプロ雀士の宮永照ちゃんにその妹の宮永咲ちゃんだね。それ以外の人達の記憶からは抹消されているんだって」

なんというオカルト……。でも美咲さんの表情を見る限りは本当のことなんですよね。

美咲 「この話はこれでおしまい！ 早く掃除を終わらせてお蕎麦食べよう!!」

由輝子 「……はい」

それから美咲さんはどこか暗い表情をしていました。私が写真を拾わなければ……いえ、もしもの話はやめましょう。

私と彼の誕生日と……

皆さんこんにちは。剣由輝子です。とりあえずこの挨拶をまえがきで書けという突っ込みは全スルーします。

それにしても久し振りすぎて私のことはすっかり忘れてしまったのではないでしようか？

でもまあ無理のない話ですね。作者さんは他の作品に没頭していて、その中にはもう1つの俺ガイルもありますからね。今では私はもう過去の人間なんですね……。

ですが今日この作品に目を通してくれた読者の皆さんのためにも私こと剣由輝子が主人公している姿を是非見ていってほしいものです。

……長くなりましたが、いよいよ本編のスタートです。

由輝子（今日は八幡君の誕生日……。しかも八幡君から大切な話があるとのことです。どんな話かわかりませんが、楽しみと緊張で胸がいつぱいですね）

私はホクホクしながら今日着ていく服を選んでいきます。

どれにしようか迷いますね……。余り時間はかけたくありませんが、八幡君から大切な話があるとなるといい加減な格好もできません。……まあデートの日は服装に気合を入れられますが。

由輝子（決めました……。！今日の服装は私と八幡君が付き合っただけのデート（本編には描写されていない）の時の格好にします）

そうと決まれば急いで支度をしましょう！

くそしてく

八幡君は……いましたね。まだ待ち合わせの時間まで2時間もあるのに……。私も人のことは言えませんが、楽しみだったのでしょうか？

由輝子「八幡君」

八幡「随分早いな由輝子。……まあ俺も人のことは言えんが」

由輝子「待たせてしまいましたか……？」

八幡「いや、俺もさつき来たところだ。今日のデートは何時もより気合いが入ってるからこんなに早く来ちまったがな」

由輝子「楽しみに……してくれましたね」

八幡「ああ、由輝子もな。その服は確か俺達が付き合い始めてすぐのデートで着てた服だよな？」

由輝子「覚えてくれてたんですか？」

八幡「彼女のことを忘れるかよ。とても似合ってるぞ」

これは嬉しいです！初デートのことまで覚えててくれてたなんて。案外初デートのことは忘れられることが多いと情報にありましたので八幡君ならそんなことしないと思いつつ、それでも心のどこかで少しだけ警戒していましたが、当てが外れてよかったです！

……まさか自分の情報が役に立たないことを嬉しく思うとは。今までの私に聞かせてあげたいくらいですね。

由輝子「……ところで八幡君、大切な話とは一体？」

大切な話とやらが気になってデートに集中できない可能性だって決して0ではありませんから早く知りたいのです。

八幡「それは今日のデートが終わってからな」

由輝子「……焦らしますね。私としてはなるべく早く済ませてデートを楽しみたいのですが……」

八幡「……だったら俺は最後までとっておく。今日のデートのメインディッシュでも言っておこう。少なくともマイナスにはならないはずだ」

物事を常に最悪まで考えてしまう私からすると大切な話というのがもしも……いえ、これ以上はやめましょう。メインディッシュを美味しく食べるためにも今日のデートを楽しむことにします！

由輝子「……八幡君が言うならそれで納得します」

八幡「おう、そうしてくれ」

由輝子「はい、そうします」

八幡「……………」

由輝子「……………」

八幡「プツ……」

由輝子「ふふっ……」

八幡「なんかこういうのっていいよな。由輝子と付き合うまでは何処か馬鹿にしていたが、実際自分が当事者になると嬉しくなる」

私と付き合うまでの八幡君はこういった所謂リア充と呼ばれる男女のやりとりを苦手としている印象でしたが、私と恋人になつてそう思うようになってくれたのならば私も嬉しいですね。

八幡「行こう由輝子。早く来た分今日は思いっきり楽しむぞ！」

由輝子「……はいっ！」

今日という1日が最高の日になりますように！

由輝子「あつ、八幡君すいません」

八幡「どうした由輝子？」

私としたことが色々な感情が混ざつて危うく言い忘れるところでした。

由輝子「……誕生日おめでとごうございます！」

八幡「……LINEでこれでもかというくらいその言葉をもらったんだが」

由輝子「こういうのは直接言うものなんですよ。ましてや彼女なら当然です」

八幡「……ありがとな」ナデナデ

由輝子「……いえ／＼／」

ふにやく。八幡君に撫でてもらうのは相変わらず気持ちいいです……。今の私は顔が緩みまくっていますね。

八幡「今度こそ行こう由輝子」

由輝子「はい！」

デートスタートです！

くそしてく

すっかり夕方になってしまいました。デートの描写を省いたのは作者の力量不足ですね。もっと腕を上げて私と八幡君のいちやラブを書いてほしいものです。

八幡「最後に1つ行きたい所がある。そこで話をしよう」

由輝子「……朝に言っていた大切な話ですか？」

八幡「……ああ、大切な……話だ」

由輝子「……わかりました」

八幡「じゃあついてきてくれ」

由輝子「はい」

私は八幡君に連れられてある場所へと来ました。そこに見えたのは……。

由輝子「夕焼け……ですね。とても綺麗です」

夕日が沈み始めてるので更に絶景ですね……。

八幡「ここは俺の穴場スポット……昔風に言うとベストプレイスだ」

由輝子「そうなんです。……それで話とは？」

八幡「その前にLINEで言ったことは覚えているか？」

由輝子「はい、誕生日のプレゼントはいらないと書いてありましたね」

付き合ひ始めて3年弱……。毎年プレゼントを渡したのに今年になっていらないと

言われたのでとても不安だったので……。

由輝子「もしかして今日の話に関係が……？」

八幡「ああ……」スーハー

八幡君が深呼吸をしています。余程大事な話ということがわかりますね。

八幡「……由輝子」

由輝子「……はい」

八幡「俺は由輝子に出会えてよかった。俺にとって由輝子はかけがえのない人生の

パートナーだと……そう思っている。だから……」ゴソゴソ

八幡君が懐から小さい箱を取り出した。まさか……これって……。

八幡「結婚しよう。由輝子」

そう言つて八幡君は私に指輪を差し出しました。所謂プロポーズです。その内容に私は思わず涙が出ました。

由輝子「……………」ポロポロ

八幡「ゆ、由輝子!」

今の私は涙で前が見えないでしょう。嬉しくても涙は出るものなんですね。20年生きていて初めて知りました。

由輝子「……私で……いいんですか……?……私が八幡君の隣で……笑つていても

……………いいんですか……………」ポロポロ

八幡「……ああ、由輝子以外はいない。俺の隣で一緒にいてくれる……人生のパートナーは由輝子しかありえない」

私は未だに涙が止まりません。生きている中で今が一番長く涙を流しているでしょう。

無表情には定評があると言われていた(美咲さん曰く) 剣由輝子ちゃんですが、八幡君と付き合つてからはそんなこともなくなりましたね。

由輝子「ぐすつ……はいつ……!こちこそ……よろしくお願いします……!」二

コッ

涙を流しながらも精一杯の笑顔で私は返事をしました。

八幡「ありがとう……由輝子」

沈む夕日をバックに私達は唇を重ねました。泣いている私を見てもらい泣きをしたのか八幡君にもうつすらと涙が流れていました。

くそして

夕日も沈み星空がとても綺麗な夜になりました。ここは星がよく見えますね。こういった天文デートもいいですね。

由輝子「八幡君、今年の誕生日プレゼントはどうでしたか？」

八幡「……最高の誕生日プレゼントだよ」

曰く今年の八幡君へ送る誕生日プレゼントは『剣由輝子と結婚すること』だそうでした。八幡君がプロポーズをして、私がOKしたらそれが自分にとつての最高のプレゼントであり、これ以上の物はないそうです。

なんだか私がプレゼントをもらっているみたいで申し訳ないですが、嬉しい気持ちで勝っていますね！

『……誕生日プレゼントとしてそれはどうなの？』って皆さんは思いますが、私はそれに

『剣由輝子の全てを比企谷八幡に捧げる』というアレンジを加えました。

由輝子「もしかして八幡君が今までバイト三昧だったのって……」

八幡「ああ、この指輪を買うために今までのバイト代を注ぎ込んでな。美咲さんに店を紹介してもらったりしたんだ」

私達の薬指の結婚指輪を買うために八幡君はバイト代全額を使ったそうです。こんなに嬉しいことはありません！

八幡「……安物ですまん」

由輝子「そんなことありません。この指輪は100カラットのダイヤモンドよりも価値があります」

それは八幡君の愛情です！これはダイヤモンドなんかよりも価値のあるとても素敵な代物なのです！

八幡「由輝子が気に入ってくれてなによりだ」

由輝子「はい！私は今とても幸せです!!」

八幡「……俺もだ」

こうして8月8日は私が八幡君と本当の意味で結ばれるという最高の形で幕を閉じました。

結婚式は私の誕生日に行うそうです。今から楽しみですな！

私とガールズトーク

私は大学近くのカフェにて人を待っています。ちなみに八幡君でも戸塚君達でもありません。さて誰でしょう。

美咲「由輝子ちゃん！」

まあ勿論美咲さんのことですが……。

美咲「ごめん、待った？」

由輝子「いえ、私も今来たばかりですので気にしないでください。それよりもあの人は来れそうですか？」

美咲「うん、今日は久々のオフで此方に帰ってきて連絡したら来てくれるって言うてたよ！」

嬉しそうに美咲さんに語る。あの人も忙しいですもんね。

???「すみません遅れました！」

美咲「私達も今来たところだから大丈夫だよ！」

そう言っただけの先程まで私と美咲さんが話していたもう一人の待ち人。背中まで伸ばしている薄い金髪に碧眼でそれはもうとある魔術のライトノベルで仲間に真つ

二つにされそうなそんな感じの……。

??? 「ねえ由輝子、今失礼なこと考えてない？」

由輝子 「気のせいですよ。それよりも」

??? 「それよりもって……」

由輝子 「いちいち突っ込みを入れないでください。話が進みませんので」

??? 「ねえ酷くない？ 由輝子って実は私のこと嫌いだよね？」

私の肩を揺すりながら聞いているのは綾瀬綾香（あやせあやか）さん。

美咲さんの2つ下の、そして私が1年の時の最上級生で麻雀でプロを目指す人なら知らない人はいないと言っても過言ではないくらいの有名人です。

由輝子 「そんなことありませんよ。綾香さんは私の尊敬する人の1人です」

綾香 「その割にはあんまり敬われていないような気が……」

由輝子 「気のせいです」

本当に気のせいなんですよ。綾香さんは美咲さん達が麻雀部を引退した後からずっと麻雀部を引っ張っていききましたし、綾香さんが高3の時なんかは個人戦で全国2位でしたし、高卒からすぐにプロ麻雀選手になって成績も残しています。

……まあ綾香さんが引退したのを皮切りに他の部員達も次々と辞めていって、それと同時に麻雀部が廃部になったのが残念ですが。

そして美咲さんの後の生徒会長でこれも2年間やっていました。

あと八幡君が綾香さんの大ファンだとか。彼女として嫉妬を隠しきれません。

綾香「……まあいいや。久し振りだね由輝子。それと美咲先輩もお久し振りです」

美咲「本当に久し振りだね。私は一応去年に会ったけど、由輝子ちゃんは……」

由輝子「私は本当に久し振りになりますね。大学生になってからは初めてになりますし、高校時代も片手で数えられるくらいにしか会ってませんから」

高2の2学期以降は会ってなかった筈ですし……。

綾香「あつ、それで思い出したけど今由輝子って彼氏がいるんだって!？」

突如ガールズトークが始まりました。まあ隠すこともありませんので話してしまいましよう。

由輝子「いますけど?」

綾香「さも当然のように……。あれ? 由輝子ってこんな嫌味な子だったっけ?」

由輝子「私がこんな態度を取るの綾香さんだけです。特別です」

綾香「何その嬉しくない特別……。じゃなくって、何時から由輝子にそんな人が!？」

美咲「確か高2の夏休みからだよね?」

由輝子「正確には8月の花火大会の後からです」

綾香「なんと……」

美咲「その時期は綾香ちゃん新人戦とかで忙しかったから伝えてなかったよ」

由輝子「そのまま伝え忘れてしまったんですね」

綾香「美咲先輩からは気遣いを感じるのに、由輝子からはそれが感じられないどころかわざと伝えなかったようにすら思えるのは何故だろう……」

失礼ですね。私だって綾香さんを気遣ってます。

綾香「それで!?どんな人!?」

由輝子「そんなに気になりますか?」

綾香「そりゃあの堅物の由輝子だよ?気になるじゃん!つべーわ。マジで気になるっしょ!」

なんで戸部君みたいな口調になってるんですか……。

綾香「外見は!?やっぱイケメン!」

由輝子「外見をそのまま言いますと顔立ちを整ってますが、死んだ魚のような濁った眼をしていてそれが全てを台無しにしています」

綾香「何それ……?どういうこと?」

由輝子「あくまでも外見をそのまま言っただけにすぎません。ですが彼は優しいです。目に見えない優しさを持っています」

綾香「ふむふむ」

由輝子「私が初めて彼を見たのは高1の頃です。迷子の子供に不器用な優しきを見ていたその時から気になったので、彼の情報を集め始めました」

思えば私が八幡君に興味を持ったのはあの時からでしたね。

綾香「……由輝子って相変わらず情報収集が好きだよ。それって1歩間違えたらストーカーになるよ?」

由輝子「そんなへまはしません。持ち前の影の薄さを活かして情報収集します」

そもそも高校時代も平塚先生に呼び出されるまでは誰にも興味を持たれませんでしたからね。そこから様々な出会いをしたのも今は良い思い出ですね。

綾香「由輝子の情報第1つて感じが鈴音先輩や未来先輩に似てる感じがするんですけど……」ヒソヒソ

美咲「まああの2人は寧ろ存在感バリバリだったけどね」ヒソヒソ

綾香「美咲先輩も人のこと言えませんよ。まんまブーメランが突き刺さってるじゃないですか。今では世界で5本の指に入るくらいの大企業の社長ですし」ヒソヒソ

美咲「それを言ったら綾香ちゃんだつてブーメラン刺さってるよ。今や宮永姉妹に匹敵するプロ麻雀選手じゃん」ヒソヒソ

綾香「いやいや私と美咲先輩は次元が違いすぎますし、まだあの2人には負け越してますから……」ヒソヒソ

由輝子「んんっ……！」コホンッ

ヒソヒソと内緒話が長い2人に私は咳払いをして話を戻します。

由輝子「高2の春頃に彼と出会い、同じ部活に入りました」

綾香「部活って何部？由輝子が1年の頃に私がどれだけ麻雀部に誘っても入らなかったのに……」

由輝子「その件は忘れてください。奉仕部という名称の部活ですね」

綾香「奉仕……？由輝子ってそんな趣味があるの？」

由輝子「厭らしい想像をしたムツツリ綾香さんは置いといて、その部活の活動理念は『飢えた人に魚を与えるのではなくて魚の釣り方を教える』です」

綾香「あれ？またなんか酷いこと言われてような……。え、えつとつまり？」

美咲「つまり生徒の自立を促す……ってことでいいのかな？」

由輝子「はい、その認識で合っています」

部長の雪ノ下さんを始め依頼人から部員になった由比ヶ浜さん、材木座君、戸塚君、戸塚君の依頼から葉山君、三浦さん、海老名さん、戸部君、大和君と大岡君は……まあ置いておきましょう。大して関わってないですし。

川崎さん、夏休みに鶴見さん、2学期から相模さんに立花君。そうそう、あの2人は今絶賛交際中でしたね。あとは一色さんに一色さんの依頼から……かはともかく折本

さん、玉繩君……。玉繩君といえは彼の轆轤回しのような手つきはとルー語は悪い意味で印象的でしたね。

由輝子「彼と同じ部活に入つて活動を通して……。何時しか彼に何らかの感情が芽生えました」

綾香「おお……。思いの外甘酸っぱい」

美咲「聞いててなんか照れちゃうね……」

由輝子「当時はこの感情が何なのかわかりませんでした。彼が他の女性と親しくしていると胸部に痛みが発生してなんだかモヤモヤとした物が心から湧きました」

綾香「それが嫉妬つてやつですね。かつて杏子が未来先輩によくしてたやつ」ヒソヒソ

美咲「でも何時からか杏子ちゃん余り未来ちゃんにそういった表情をしなくなつたよね」ヒソヒソ

綾香「多分未来先輩のことを師匠つて崇め始めてからですね。寧ろ尊敬の念を抱いてました」ヒソヒソ

また美咲さんと綾香さんが内緒話を始めたので、もう一度咳払いをする。

由輝子「話を戻しますとネットや雑誌等でこの感情について調べていく内にそれが嫉妬だと気付きました」

美咲「由輝子ちゃんは何時からそれが好きって感情だということに気付いたの？」

由輝子「感情の正体が好意だと判明したのはあの花火大会の時ですね」

綾香「つまり即決即断でその彼に告白したってこと？由輝子の行動力ってすごいよね」

由輝子「彼は競争率が高かったですから。情報が確定したからにはなるべく早く行動したかったんです」

八幡君に好意があつたのは由比ヶ浜さん。雪ノ下さんにもそれに近いものを抱いていましたね。陽乃さんも怪しいですね。

あとは私が八幡君と付き合うことになつた後ですが、一色さんもそれらしき感情があつたような気がします。一色さん本人は葉山君好きアピールをしていましたが……。

美咲「修学旅行には2人でデートしたんだよね？」

由輝子「そうですね。行き先は京都でしたので、所謂京都デートですね」

綾香「もう完璧なリア充じゃん……。爆発しないかな？」ボソツ

何やら物騒な発言をしている綾香さんに私は話をふります。

由輝子「綾香さんには彼氏はいるんですか？」

綾香「……いると思う？」

由輝子「いないんですか？」

綾香「いないよ！彼氏いない歴〓年齢だよ！」バンバン机を叩きながら抗議するように喚く綾香さん。

美咲「あ、綾香ちゃん落ち着いて……」

綾香「美咲先輩はいいですよ！高校時代はイケメンなサッカー部の部長から告白されてましたもんね!？」

美咲「此方に飛び火した！っていうか綾香ちゃん見てたの!？」

綾香「私にご飯食べようとしたところにいきなり告白現場に行くわすものだからびつくりしましたよ！」

美咲さんと綾香さんが何やら口喧嘩をしていますが、凡そ聞き捨てならない言葉が聞こえましたよ……?」

由輝子「美咲さん」

美咲「由輝子ちゃん……?な、なんだか顔が怖いんだけど……」

由輝子「高校時代に告白されたんですか?なんですかそれ初耳なんですけど?私の情報力を持つてしても手に入らなかったんですけど?」

美咲「当たり前だよ!私誰にも言つてないもん!」

当時中学2年生だった頃の私は自衛手段をメインにしていましたから、美咲さんの情報収集を疎かにしていましたね。その頃の私を悔やみます!

美咲さんが某お米大好きスクールアイドルのように助けを求めたところで今回のガールズトークはゞです。また次回で会いましょう。

美咲「由輝子ちゃんゞないで！」
終わりです。

私と七不思議

今日もいつものメンバーで食事を取っていると仲町さんが突然話題を切り出しました。

仲町「ねえ、この大学に七不思議があるって知ってる？」

彩加「七不思議……？」

八幡「またそんなオカルトチックな……」

由輝子「全くです」

そもそも七不思議なんていうのは根も葉もない噂話が一人歩きして、そこから面白可笑しく広がっただけにすぎません。

彩加「ま、まあまあ……。それで仲町さん、うちの大体にはどんな七不思議があるの？」

仲町「よくぞ聞いてくれました！」

何故そんなに自信满满々なんですか……。

仲町「まずーっ目！この大学の体育館でポンポン……と何か跳ねる音がしているそうです」

八幡「体育館で……?」

由輝子「ポンポンと何かが跳ねる音……」

何故でしょうか? 何処かで聞いた事のある話な気がしてままならないのですが……。

彩加「それってバスケットボールが跳ねている音なんじゃないのかな……?」

仲町「普通に考えたらそうなんだけど、問題は どうしてそんな風に広がったかって事なんだよ」

八幡「確かに……。もう大学生でいい年してんだから、明らかに有り得ないって事くらいわかるもんだと思うがなあ……」

由輝子「そう考えると中々に不自然ですわね」

或いは噂を流した人間がそういったオカルトが好きな可能性もあります。

仲町「2つ目は学校の13階段だよ」

学校の13階段……。これも何処かで聞いた事のあるような……。

仲町「ある生徒が興味本位で本来12段しかない学校の階段を数えているとそこには……!」

彩加「そこには?」

仲町「12段目の次の13階段目はとても柔らかかったんだって……。こんな普通じゃ有り得ないよね。」

由輝子「そこにあつたのは階段ではない柔らかい何かだと……」

仲町「そう！もしも本当だったら恐ろしいよねえ？」

確かに本当だったら恐ろしいもの筈なんですが……。

八幡「な、なんなんだろうな？この何処かで聞いた事がある感じがするのは……」

由輝子「八幡君もそう思いましたか？」

それから仲町さんが話した3つ目の『鳴り響く包丁の音』と、4つ目の『動き出す銅像』もやはり何処かで聞いた事のある話でした。

八幡「つーかこれってよくある七不思議的な感じのもんばつかじゃねえか……」

由輝子「そうですね……。新鮮味の欠片もありません」

仲町「ぐぬぬ……！」

戸塚「まあまあ……」

仲町「じゃあ5つ目！これは聞いた事がない筈！」

自信满满ですね……。

仲町「5つ目はこの大学に蔓延る美少女の幽霊の話！」

八幡「それもなんかありきたりな気もするが……」

仲町「そんなに事ないうよう！その幽霊の特徴は身長が大体145センチ位で、とつても胸が大きいの！あれは巨乳……いや、爆乳だね!!」

彩加「す、凄い興奮してる……」

その興奮っぷりに少し引きまますね……。しかしそんな具体的だと逆に新鮮味が出てきているかもしれません。

八幡「あれ……？何かこれまでとは別の意味で聞いた事があるんだが……」

由輝子「そうなんですか？」

八幡君はどうやら聞いた事のある逸話みたいですが、私はいまいちピンときませんね……。

仲町「あれ？身長145センチで、爆乳の美少女って……」

由輝子「何か心当たりがあるんですか？」

私が聞くと八幡君と仲町さんが冷や汗を大量にかいていました。

仲町「な、なんでもないよ！」

八幡「そ、そうそう！なんでもない！」

何か怪しいですね……。

八幡「そ、それよりも6つ目の七不思議ってなんなんだ!？」

仲町「えっ、えつとね！6つ目の七不思議は5つ目に出て来た美少女の幽霊には御付きのグールがいるって話だよ！」

由輝子「グール……ですか？」

仲町「比喻表現だとは思うけどね。なんでも見た目は怖いけど、美少女幽霊を守護している心の優しいグルンなんだって！」

彩加「あれ？それじゃあ5つ目と6つ目って……」

戸塚君も何かに気が付いたようです。

由輝子「戸塚君、何かわかったんですか？」

戸塚「う、ううん！何もわからないよ！」

怪しい……。

戸塚「それよりも！7つ目の不思議を聞きたいな！」

仲町「な、7つ目だね！」

流されました……。八幡君も何かホツとしている様子ですし、気になりますね。

仲町「……7つ目は人呼んで『7つ目の災い』！」

戸塚『7つ目の災い』……？』

八幡「……ここにきてまた何処かで聞いた事のある逸話だな」

由輝子「そうですね。肩透かしを食らった気分です」

仲町「七不思議なんて案外そういうものかもしれないね……。何で私あんなに力説し

ていたんだろ……？」

何時の間にか仲町さんの興奮ボルテージが収まっているのが感じとれました。人を

興奮させる程の話……。興奮している様子はまさに取り憑かれているという表現が正しいでしょう。仲町さんの先程までの様子がそうでした。

由輝子（これが本当のオカルト……。なのかもしれないね）
まあそんなオカルト有り得ませんが。

私と麻雀 前編

剣由輝子です。私は今置いてけぼりの状態になっています。

綾香「へえ〜。八幡君は高校時代はネットマ中心で麻雀を打ってたんだ？」

八幡「そ、そうですね。だからプロ選手とかで見るオカルトには余り縁がありませんが……」

綾香「それなのに私のファンって言うのが嬉しいねえ！ネットマ打ちなら、大体は『のどっち』のファンなのに……」

八幡「いえ、俺からすれば『のどっち』は打ち方が綺麗過ぎるんですよ。あれも一種のオカルトだと思っています」

綾香「成程ねえ〜」

……このように八幡君が綾香さんに取られています。NTRです。

美咲「え、えつと……。由輝子ちゃん大丈夫？」

由輝子「何も問題ありません。八幡君が私の彼女である事を忘れてさえいなければ……」

まあ私は八幡君の事を信用していますし、八幡君自身も綾香さんに対しては一人の

ファン……という認識でしかなさそうですので、特に問題はないでしょう。……ないと
思います。

美咲「ああっ！由輝子ちゃんがどんどんネガティブに!?」
こうなってしまったのは今から2時間前の出来事……。

由輝子「八幡君、今日は何処に行きますか？」

八幡「由輝子は何処か行きたい所はないのか？」

由輝子「私は八幡君と一緒になら、何処へもお供します」

それが……八幡君の彼女としての務めですからね。

美咲「あれ？由輝子ちゃんと八幡君だ！」

由輝子「美咲さん……。今日はオフですか？」

美咲「うん！だから今日は久々に綾香ちゃんと麻雀打とうかなって思ってた雀荘に行くうと思ってるんだ。綾香ちゃんも今日はオフみたいだしね♪」

美咲さんもそうですが、綾香さんもオフなのは珍しいですね。しかも同日に重なるなんて……。

美咲「2人はこれからデート？」

由輝子「そうですね。これから何処へ行くとか2人で悩んでいるところですよ」

こうして2人で行き先を悩むのもデートの醍醐味ですね。柄にもなく頬が緩んでし

まいます。

綾香「美咲先輩、お待たせしました！」

美咲「そんなに待ってないよ。気にしないで」

綾香「……ってあれ？由輝子もいるじゃん。奇遇だね」

由輝子「こんにちは」

綾香「それで由輝子の隣にいるのって……前に言ってた由輝子の彼氏!？」

八幡「ビクッ」

綾香「ほーほー。成程成程……。確かに由輝子の言ってた通りだね。幾度も修羅場を
潜り抜けてる歴戦の戦士って感じもする……」

由輝子「綾香さん、そこまでにしておきましょう」

綾香「おつとつと……。ごめんね？」

八幡「いえ……。あ、あによ……。！」

綾香「？」

美咲「？」

八幡「サ、サインくだしやい！」

そうでした。八幡君は綾香さんのファンでしたね……。だから何処か緊張していて、
台詞も噛み噛みなんですわね。

綾香「えっ？私の……？」

八幡「は、はい！綾瀬プロのサインがほしいです！」

由輝子（八幡君と恋仲になって数年……。こんな一面もあるんですね）

八幡君の新たな一面を見れたと喜ぶ反面、少し嫉妬してしまいます。

それから今まで八幡君は綾香さんと麻雀で談義しており、私と美咲さんは空気です。

綾香「ねえ、由輝子って麻雀打ってたよね？」

由輝子「嗜む程度ですが……」

綾香「じゃあ今からこの4人で打とう！」

突如、私達4人で麻雀を打つ事になりました。現役トッププロとして活躍している綾香さんに私達が勝てる訳がないじゃないですか……。

私と麻雀 中編

剣由輝子です。唐突ですが、麻雀を打つ事になりました。

面子は私、八幡君、美咲さん、綾香さんの4人で卓を囲みます。

綾香「それじゃあ親決めしよっか！」

東、南、西、北の4枚を綾香さんが目を瞑りながら混ぜ、それから約10秒が経過してから……。

綾香「はい！皆選んで良いよ！私は最後にするから」

美咲「由輝子ちゃん、八幡君、先にどうぞ！」

八幡「由輝子、選んで良いぞ」

あれよあれよと順番が決められたので、私、八幡君、美咲さん、綾香さんの順番で場所決めを行います。

由輝子「……南ですね」

八幡「北」

美咲「私が西……という事は？」

綾香「えっ？私が起家？良いの？本当に？」

由輝子「余ったのがそれなのでしたら仕方ないでしょう」

綾香「良いのかな？この東一で全員飛ばしちゃうかもよ？」

……綾香さんが凄く調子に乗っています。ですが決まってしまったものは仕方ありません。

綾香「それじゃあスタート！サイコロ回れ〜♪」

麻雀開始です。

〜東一局 親 綾瀬綾香〜

由輝子（配牌は悪くありませんね。断么九と平和が狙えます）

3向聴スタートなのも素晴らしいです。早めに聴牌まで持っていけますね。

綾香「立直！」タンツ

由輝子（……と思っていたら、いきなり親リーが飛んできましたね）

しかもダブル立直という……。喰い断狙いなら鳴けますが、まだ様子見ですね。

由輝子（幸い現物はありますし、合わせておきますか）タンツ

美咲「早いね〜！」タンツ

八幡（安牌ねえな……。まあこんな当たったら事故だろ）タンツ

1 巡目は綾香さんのダブル立直を避けていきましたが……。

綾香「よし来た！ツモツ！」

八幡「一発つすか……」

由輝子「ダブル立直、自摸、一発、ドラ2……跳満ですね」

綾香「6000オール!!」

点数は25000点スタートなので、綾香さんが43000、私達が19000になりました。なんとか独走を止めたいところですが……。

く東1局1本場 親 綾瀬綾香く

美咲「ロンツ！」

綾香「うえ!?早くないですか!?!」

美咲「綾香ちゃんには言われたくないんだけど……。対々、三暗刻、断么九、ドラ3

……16300!」

綾香「しかも高つ！貯金殆ど失くなっちゃったよ……」

しかしその1本場の8巡目で美咲さんが綾香さんから出和り。美咲さんが35300、綾香さんが26700、私と八幡君が変わらずですね。

由輝子「しかし全員トビ宣言をしておきながら、あっさりとそれが破られる綾香さん……」

綾香「うっ……！み、美咲先輩は高校時代、全国トップクラスの選手だったし？仕方ない部分はあるんだよ！」

由輝子「この中で現役で麻雀を続けているのは綾香さんだけ……」

綾香「あーあー！聞こえない聞こえない！良いから続けるよ!!」

美咲「あ、綾香ちゃん落ち着いて……」

く東2局 親 剣由輝子く

由輝子（親番なので、とりあえず速度重視にしましょうか）

役牌とドラが1つ……。速攻を目指すのなら、充分でしょう。

くそしてく

由輝子（2副露の甲斐あって、聴牌まで漕ぎ着けましたね。しかも混一色です）
対々も付けるべきか、確実に和了る為に広く待つべきか……。

由輝子（後者なら三萬と六萬待ち、対々込みを目指すのならもう数巡待つ必要がありませんが……）

綾香「タンツ

由輝子（その必要もなさそうですね）

由輝子「ロンです」

綾香「げっ!?張ってたか……」

由輝子「混一色、発、ドラ1で親満（12000）頂きます」

綾香「最下位に転落して痛いんだけど……」

綾香さんへの直撃で2位浮上ですね。点数も31000になりました。このまま連荘……。

八幡「ツモ。1600、3200は1700、3300」

出来ませんでした。八幡君の黙聴に気付きませんでした。そして局は進んでいき……。

綾香「ツモ!2000、4000!!」

美咲「ツモ!3000、6000!!」

東3局では綾香さんが満貫を、東4局で美咲さんが跳満を自摸和り。試合は一気に南入です。

綾瀬綾香	1	8	0	0	0
劍由輝子	1	7	7	0	0
佐野美咲	4	5	6	0	0
比企谷八幡	1	8	7	0	0

私と麻雀 後編

南入して再び綾香さんの親番です。

綾香「よしよし！今度こそ綾香ちゃん劇場の開幕なのだ！」

綾香さんが張り切っていますね。この中で唯一の現役プロ選手が……。

ちなみに点数は……。

綾瀬綾香	18000
剣由輝子	17700
佐野美咲	45600
比企谷八幡	18700

このようになっていきます。トップの美咲さんが2位以下と倍以上の点差ですね。

〈南1局 親 綾瀬綾香〉

由輝子「それロンです」

綾香「早いんだけど……」

8巡目に黙聴してました。安めですが和了ってしまいましたしょう。

由輝子「平和ドラ1で20000点頂きます」

高めだと39000点でしたが、この巡目で和了れたのなら、何も問題はないでしょう。

一応2位浮上です。

綾瀬綾香 18000—20000||16000

剣由輝子 17700+20000||19700

く南2局 親 剣由輝子く

八幡「リーチ」

河が2段目の後半で八幡君がリーチ。私の親番が流れてしまいましたそうですね……。

比企谷八幡 18700—10000||17700

綾香（とりあえず安牌と……）

美咲（今回は降りかなあ。でもワンチャン攻めれる……う？）

由輝子（あと一向聴なのですが……）

聴牌を取ろうにも安牌がなくなってしまうからね。トップとの点差もありますし、ここは勝負していきましようか。

由輝子「リーチです」

剣由輝子 19700—10000=18700

綾香さんには振り込まないでしょう。八幡君と勝負予定ですね。

美咲「ツモ！」

……とと思ってた時期が私にもありました。降りていたと思っただら張ってたんですね。

美咲「ごめんね？1000、2000だよ！」

八幡「マジか……」

綾香「愛宕洋樓選手みたいな和了り方してる……。こんなの美咲先輩じゃない!!」

美咲「失礼だよ？」

綾香「サーセン……」

愛宕洋樓選手といえれば現役で活躍している防御力が優れたプロ雀士ですね。確かに私の和了り牌を4枚取り込んでいます。八幡君の手牌を見ると、これまた八幡君の和了り牌を3枚握っています。確かに高校時代の美咲さんではありえない打ち筋ですね。

綾瀬綾香 160000 | 10000 || 15000

剣由輝子 187000 | 20000 || 16700

佐野美咲 456000 + 40000 + 20000 || 51600

比企谷八幡 177000 | 10000 || 16700

残りの局は特に見せ場もなく、美咲さんが無双していきました。

綾香「燃え尽きたよ……。真っ白にな……」

美咲「綾香ちゃん……」

綾香さんがどこそのボクサーのように白く燃え尽きています。

美咲「えつと……。そろそろ出よつか？」

綾香「もう一回……！」

美咲「えっ？」

綾香「もう一回やりますよ！このままじゃあ終われませんよ!!」

由輝子（綾香さんに火が点いてしまったようですね。先程まで燃え尽きていたのに

……）

八幡（まあ俺等も不完全燃焼みたいな部分もあるし、付き合っても良いんじゃないかね？）

八幡君も特に反対してないので、数回だけやりましょう。

……。

雀荘の閉店時間までやりましたが、綾香さんは1度も美咲さんには勝てませんでした

佐野美咲 A√

プロローグ 少年は絶望の淵に沈み女性は少年を必死で助ける

俺が一体何をしたというんだ……？学校に行けば周りに苛められて、家の中でも俺の居場所はない……。こんな俺が生きている意味があるのだろうか？

目の腐った少年比企谷八幡（ひきがやはちまん）は学校での苛めや自宅ですら疎まれた存在だった。

八幡（俺の人生ってなんだったんだ……？誰かに苛められる為にあつたのか？誰かの都合の為にあつたのか？）

考えながら歩いている内に俺は海に来ていた。

八幡（こんな季節の海はさぞ冷たいだろう……）

でも……もういいや。生きていても良い事は何も無い。だったら来世に期待しても良いよな？

そう思い俺は海へと歩いている。

s
i
d
e
i
n

s
i
d
e
o
u
t

八幡（呆気なかつたな……。プロのボツチが聞いて呆れる）
そして俺は意識を手放した……。

私は今友達と海の近くまで来ている。家までの帰り道だ。

1 「♪」

2 「御機嫌ですね」

1 「うん！由輝子ちゃんと一緒に帰れるのが嬉しいんだ♪」

友達の名前は剣由輝子（つるぎゆきこ）ちゃん。年は私の4つ下だけど、数いる友達の中でも1番付き合いが長いんだよ！

由輝子「そう言われると嬉しいですが、他の人達はどうしたんですか？美咲さん」

由輝子ちゃんが私に訪ねる。自己紹介がまだだったね。私は佐野美咲（さのみさき）だよ。……あれ？誰に言ってるんだろ？まあ良いや！

美咲「皆用事があるからね……。由輝子ちゃんは友達と帰らなくても良いの？」

由輝子「学校に友達はいませんよ。極力存在感を消していますから……。美咲さん達だけです」

美咲「私達の事を大切に思ってくれてるのは嬉しいけど、やっぱり友達が少ないのは寂しいよ……」

由輝子「下心ありきで近づく人とは御断りですね。美咲さんが言うところの『本物』の関係を築けそうにありませんから……。それは美咲さんもそうでしょう？」

確かにそうだね……。私は『偽物』の関係が嫌い。でも家柄が家柄だから自動的に『偽

物』の関係が出来上がる。

別に家の仕事が嫌という訳じゃない。寧ろ将来は家の仕事を継ぐつもりでいる。だから下心を持って接してくる人達にも対応はするんだけど、そこから生まれる所謂政略結婚は嫌だな……。

やっぱり結婚するなら『偽物』じゃなくて『本物』が良い。

由輝子「だから私にとつての『本物』は美咲さん達だけです」

美咲「ありがとう！」

由輝子ちゃんは無表情な子だけど、とつても可愛いんだよね。私の一時期の支えだったよ……。それこそ私の『本物』は由輝子ちゃんだけだった。でも今は増えた。私のかげがえのない『本物』は。それだけで充分だよ。……女の子ばかりだけどね。

由輝子「おや……？」

美咲「どうしたの？」

由輝子「海に誰かが入っていきます」

美咲「由輝子ちゃん見えるの？」

由輝子「はい。裸眼だと見えすぎますのに……」。

由輝子「はい。裸眼だと見えすぎますので、眼鏡やコンタクトで視力を抑えてるんです。ちなみに入っているのは男性ですね」

なんか由輝子ちゃんはまるで某剣道漫画の主人公の男の子みたいだね。……つていうか今の時期に海は寒いよ？

由輝子「……しかも服を着ていません。着衣水泳という訳でもなさそうです」

美咲「それって……っ!?!」

まさか自殺……?この時私の頭に一言が過った。

『さようなら』

美咲「っ!駄目!駄目だよ!!」

由輝子「美咲さん!?!」

次の瞬間私は走り出した。見て見ぬふりなんて出来ない。してしまったら一生後悔するもん!

私は海に入り沈んでいく彼を助ける。

美咲（冷たい……。冷たさのあまりに意識が飛びそう……。でも彼を死なせるもんか!）

海の冷たさに、そこからくる寒さに負けずに私は彼を陸へ連れ戻した。

八幡「……………」

改めて男の子を見る。由輝子ちゃんと同年ぐらいかな？

由輝子「彼は……………」

美咲「知ってるの？由輝子ちゃん」

由輝子「同じ学校の生徒です」

私の質問に答えた由輝子ちゃんは彼の心臓に耳を近付ける。

由輝子「……息をしません」

美咲「そんな……！」

間に合わなかったの!?もつと……もつと早くに彼を見付けていたら助けられたかもしれないのに……!

由輝子「……心臓マッサージや人工呼吸をすればもしかしたら」

美咲「本当!?!」

由輝子「美咲さん……?」

美咲「だったら私が……！」

そう思って彼の顔に近付けて心臓マッサージを開始した。でも彼が息を吹き返す様子は……。ならばは人工呼吸。もう形振り構ってられないよ!

それから数分……。

八幡「がはっ!げほっ……！」

由輝子「息を吹き返しました!」

美咲「良かった……。あとは吸い込んだ水分を吐き出すだけだね!」

私は絶対に彼を助けてみせる……！！

第1話 少年は泣き女性は受け止め2人は羞恥で悶える

八幡「がはっ！げほっ……………」

俺は生きているのか？死ぬことが出来ないとはな…………。ぼやけた視界が段々晴れてきて、目を開けると1人の女性が俺の顔を除き込んでいた。

美咲「気が付いた！良かった…………！本当に良かったよ！」

女性は目に涙を溜めながら俺が意識を取り戻した事を喜んでいるようだ。

美咲「此方で暖を取ってるからゆっくり暖まってね！」

八幡「は、はい……………」

状況が掴めず、確認の為に女性を見てみる。

身長は160センチないくらいか…………？顔は可愛い系とも取れるし、綺麗系とも取れる。さつきの涙目と直後に見せた笑顔に見惚れてしまったのは内緒だ。

…………いかにいかに！雑念を振り払え俺！そんな目で俺を助けてくれた人を見るもんじゃない。

美咲「くしゅっ！うう…………。やっぱりこの時期の海は冷たいね。翌日風邪引きそう……………」

助けてくれた……？待て。さっき俺は海に入って自殺を試みたんだぞ？しかも見ず知らずの俺を助けたのか？

八幡「な、なんで……」

美咲「ん……？」

八幡「なんで俺を助けたんですか？」

只々疑問だった。俺なんか生きている価値もないだろうに。

美咲「……わからない」

わからない……？どういう事だ？

美咲「でも私は君を死なせたくなかった。理由は知らないけど、君は自殺しようとしてたんでしょ？」

八幡「はい……」

俺が自殺しようとしていた事は見透かされている訳か……。

美咲「私はそれが嫌だった……。このまま君を死なせてしまうと一生後悔する……そう思ってたら体が動いてたんだ」

えへへとはにかむ女性はそれだけで絵になる。1枚の絵画が俺の目の前に現れたのかと錯覚してしまう程だ。

すると女性は真剣な顔付きで俺を見上げる。

美咲「……君は自殺しようとしてたんだよね？」

八幡「はい……」

美咲「それは自分の人生に絶望したの？」

八幡「えつと……。言ってる意味が……」

言ってる意味がわからん。確かに俺に対する苛めは当たり前になっただけで、人生には絶望したし、失望もした。この女性の真意はわからないけど、何故かこの人なら話しても良いんじゃないかと……思えてしまう。

八幡「……はい。多分俺は自分の境遇が嫌で、何もかも捨ててしまおうと思っ
ていま
す」

美咲「そっか……」

女性は俯く。そして顔を上げて俺の手を握って……。

美咲「それなら君の人生を私に頂戴。君にどんな困難が待ち受けようとも私が君を守
るから！」

八幡「え……」

何を言われたかわからない……。でもその言葉をトリガーに涙が止まらない。

八幡「あれ……。なんで涙が出てくるんだ。どんな酷い目に遭っても、涙を流す事な
らな
ってなかつたのに……！」

美咲「……私は君に何があつたのかは知らないし、聞かない。でも泣きたい時は泣いても良いんだよ?」

その言葉で俺は大きく泣いた。彼女に胸を貸してもらい泣いた。こんなに泣いたのは何時ぶりだろうか……?

くそしてく

落ち着いた俺は女性の胸に顔を埋めて泣いていたのを思い出しては心の中で身悶えている。ああ恥ずかしい!なんで俺はあんな事を……!

八幡「すみません……」

美咲「気にしないで良いよ。君にも色々あつたんだよね?それこそ自殺したくなる程に……」

八幡「そう……ですね」

そういえばこの人はさつきとんでもない事を言っていたような……。

八幡「あの……」

美咲「どうしたの?」

八幡「さつきの発言って本気なんですか?」

美咲「えっ?さつきの発言……!!」

女性は自分の発言を振り替えると突如顔を赤くして両手で覆い始めた。

s i d e o u t

s i d e i n

八幡「さっきの発言って本気なんですか？」

助けた男の子が聞いてくる。さっき……？

美咲「えっ？さっきの発言……!!」

ああああああ！わ、私はなんて事を!!あれじゃあポーズ同然だよ！

多分今の私の顔はとて赤いだろう。顔を両手で覆ってるけど、絶対に赤い顔を見られてるよ……。

由輝子「先程のプロポーズは大胆でしたね。美咲さん」

八幡「うおっ!!」

美咲「ゆ、由輝子ちゃん!? 一体何時から見てたの……?」

由輝子「何を言ってるんですか。私はずっと美咲さんと一緒に行動してましたよ」

そうだった……。由輝子ちゃんは自身の気配を消す事が出来るんだった。誰が教えただらう?

八幡「え? ずっと……? じゃあ俺が泣いていたのも……」

由輝子「勿論見てました」

男の子の方も由輝子ちゃんがずっと私の側にいた事がわかって顔を赤くして身悶えした。……うん、その気持ちよくわかるよ。

八幡「それにしてもこの俺を上回る存在感の薄さだと……?」

美咲「そこが気になるの……?」

由輝子「彼は私と同じタイプですので、その点が気になるのもわかります。それよりも自己紹介をした方が良くないですか? 美咲さんもプロポーズをしたのが名前も知らない男の子だと色々問題がありませんか?」

た、確かに……。プロポーズ云々は置いておいて、あんな事を言った手前名前も知らないのは問題かも。

美咲「じゃあまずは私からだね。私は佐野美咲だよ！よろしくね!!」

八幡「は、はい。比企谷八幡です……」

比企谷八幡君……。そういえば由輝子ちゃんと同い年で同じ学校なんだっけ？

由輝子「最後は私ですね……。剣由輝子です。よろしく御願います」

美咲「全員の自己紹介が終わったところで……」

由輝子「それよりも先程の美咲さんのプロポーズについて色々と聞きたいんですけど……」

美咲「プ、プロポーズのつもりじゃ……。でもこれ以上話すとすると八幡君に事情とかも聞かないといけない訳だし、八幡君も初対面の私達には話したくないだろうし……」

うん、我ながら完璧な言い訳だね！八幡君のプライベートを守りつつ、私と八幡君にとって恥ずかしいシーンも忘れられる……。

八幡「……俺は別に構いません。それに佐野さんに言われた事がとても嬉しかったです」

……まあそんな気はしてたよ？勢いで言っちゃった感はあるけど、あの言葉に嘘偽りはなく本気で八幡君を支えたいって思ったからね。

美咲「……わかった。此処じゃなんだし、家に来て。ゆっくりと話そう？」

八幡「そうですね……」

由輝子「そうと決まれば早速行きましょう」

八幡君も了承したので、私は電話でタクシーを呼んだ。それよりも由輝子ちゃん、心なしかワクワクしてない？